SICオーズIN戦姫絶唱シンフォギア

クロトダン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

定番の神様転生でくじを引き、
仮面ライダーオーズ（ＳＩＣ版）の力を手に入れて、
更にシンフォギアという原作を知らない世界に強制的に転生させられた。
その上、見た目ＳＩＣ版のオーズの姿だから助けた人達から化け物と呼ばれる日々。

・・・泣いてもいい？

目次

正月ネタ
初夢と奇跡と魂コンボ ―― 1
ルナアタック編
ＳＩＣオーズＩＮ戦姫絶唱シンフォギア ―― 14
歌と再開と増殖コンボ ―― 19
予感と知識欲と灼熱コンボ　前編 36
予感と知識欲と灼熱コンボ　後編 48
襲撃と奪われたメダルと重力コンボ 68
フィーネの目的と社長の思惑と空間断裂剣 ―― 87
フィーネと魔王とカ・ディンギル 109
奇跡と唄と不死鳥コンボ ―― 125
終わりと始まりと新たな欲望 ― 150
フロンティア編
ハイテンションと列車と虎とらトラ 157
宣戦布告と廃病院と復活の巫女 176
文化祭と選択とカプセルライダー　前編 ―― 193

文化祭と選択とカプセルライダー　後編 ―― 207
過去の残滓と憎悪と黒いコアメダル 223
説教と暴食と紫の兆候 ―― 234

正月ネタ
初夢と奇跡と魂コンボ

魔法少女事変が終結してから数週間後、平和を満喫してた装者達の前に全身黒タイツに身を包んだ男達に追われている天羽奏に似た少女を助け、S．O．N．G．に保護すると――

「この世界に闇が近づいているの！お願い、あいつらからお父さんとお母さんがいるこの世界の未来を守って！」

――と、手を組んで怯えながら司令室にいる面々にこの世界の危機を伝える。

その言葉の通りに平和を取り戻した街に空から謎の巨大飛行物体が現れた！

突然街の上空に現れた巨大飛行物体から異形の怪人達が街に降りた後、怪人達は暴れだし建物を破壊して街の人々に襲いかかった！

暴れている怪人達を止める為にS．O．N．G．から出撃したシンフォギア装者達と仮面ライダーオーズ。

だが、怪人達の前に彼女達の歌が通じず次々と地に倒れていく装者達。
オーズは倒れた装者達を庇いながら応戦するも怪人達の数に押され、彼のコアメダルが敵の手に渡ってしまった。
オーズと装者達を倒した怪人達は公共の電波を乗っ取り、
「自分達は別の世界からやって来た悪の組織、大ショッカーである！」
と名乗り、この世界を征服しに現れたと口にした。
大ショッカーは手始めに東京の首都を攻め混み、公共機関を封じ、そこを中心に次々と各国を征服し始めた。
大ショッカーの世界征服を止める為、オーズと装者達はもう一度大ショッカーに攻撃を仕掛けてみるが、大ショッカーはオーズから奪ったコアメダルを解析して産み出したショッカーグリードを差し向けオーズ達を撃退した。
更に大ショッカーはコアメダルを利用して他のグリードを産み出しオーズ達に差し向けた！
疲弊した状態のオーズと装者達に襲いかかるショッカーグリードと他の虫系、猫系、水棲系、重量系のグリード、そして大ショッカーの戦闘員達。
敵の手により傷付いていく装者達を守る為にオーズは自身の身に宿る紫のコアメダルを使用して大ショッカーに一人立ち向かう。

だが、紫のコアメダルによるコンボによりショッカーグリードや他のグリードを倒し、残った敵を蹴散らし続けるオーズの前にオーズにそっくりな戦士がオーズの前に立ち塞がる。

その戦士の名はヘキサオーズ！

オーズの持つコアメダルを解析して生成した悪の組織の力が宿した六枚のコアメダルを使った、大ショッカーの首領が変身したショッカーライダーだ！

オーズは紫の斧を振り上げ、大ショッカー首領が変身ヘキサオーズに攻撃するが――

オーズの斧を軽々と弾き飛ばしたヘキサオーズは背中から生えた刃が付いた触手でオーズの身体を切り裂き、オーズの持つ紫のコアメダルが破壊された！

紫のコアメダルを破壊されオーズの変身が解け生身の姿に戻ってしまった。

オーズだった青年を庇おうと装者達は前に出るが、ヘキサオーズから繰り出される攻撃により吹き飛ばされ変身が解けてしまう・・・。

ヘキサオーズは青年に近づき彼に「あの女共の命を助けたければ、降伏して我らの仲間になれ」と悪魔の囁きをした。

その言葉を聞いた天羽奏はヘキサオーズの言葉に乗るな！と叫ぶが、すぐに戦闘員に押さえ付けられ他の装者達も戦闘員に押さえ付けられる。

なかなか首を縦に振らない彼にヘキサオーズは側にいたジェネラルシャドウに装者

達の命を絶てと命じた。
　ジェネラルシャドウはそれに従い腰に差したシャドウサーベルを抜き、装者達にゆっくりと近づいて行った・・・。
　それを聞いた青年はやめろと立ち上がりながら叫ぶが、ヘキサオーズは彼の足を払い地面に倒れた彼の頭を踏みつけ彼女達が殺されるのを黙って見せつける。
　そうしてる間にジェネラルシャドウは天羽奏の前に立ち、シャドウサーベルを彼女の首に突き付ける。それを見た装者達は彼女を助けようと身体を捻るが、生身の彼女達の力が身体を改造した戦闘員の力に敵わない。
　青年は手を伸ばして必死に天羽奏の名前を叫び続けた。
　その姿を見たジェネラルシャドウはニヤリと笑った後、シャドウサーベルを振り上げ天羽奏の喉を切り飛ばそうと振り下ろした・・・その時！
「待ていっ！」と何者かの声が聞こえた瞬間、シャドウサーベルの刃先が天羽奏の喉に当たる直前に留まり、処刑を邪魔されたジェネラルシャドウはシャドウサーベルを下げ、「何者だ!?」叫び辺りを見渡すと・・・。
　破壊された道路の先から三台のバイクに乗った人物達が彼らの前に現れた！
「むぅ!?貴様ら、生きていたのか!!」
　この場に現れた彼らの姿を見たジェネラルシャドウは驚きの声をあげた。

そう何故なら――

「そこまでだ！大ショッカー首領！いや、ヘキサオーズ！」

「この世界をお前達の好きにはさせない！」

「例え何度倒されようと、この世に悪が存在する限り・・・俺達、仮面ライダーは不滅だ！」

仮面ライダー1号、仮面ライダー2号、そして仮面ライダーＶ３。伝説の昭和ライダーがバイクから降りて、ヘキサオーズ率いる大ショッカーに指を指す。

「ぐ、だが！たかが三人増えた所でこの数を相手にできるのか!!」

「ふ、忘れたのか？ヘキサオーズよ」

ヘキサオーズの言葉を笑うように仮面ライダー1号はヘキサオーズに声をかける

「貴様の知る仮面ライダーが俺達だけと思っているのか？」

「何ぃ？・・・ま、まさか!?」

仮面ライダー2号が言った言葉を聞いてその意味を解ったヘキサオーズは驚きの声をあげた！

「そうだ！ライダーは俺達だけではないとな!!」

Ｖ３の言葉の後に彼らの背後から銀色のカーテンが現れると、そこからライダーマン、Ｘ、アマゾン、ストロンガーと1号達を含めた栄光の七人ライダーの他に

スカイライダー、スーパー1、ゼクロス、ブラック、ブラックRX、真、ZO、Jの昭和ライダー達が姿を現し、

続いて彼らだけではなく、平成で最初に誕生した仮面ライダー、仮面ライダークウガを筆頭にアギト、龍騎、ファイズ、ブレイド、響、カブト、電王、キバ、ディケイド、W、フォーゼ、ウィザード、鎧武、ドライブ、ゴースト、エグゼイド、ビルド、そして仮面ライダージオウの平成ライダー達が姿を現した。

「馬鹿な!?何故この世界に仮面ライダー共が現れる!?この世界に来れないように時空凍結装置の効果は切れてない筈、まさか・・・!誘導したと言うのか・・・!貴様ら仮面ライダー共をこの世界が誘導したのか!!」

ヘキサオーズがライダー達に問いかけるとその質問に仮面ライダーウィザードが前に出てきて答えた。

「さあ?俺達もよく解ってないけどさ、声が聞こえたんだ。『お父さんとお母さんの未来を救ってください』って子どもの泣いた声がな。なら俺はその子の絶望を希望に変える為にその思いに答えた」

「そうだ!子どもはなお父さんとお母さんと一緒に笑うのが一番だ!その幸せを奪うってんなら・・・俺がまとめてタイマン張らせてもらうぜ!!」

ウィザードに続いて仮面ライダーフォーゼが大ショッカー達に向けて拳を向ける。

「おばあちゃんが言っていた、子供は宝物・・・。この世でもっとも罪深いのは、その宝物を傷つける者だ。とな」
「その宝物を傷つけようとしたお前達の罪は重いぜ?なあ、フィリップ?」
『ああ、翔太郎』
「『さあ、お前達の罪を・・・数えろ!』」
右手の人差し指を天に向けゆっくりと上に上げる仮面ライダーカブトと左手をスナップさせてから左手を大ショッカーに向ける仮面ライダーW。
「えーと、なんだかよくわからないけどさ・・・」
平成最後の仮面ライダー、仮面ライダージオウが頭をかいて大ショッカー達に声をかける。
「お前達がスッゴク悪い奴だってことは・・・」
「大体わかった」
「ちょ、それ俺のセリフ!ってあれ?なんであんたがここにいるの!?」
ジオウの言おうとしたセリフを被せたディケイド、そのディケイドの姿を見たジオウは驚いてディケイドに質問する。
「見たか大ショッカー!お前達がどんな手を使って私達の前を塞ごうと!」
「世界が違っても、俺達仮面ライダーを呼ぶ声がある限り・・・何度でもお前達の野望を

止めてみせる！」
　最後に仮面ライダー1号と2号がヘキサオーズ率いる大ショッカーに声をかける。
「グググ、貴様ら・・・一体、何者だ!!」
　二人の気迫に思わず後退したヘキサオーズは仮面ライダー達に問いかけるとその質問に仮面ライダーディケイドは待ってましたと前に出る。
「何者だと?決まってるだろ?俺達は・・・」
「通りすがりの仮面ライダーだ!覚えておけ!!」
「いくぞ！」
「「「「「おう!!」」」」」
　1号の声を筆頭に仮面ライダー達が大ショッカーに向けて駆け出した！
　仮面ライダー達が迫って来るのをみたジェネラルシャドウはせめて装者達命を奪おうとシャドウサーベルを奏に振り下ろそうとしたが、仮面ライダーストロンガーが飛び掛かりジェネラルシャドウを奏から引き離し、
　その隙にブラック、アマゾン、カブト、フォーゼが装者達を拘束している戦闘員達を倒し装者達を助け、装者達は礼を言った後彼らと共に大ショッカーに立ち向かう！
「グググ、おのれ仮面ライダー共め・・・!」
「セイヤッ！」

「何！貴様は・・・グハッ!?」

ヘキサオーズの隙をつき蹴り飛ばして青年を助けたのは、姿が少し違うもう一人の仮面ライダーオーズが彼に手を伸ばした。

青年はもう一人のオーズにどうしてここにと質問するともう一人のオーズはその質問に答えた。

「誰かが助けてと手を伸ばしてきたら、俺はその手を何度でも掴み続ける。例え、世界が違っていようとね。君は何の為に戦うの?」

その言葉を聞いた青年は笑みを浮かべてその手を掴み立ち上がる。

「俺が戦う理由は、奏達と共に生きる明日を掴む為に戦っているんだ！だから、だから俺に力を貸してくれ！変身！」

――タカ！

――トラ！

――バッタ！

――タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バッ!!

立ち上がって変身したＳＩＣオーズともう一人のオーズが共に並び立ち、ヘキサオーズに向けて駆け出した!

ヘキサオーズは二人のオーズを迎え撃とうと背中に付いている刃の触手を彼らに向けて放つが二人のオーズはメダジャリバーを振るい弾き飛ばし、その懐に潜り込んでヘキサオーズの身体を斬り裂いた!

身体を斬られたヘキサオーズのヘキサオーズドライバーがその衝撃により一枚のメダルが弾き飛ばされた。

ＳＩＣオーズはそれを掴み確認すると鷲の紋章が描かれたメダル《ショッカーコアメダル》が彼の手に握られていた。

「おのれ、そのメダルを返せえええぇぇぇぇぇっ!!」

「ハッ!」

「セイヤッ!」

「グハッ!?」

ショッカーコアメダルを奪われたヘキサオーズは二人のオーズにメダルを奪い取ろうと襲いかかるがそれを避けた二人のオーズによるメダジャリバーの斬撃を浴びせヘ

キサオーズを地面に倒れさせる。
「お父さん！」
ヘキサオーズから一度距離を取った二人のオーズの元に天羽奏にそっくりな少女が駆け寄ってきた。
「これを使って！あたしが未来から持ってきたこのコアメダルを！」
「わかった！使わせてもらうぜ！」
ＳＩＣオーズはオーズドライバーからトラメダルとバッタメダルを抜き取り、少女から受け取ったコアメダル《イマジンコアメダル》とヘキサオーズから奪ったショッカーメダルをベルトにセットした後、ベルトを傾けオースキャナーで三枚のコアメダルをスキャンする。

――タカ！
ＳＩＣオーズの前にタカの紋章が、
――イマジン！
胸の前に桃の紋章が、
――ショッカー！
そして足の前に鷲の紋章が現れた後、三つの紋章が一つになりＳＩＣオーズの胸元に

重なった。

――ターマシー！タマシータマシー!!ライダー・・・・・・魂ッ!!!

これが仮面ライダーとイマジン、そしてショッカーの力を持ったオーズの奇跡の姿。
その名も仮面ライダーオーズ、魂コンボ！
「いくぞ！ヘキサオーズ！俺達仮面ライダーを――」

――舐めるなよ!!

・　・　・

――チュンチュン。
とヘキサオーズに反撃を開始しようとしたって時に、パチリと窓から差し込んだ朝日

を浴びて目を覚ました。

「・・・」

『新年明けましておめでとうございますマスター。今年もよろしくお願いします』

枕元に置いてあるサポートＡＩが入った端末から新年の挨拶される。

「・・・」

『マスター?』

起きたのに返事をしない自分の主に画面の中で首を傾げたサポートＡＩは疑問の声をかけると青年は息を吸い込んでから先ほどの事について大声で叫んだ。

「夢オチかよ!?」

『マスター!?』

夢オチだった。

終わり。

ルナアタック編

ＳＩＣオーズＩＮ戦姫絶唱シンフォギア

定番の神様転生でくじを引き。
仮面ライダーオーズ（ＳＩＣ版）の力を手に入れて。
更にシンフォギアという原作を知らない世界に強制的に落とされ。
その上にＳＩＣ版のオーズの姿なので周りから恐れられ、化け物と言われる日々。

・・・泣いていいか？

そもそもどうして俺がこんな目に逢うんだ？
ようやく頼んだＣＳＭオーズドライバーが届く日に駅の階段から踏み外し、気が付いたら白髭の神と名乗るじいさんに会って、こちらのミスのお詫びにくじを引けと言われて、仮面ライダーオーズ（ＳＩＣ版）の力を手に入れた後、「転生先はシンフォギアの世界だから、じゃあ良い人生を」と説明する間もなく強制的に転生させられた。

次に目を覚ましたら、何処かの遺跡内の棺の中。しかも既にオーズ（ＳＩＣ版）に変身済み。

俺はクウガか!?と叫ぼうとしたら悲鳴が聞こえ、何かがあったのかと思い、棺の蓋をバッタレッグで蹴り砕き（その時無数の光が飛んでいき、壁をすり抜けていった）悲鳴が聞こえた方向に向かうと何かカラフルなピコピコ言ってるゆるキャラみたいな化け物が遺跡の前に大量にいた。

その内の顔以外がカマキリヤミーにそっくりな化け物が赤い髪の女の子に襲い掛かろうとする光景を見て、胸のオーラングサークルから流れたエネルギーをバッタレッグに込めるとバッタレッグの形が変わり本物のバッタの脚に変化し、それを確認する間もなく地面を蹴り砕き女の子に襲い掛かるカマキリヤミーモドキの顔に向けて蹴りを喰らわせた。

後はオーズのスペック任せに化け物共を蹂躙した。

女の子に近寄らせないように立ち回ったけど何故か化け物共は俺に集中して狙ってきたので、女の子から距離を取って化け物共を一匹残らず炭に変えた。（変化したトラクローとバッタレッグで攻撃したら一撃だった）

その後、気絶した女の子を抱えて遺跡を後にしてから出会った武装した人達（おそらく救助にきた自衛隊）に女の子を任せた後その場から立ち去った。（その時に女の子を

襲った化け物と勘違いされて銃で狙い撃ちにされた。効かなかったけど）

・・・泣いていいか？

その後色々あったが数年の時が経ち、その間に出会ったこの世界で社長をしているもう一人の転生者に出会い、俺のサポートをしたいと申し込まれこの世界の戸籍等を用意してくれた。

ちなみにサポートをしてくれている社長から俺が遺跡から目覚めた時に蹴り砕いた棺から飛んでいった光の中に棺の材料になったオーズの力の元であるコアメダルが世界中に散らばっていると聞いた。

しかもそのせいでノイズという化け物共にも影響を与えているとのこと。（あの遺跡で見たカマキリヤミーモドキはそれだと）

それを聞いた俺は世界中を周り、ノイズという化け物を倒しながらコアメダルを集め続けた。

相変わらず周りからは化け物や怪物等と言われ、守った人達から攻撃されるけど。

もう一度言っていい？

・・・泣いていいか？

そして今日も現れる形が変わったノイズに向けてタトバキックを叩き込む。
変わったといえばオートスコアラーのファラと名乗る女から俺のコアメダルを奪おうと襲い掛かってきた。
コアメダルを奪われないよう応戦して、彼女が繰り出してくる剣閃と竜巻攻撃をメダルチェンジしたクワガタヘッドの雷攻撃で動きを止め、その間にチーターレッグで加速して彼女の元に近づきゴリラアームで腹を殴り、空高く殴り飛ばした。
やっと終わったと思ったら足元に銃撃が襲いかかり、銃撃がきた方向に顔を向けると先ほど撃ってきたと思われる赤い鎧を纏った銀髪の少女と青い鎧を纏った青い髪の少女と黄色の鎧を纏った茶髪の少女。
そして槍を持った黄色の鎧の少女と似たのを纏った橙色の鎧の纏った赤い髪の少女が俺の前に現れた。

毎回毎回ノイズを倒した後、武器を向けるのやめてくれませんかねぇっ!?本当に!!

ああもう！どうしてこうなった!!

これは仮面ライダーオーズ（ＳＩＣ版）の力を持った青年が化け物と呼ばれながらも、涙を堪えながら手が届く範囲の人達を守る物語である。

もう泣いてもいいよね!?

歌と再開と増殖コンボ

あたしがまだ子供の頃、両親と妹と一緒に遺跡にある聖遺物を発掘しにいったあの日。

あたしの家族はそこに現れたノイズに殺された。

発掘チームがノイズに殺される中、両親があたしと妹を逃がそうと身体を張ってくれて逃げ道を作ってくれたおかげで遺跡の入口まで走ってこれたけど、途中で躓いて地面に倒れたあたしに手を伸ばそうと妹が振り返った直後。

妹の背後から現れたカマキリみたいなノイズが振り下ろした鎌に背中を貫かれた。

ノイズが振り下ろした鎌を抜き、その反動で妹の身体が炭に変わりながらあたしに向かって倒れてくる。

あたしは手を伸ばして倒れてくる妹を抱き止めようとしたけどあたしの手があの子に触れる前に妹の身体は目の前で崩れ落ちた。

それを見たあたしは悲鳴を上げて地面に崩れ落ちた妹だったものを必死にかき集めたけど、両手から容易く零れ落ち妹が死んだとようやく理解したあたしは涙を流して妹と両親を殺したノイズに睨み付けることしか出来なかった。

カマキリみたいなノイズが鎌を振り上げる。
当時、何の力もなかった子供のあたしは死への恐怖に耐えながら、この命が消えるまで目の前のノイズを睨み続けようとしたその時。
あたしの頭上を通りすぎてきた何かがカマキリみたいなノイズの顔を蹴り飛ばした。
蹴り飛ばされたノイズは後ろにいた他のノイズを巻き込んだ後巻き込まれたノイズ共々炭になって崩れ落ちた。
ノイズを蹴り飛ばした何かはあたしを庇いながら虎の爪と飛蝗の脚に変化した両腕と両足で残ったノイズを蹂躙した。
ノイズがいなくなり、死の恐怖から解放されたあたしは気絶する前に助けてくれた何かの姿を見た。
そいつは赤黄緑の上下三色の身体をしていてさっきまでノイズを屠っていた異形の四肢に胸元に鷹と虎と飛蝗が描かれた丸い紋章、そして顔は鷹のような仮面を着けた何かがこちらを見ていた。

・　・

「あたしは…あんたに……」

「……なで？奏！」

「ん、翼？いけね、寝ちゃってたか」

とある実験を兼ねたライブを前に一休みしていたら、この実験の為にした訓練により積み重なった疲労に思わず寝てしまい、魘されていたところを心配した翼に起こされた。

「大丈夫？寝てるところごめんね。奏がかなり魘されていたから、迷惑だった？」

「いや、大丈夫だ。むしろ起こしてくれてありがと」

上目遣いでこちらを伺う翼に大丈夫と礼を言ってから顔を洗いに控え室に備え付けてある洗面所に向かい顔を洗いながら先ほど見ていた夢について考えていた。

あの時、助けてくれたあいつの姿を見た子供のあたしはその異形の姿に恐怖を抱いてしまい気絶する瞬間あいつに対して化け物と言ってしまった。

本当はあんな言葉ではなく助けてくれた礼を言いたかったのに当時まだ子供だったあたしはあいつの心を傷つけたことを未だに悔やんでいた。

――なあ、あんたは今どこにいるんだ？
顔を洗った後鏡に映る自分の顔を見ながら助けてくれたどこかにいるあいつの姿を思い浮かべた。

そしてライブが開始してからしばらく経ち、ライブ中にノイズが会場に現れた。
あたしは翼の静止の声を振り切りガングニールを纏い槍のアームドギアを手にノイズの群れに乗り込んでいった。
その後に遅れて天羽々斬を身に纏った翼が剣のアームドギアを手に他のノイズを倒していき、合流した翼と一緒にノイズを倒していくと悲鳴が聞こえた。
悲鳴が聞こえた方を見ると逃げ遅れたのか一人の少女がノイズに襲われそうになっていた。
あたしは翼に他のノイズを任せた後、すぐに駆け出し少女に襲い掛かろうとしたノイズを切り裂き、少女に逃げろと叫び離れたのを確認した後ノイズからの攻撃に反応が遅れてしまいアームドギアを回転させて攻撃を防ぐがギアが破損してしまい、破損したギアの破片が少女の胸に突き刺さり地面に倒れた。
その光景を見たあたしはあの時、目の前で消えてしまった妹の姿があの少女と重なり

声を挙げて少女に駆け寄り、生きるのを諦めるなと叫んだ。
あたしの声が聞こえたのか閉じていた目が開いてくれて安堵した。
視線を前に向けると先ほどより更に１００匹、いやそれ以上の数に増えたノイズが目の前に展開していた。
更にノイズ共の背後には巨大なサイの姿をしたノイズがこちらを見つめていた。
あたしは目の前にいるノイズの群れを見てこのままじゃみんな助からないと判断して、少女に謝りもう少し頑張ってくれとお願いして瓦礫にもたれさせた後、刃が欠けたガングニールを手に持ち少女から少し離れて、ノイズ群れに向き合いガングニールを上に掲げる。

――いつか心と身体、全部空っぽにして、思いっきり唄いたかったんだよな――

そう呟き視線をノイズの群れに向けて思わず笑みを浮かべる。
「今日はこんなにも沢山の観客が唄を聴いてくれるんだ。だからあたしも……」

――出し惜しみ無しで、取って置きのを聴かせてやるよ――

「奏？何を…っ！まさか――！」

あたしがやろうとしてることに気付いた翼が静止の声をかけるけどそれに構わず、あたしはある言葉を口にする。

―絶唱―

【―Ｇａｔｒａｄｉｓ　ｂａｂｅｌ　ｚｉｇｇｕｒａｔ　ｅｄｅｎａｌ　Ｅｍｕｓｔｏｌｒｏｚｅｎ　ｆｉｎｅ　ｅｌ　ｂａｒａｌ　ｚｉｚｚｌ―】

ギアを限界以上の力を引き出す代わりに使用者の身体を傷つける諸刃の剣。

ＬｉＮＫＥＲが切れた状態で唄えばどうなるかわかって、この場を打開するためにあたしは唄う。

「唄ってはいけない！奏！駄目――ッ！」

翼が止めようと駆け寄って来るけど、もう少しで唄い終わる。唄い終わればあたしの命を引き換えにみんなが助かるんだ…ごめんな、翼。

…ああ、でも――

「奏――ッ！」

最後にあたしを助けてくれたあいつに会いたかったなぁ……

絶唱が唄い終わろうとしたその時。

――タカ！――

――トラ！――

――バッタ！――

――タ・ト・バッ・タトバ・タ・ト・バッ!!――

空から不思議な歌が聞こえた後、見覚えがある色が空から降りてきた。

「――え？」

胸元に描かれてある鷹と虎と飛蝗の紋章、そして鷹を模した仮面を着けたあの時と変わらない見覚えがある姿。

あたしの前にあの遺跡であたしを助けてくれたあいつが目の前に立っていた。

「あんたは…あの時の！」

「……」

あいつは声をかけたあたしの顔を一度みた後、すぐに顔をノイズの群れに向ける。

「お願いだ！翼とあの子を連れてこの場から逃げてくれ！」

あたしは色々言いたいのを我慢して目の前に立つあいつに二人を連れて行って欲しいと頼みこむけど、あいつはそれを無視してあたしの顔を見る。

「な、なんだよ？」

無言であたしの顔を見るあいつに質問すると口を閉じていたあいつから声がかけられた。

「ここにくる前に歌が聞こえた」

「え？」

「綺麗な歌だった。けど、命を燃やすような歌は好きじゃない。だから――」

――生きるのを諦めるな。

「っ！」

あいつはあたしがあの少女に言った同じ言葉をあたしに告げた。

その言葉に驚いているとあいつは今度こそノイズの群れに向かっていき、あたしはその背中をただ見送るしか出来なかった。

その間に翼があたしの側にきて無事かと声をかけた後、あたしと同じようにノイズの群れに向かって行くあいつの背中を見る。

あいつがノイズの群れに向かいながら右腰に付いていた何かを右手に持ち、ノイズから２０ｍ程離れた場所に立ち止まった後右手に持った何かを自身の腹部に当て右手を動かすとさっきとは違う歌が流れた。

――クワガタ！――

あいつの顔の前にクワガタが描かれた丸い紋章が現れた。

――カマキリ！――

次にあいつの胸の前にカマキリの紋章が。

――バッタ！――

最後にあいつの足の前にはバッタの紋章が現れた後三つの紋章が一つになってあいつの胸に重なった瞬間、あいつの姿が大きく変化した。

――ガ～タガタガタ・キリッバ・ガタキリバッ!!――

さっきとは違う歌が流れた後、あたしはさっきとは違う姿に変わったあいつの姿を見る。

足はさっきと同じだったけどそれ以外は大きく変わっていた。

赤い鷹を模した仮面は緑色のクワガタのような頭と緑の眼がオレンジ色の眼に変わり、鉤爪が付いていた黄色の腕は黄緑色の腕に変わり両手首には腕と同じ色の小刀が付いていた。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

姿が変わったあいつは雄叫びを挙げた後、ノイズの群れに走って行く。

「無茶だっ！一人でノイズの群れに突っ込んで行くのは！死ぬつもりなの!?」

翼が言う通り単身でノイズの群れに突っ込んで行く姿は確かにそう思う筈だ。

でも、あたしはそうは思えなかった。

その予想に答えるかのように走っているあいつの身体が一瞬ぶれ初めた後、

あいつの身体が分裂した。

一人や二人じゃない。分裂したあいつの分身から違う分身が現れていき、約５０体くらいの数に分身した。

あたしと翼はそれに驚いている間にあいつは自分の分身と共にノイズの群れに突っ込んでいった。

素手でノイズを叩き潰し、クワガタのように頭部が変化した頭から緑色の雷を放電させ複数のノイズを炭に変え、カマキリのような小刀や大きな鎌に変化した腕でノイズを次々と切り裂き、バッタみたいな足でノイズを蹴り砕いたりとノイズを蹂躙した。

数分くらい経つと１００体以上いたノイズは巨大なサイみたいなノイズ一体を除いて全滅していた。

巨大サイノイズは自身が持つ大きな脚を振り上げてあいつに向けて振り下ろしてくるが、あいつはその場から跳んでかわし巨大サイノイズを見上げ、その周りに他の分身達が集まり同じく巨大サイノイズを見上げてる。

分身の中の一人が右腰に付いてる何かを右手に持った後、姿を変える前と同じように腹部に当てて動かすと先ほどとは違う音声が聞こえた。

――スキャニングチャージ！――

それに続くように他の分身達も同じように右手に何かを持って腹部に当てて動かすと同じ音声が聞こえた。

――スキャニングチャージ！――
――スキャニングチャージ！――
――《スキャニング《スキャニング《スキャニング《スキャニングチャージ！》チャージ！》チャージ！》チャージ！》――
――スキャニングチャージ!!――

その音声の後、複数のあいつの足が本物バッタのような脚に変わり腰を大きく落とした後、一斉に空高く跳び上がった。

「セイヤー！」「セイヤー！」「セイヤー！」「セイ「セイ「セイ「セイヤー！」ヤー！」ヤー！」ヤー！」

「「セイヤー!!」」

巨大サイノイズの頭上から元の足に戻った分身の一人が巨大ノイズに跳び蹴りを喰らわせ、それを皮切りに他の分身達も一斉に巨大サイノイズに向けて次々と跳び蹴りを浴びせて巨大サイノイズの身体を貫き、それに耐えきれず巨大サイノイズの巨体が爆発し地面に崩れ落ちていった。

その後、救助隊が来て少女が救急車に運ばれて行ったのを見送ったあたしは巨大ノイズを倒したあいつの姿を探したけど、あいつの姿はどこにも見当たらなかった。

・　・　・

それからしばらく経って、絶唱を唄いかけて身体に異常がないか一通りの検査が終わり異常がないとわかった後、あのライブ会場に現れたあいつの正体についてわかった事があると旦那に呼ばれ、翼と一緒に司令室に向かいあたしは旦那に詰めよってあいつの正体について質問した。

「教えてくれ旦那！あいつの正体がなんなのか！そして今どこにいるんだよ！」

「落ち着くんだ奏。何もすべてわかったという訳ではない。了子君」

食い下がるあたしの肩を押さえた旦那は後ろで控えていた了子さんに声をかけると了子さんは笑顔でそれに答えて前に出てきた。

「はーい、それじゃあのアンノウンについてわかった事を説明するわね？苦労したわよー、データにも載ってないからまさかと思ってこんな古い書物を引っ張り出してきたんだからね」

そう言って了子さんは脇に挟んでいた古い本を両手に持って中を開いて説明を始めた。

「あのアンノウンは今から８００年前に存在していた国の王が変身した姿みたいよ。その王は当時、ノイズに対抗するための力を持とうと錬金術師に命じて作られたのがコアメダルという動物の力が宿ったメダル。

それがあのアンノウンの力の源ね。このように本によれば王はその力を使いノイズ

から民を何度も救ったけど、次第にその力に溺れていってやがて私利私欲の為に使ったみたい」
「なるほどな、８００年前にそんな事があったのか」
「それで了子さん、あのアンノウンの名前とか何か解らないか？」
「焦らせないで奏ちゃん、今話すから。その王の名前は畏怖と恐怖の念を込めて――」

――欲望の魔王、オーズと呼ばれていたそうよ。

・
・
・

現在、Ｓ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．司令室

「くそ！また逃げられた！」
「落ち着け雪音。オーズの動きは素早い。次に会った時はまず足を止めよう」

「そうだよクリスちゃん。諦めなければオーズさんもこっちの話を聞いてくれるよ！絶対に！」

アルカノイズを倒し、オートスコアラーを殴り飛ばしたオーズをS・O・N・G・に連れて行こうと接触したけど、あたし達の言葉を聞かずオーズはゴリラみたいな腕とクワガタの頭から雷を放って地面を砕き、それに巻き起こった土煙であたし達の視界を封じその間に姿を眩ましたオーズに逃げられて地団駄を踏むクリスに翼が落ち着くように響は次は大丈夫と声をかける。

それと翼、あいつは空を飛べるから足を止めても意味はないと思うぞ？

そんな三人を視界に収めて笑みを浮かべた後、目を閉じてあの時子供だったあたしを助けてくれたオーズの後ろ姿を思い浮かべる。

あたし自身が強くなっても更にその先を行くあいつの背中を追い掛けて行くうちにいつの間にかオーズの事を考えるようになっていた。

あたしは司令室のモニターに顔を向けて、モニターに映っているオーズの顔を見て口を開いた。

「いつか必ずあんたを捕まえてその仮面の下を拝ませてもらうぜ？だから――」

――その時は首を長くして待ってろよ、オーズ。命の恩人さん。

・・・

「ぶえっくしょん!!ズズッ・・・風邪かな?」

終わり

予感と知識欲と灼熱コンボ　前編

あのライブ会場で起きた事件から二年の時が経っていくつか変わった事が起きた。

まず、当時ライブで出会った重症を負ってしまった少女ー立花　響ーが、ノイズに追われている最中に胸に埋め込まれてある聖遺物ーガングニールの破片ーが起動してシンフォギアを纏い、二課に保護して（あれは保護というより連行だったけど）旦那の話を聞いた後「誰かの助けになりたい」と二課の仲間になった。

変わったと言えば、あのライブの後に翼が変なしゃべり方をするようになった。

理由を聞くと未遂とはいえ、あたしが絶唱を唄う事になったのは自分が防人として、装者として未熟なせいだと責任を感じて口調を変えたんだって。

あたしは気にしてないし、それに今あたしがこうしていられるのはオーズのおかげだって伝えたんだけど、翼は納得出来なかった。

考え過ぎだと思うんだけどな？

んで、あたしが今何をしてるのかというと……

・・・

二課、資料室

「う〜ん、これも違うか」

そう言って開いていた本を閉じて横に放り出す。

二年前、初めてオーズの名前を知ってからあたしは仕事が休みの時や訓練の合間にオーズに関わる出来事を片っ端から調べている。

といっても、前に了子さんが持ってきた本は虫食いだらけで読めなくなってて、探した情報もデタラメだったり、作り話だったりと大半が信憑性が低いのばかりだけど、中にはあいつと確信できる正確な情報もある。

例えばライブ会場から半年後にゴリラの腕をしたオーズがオーストラリアに現れたノイズ倒したという話や、一番最近のだとチーターみたいな脚をしたオーズがサバンナ

で動物を狩っていた密猟者達を捕まえたのを目撃した話があがっている。
　こんな些細な情報だろうとも、あたしは少しでもあいつの事が知りたくて調べ続けている。

「かーなーでーちゃん」ーぽにょんー

　次の本に手を伸ばそうとしたら、あたしの名前を呼ぶ聞き覚えがある声と後頭部に柔らかい感触がした。
　こんなことしてくるのは一人しかいない。
「何するんですか、了子さん」
「あら、つまらない反応ね？」
　名前を言うと柔らかい感触が後頭部から離れた人物、了子さんがつまらないと腕を組んで愚痴をこぼした。
「いや、同じ女にそんなことしても動揺しませんよ」
「もう奏ちゃんたら、好きな人を知る為なのはわかるけどそんなことばかりしてたら捕まえた後、もしもの時に困るわよ？」
　後ろを振り返って了子さんにそう言うと、了子さんは笑顔を浮かべてとんでもない言

葉を言ってきた。
「な、好きって了子さん!?あたしは別にオーズの事なんかっ!?」
「あら?私はオーズだって一言も言ってないわよ?もう、かわいいんだから」
「うぐぐ……っ」
口元に手を当てて笑っている了子さんに文句を言いたいけど、下手にしゃべったらまたからかわれると予想できるので言いたい言葉を飲み込んで、黙って了子さんを睨む。
「そんなかわいい奏ちゃんにプ、レ、ゼ、ン、ト♥?」
と、笑うのをやめて白衣の下から少し傷みが入っている水色のラインが走ってる黒い本を取り出して渡してくれた。
「これは?」
「それはね…」
一度言葉を切ってあたしの耳元に口を近づけて小声で話しかけてきた。
「奏ちゃんの大好きなオーズの秘密が記された本よ」
「な、大好きってそれは違っ…!?ってそうじゃなくて!オーズの秘密って、なんでこれを!?」
耳元で囁かれた好きって言葉を一度否定してから、了子さんが口にしたオーズの秘密という言葉を聞いて了子さんの顔を見る。

「しぃー、あまり大きな声を出さない。それね日本政府の極秘資料室から特別に持ってきたやつだから、本当ならここにあったら駄目なのよ?」
「日本政府のって、……それ、もしかして知ったらヤバい奴なんじゃ?」
嫌な予感をしながら違ってくれと願いつつ、おそるおそる了子さんに質問する。
「なに言ってるの?そんなの当たり前じゃない」
あたしの願いを裏切って、さらっと爆弾を投げやがったよこの自称天才ピンク女。
「はあ!?なんでそんなものを持ってきたんだあんた!?もし持ってきたのがばれたらどうすんだよ!?」
「大丈夫よ、例えばれたとしてもいずれオーズの存在が明るみになるのは時間の問題になるし、それに既に世界中で目撃例も出てるからね」
「だ、だからと言ってこんなヤバい本どうすれば…っ」
うろたえながら手元の本と了子さんの顔を見比べていると了子さんが肩を震わせながら笑いをこらえて耐えきれず吹き出していた。
「フフッ、なんてね。安心して。その本は私が昔、知り合いからもらった物なの。だから頑張っている奏ちゃんにあげるわ」

その言葉を聞いてあたしはホッとため息を吐いた。
「なんだよ脅かさないでくれよ了子さん。あたし了子さんがついに犯罪を犯したのかと思ったよ」
「フフフ、ゴメンねー？奏ちゃんの驚いた顔をみたらついついからかってみたくなったのよ。だから許してね？…後、ついにってどういう意味か後で教えてくれる？」
サッと身体の向きを了子さんからさっきまで向かっていた机に向けて先ほどもらった本を机の上に置いて「さー調べるぞー」とわざとらしい声を出す。
「……ま、いいわ。それはまた今度聞くとして、奏ちゃんその本大事にしてね？あ、それとその本は持ち主が知りたいと思えば思うほどより深く読めるようになるから――」

――あまり自分の欲望に呑み込まれないようにね？

「えっ？それはどういう……」
「それじゃ、私弦十郎君に呼ばれているから！またね！」
そう言って了子さんは資料室を後にした。
「なんなんだ一体？」
まあ、いいか。と机の上に置いた本を手に取りページを開くと……

「…読めないな」
本には昔の古代文字がページにビッシリと書かれていた。
そりゃそうだ、なにせ８００年前からいたんだ。本に記されている文字も古いに決まってるよな。
「うーん、せめてあの時オーズが変わった姿の事でも解ればいいんだけどな」
と冗談混じりに軽く口にした瞬間。
ーカッ！ー
と本が光だした。
「うわ！な、なんだ!?」
突然光だした本に驚いて思わず机の上に落としてしまい、しばらくすると光が収まり本の表紙に目を向けると何もなかった表紙に文字が書かれていて、更にその文字の下から、○が三つ並んだ模様が浮かび上がってきた。
「なんだったんだ一体?えっと、欲望の、書?…あっ!?」
本を手に取り表紙に書かれていた文字を読んでみると欲望の書と書かれていた。
疑問に思いながら本を開くと、さっきまで読めなかった文字が読めるようになっていた！
「よくわかんないけど、これならオーズの事が詳しく解るようになる！」

何故読めるようになったのか疑問になるけど、ようやくオーズに関しての内容が解るようになると嬉しくなって、気にしないで内容を読み始めた。

・
・
・

了子視点

資料室を出てから、二課の通路を歩きながら私は先ほど天羽　奏に渡した本について考えていた。

（天羽　奏に渡したのは８００年前に存在していたオーズについて記された記録書、とは言ってもあれは記録書というより持ち主の欲望を喰らう魔本だが）

そう、あの本はある男が残した所有者がオーズの事を真に知りたいと思えば思うほど所有者の《欲望》を吸収し、所有者にその内容を開示する。

だが、更にその奥まで詳しく知ろうとするとその思いの分だけ《欲望》を吸収する悪魔の書。

そして、《欲望》を吸い付くされたら最後――

――欲望の書にその身を全て喰われ身を滅ぼす。

かつて、８００年前に存在していた王に仕えていた錬金術師の一人に転生した私は当時の王にノイズに対抗する為の力を作れと命じられた。

何度も試行錯誤を重ねて、動物の力に目をつけたが幾つもの失敗が重なり、うまくその力を安定させる事が出来ない日々が続いた。

ある日、錬金術師達の中で一際異彩を放つガラという男がある物に目をつけ、それを動物の力と合わせ、ある形にすると――

あれだけ失敗していたのが嘘のように力が安定し暴走もする事がなくなった。

そのある物こそが《欲望》そしてオーズの力の源である《コアメダル》だ。

そして、コアメダルの力を引き上げる為の道具《オーカテドラル》を作り上げた私達は、それを王に献上し王はその力を使って襲いくるノイズから民を護り続けてきた。

その力を目の当たりにした私はコアメダルの力なら月にかけられたバラルの呪詛を壊せると考え、その力を手に入れようと所有者である王からコアメダルを奪おうと行動しようとしたが――

――その力を使っていた王が自らの欲望に溺れ始めた。

最初に自らの欲を満たす為に王は同盟を結んでいた近隣諸国を滅ぼした後、王は更にコアメダルの製造を命じた。

ある時は、王の愚行を聞いた他の国の軍を緑のオーズの力で蹂躙し殲滅した。

またある時は、税を払わなかった村や街の水源を黄色のオーズの力で水源を枯らした。

その後も王はオーズの力を使い自身の欲望を満たす為に欲望の限りを尽くした。

そして王の愚行を止めるために王に仕えていた錬金術師達は、オーズの力の源である欲望に対抗する為に欲望と対となる《消失》の力を持つコアメダルを作りあげ、その力で王を止めようとしたが、

それに目をつけた王に《消失》のコアメダルを奪われ、その力を使おうとした直後、王の身体が崩れ落ち銀色のメダルに変化して銀色のメダルになった王はコアメダルと共に空高く舞い上がりその行方ご解らなくなり、それと同時にガラの姿も眩ました。

私が今の器に転生した現代にオーズがいつの間にか復活して、二年前のあのライブ会

場に現れた時は驚いたが……。

――だが、そんなのはどうでもいい。

もう少しすればカ・ディンギルの調整が終わり、そしてオーズからコアメダルを奪いその力をカディンギルに注ぎ込めば、想像以上の威力で月を破壊する事ができる。

「確かオーズは形状変化したノイズが出現した時にその姿を現してたな?」

コアメダルを奪う為にオーズが現れる行動パターンを振り返り、ある程度予想を建てた私はすぐに行動に移そうと携帯端末を手に取り、ある少女にある場所にノイズを出した後手を出さないよう連絡して司令室に向かう。

そう言えば…

(何故オーズは８００年前みたいに力を振るわない?それに戦い方をみるとあの時とは全く違う。まるで――)

――王本人ではなく、別の人間が変身しているのかのような?

(フ、まさかな?)

頭に浮かんだ予想を切り捨て、すぐに別の事を考えた。

了子視点、終了

後編に続く。

予感と知識欲と灼熱コンボ　後編

了子さんに本をもらった次の日、

――翼が響に剣を向けた。

どうしてそうなったというと、

その日ノイズが二ヶ所同時に現れてあたしと翼は別れてノイズを倒しに行ったが翼が向かった場所のノイズの数があたしが向かった場所より多く、二課に待機していた響が翼の援護に向かいなんとか無事に戦闘が終わり響が翼に「誰かの為に戦います」と言った後、それを聞いた翼があの娘に剣を向けて斬りかかった。

まあ、二課から現場に駆けつけたダンナが一喝して終わらせてくれた。

あたしは二課に戻った翼にどうしてそんな事をしたのか問いただしたらあたしが命懸けで助けたあの娘を戦いから遠ざけようとして、その方法があれだと聞いたあたしはため息を吐きながら翼の額にデコピンを当てて翼をしかり、それを受けた翼は額を抑えながらごめんなさいと謝りその後響の前で謝罪した。

全く、本当に気を使うのが不器用な娘だよあいつは。
余談だけど、ダンナがどうやって止めたのか響から話を聞いたけど…。
翼が出した天の逆鱗を文字通り拳一つで受け止めて、衝撃を地面に受け流したんだって…
前から思ってたけどダンナって本当に人間か?ギアを纏ってないのに生身で装者の攻撃を受け止めるなんて普通じゃ出来ないだろ?
ダンナが了子さんに改造人間にされたか、タ○ネ○ーって言われても違和感ないよ。
それからまだ少しギクシャクしたまま次の日を迎え、再びノイズが現れた。

・
・
・

街から離れた河川敷。

「はあっ!」

【―蒼の一閃―】

翼が放った一撃が最後の一体になったノイズを切り裂き、辺りに生き残りがいないか確認した後、アームドギアを元の大きさに戻してから二課に連絡を取る。
「こちら奏、ノイズは全て倒したよ」
『みんな御苦労、ノイズの反応はそれが最後のようだ。今、そちらに迎えを寄越したから迎えがくるまでその場で待機してくれ』
「了解、待ってるよ」
通信を切って視線を少し距離を置いている二人に向ける。
先日の件を未だに引き摺っているのかお互いの顔を伺い、目があったら同じようにそらすのを繰り返している。
（あーもう、見てられないなあ）
ため息を吐いてから二人の所に行こうと足を向けた直後、いきなり二課から通信が入ってきた。
「はい、こちら奏どうし『全員今すぐ川から離れろ!!』っ!?」
通信に出るとダンナがその言葉を言った瞬間、川から何かが飛び出してきた！

それに気付いたあたし達はすぐに飛び上がって先ほどまでいた場所に何かが突き刺さった。

少し離れた場所に着地したあたし達は何かが飛び出してきた川を警戒して見ると、ウナギみたいな姿をしたノイズが川から上がってきた。

「なんだあれは?」

「いつものノイズとは違うようだけど……」

あたしと翼がいつものノイズとは違う姿に警戒しているとウナギみたいなノイズ（以下ウナギノイズ）が自身の両腕を前に出して無数の触手に変化させてあたし達に攻撃してきた!

「ちぃ!おいダンナ!ノイズの反応はないって言ってたろ!なんでノイズが残っているんだよ!?」

ウナギノイズの触手攻撃を大きく避け、通信を入れてダンナに文句を言う。

『すまん!先ほどまでは確かに反応がなかった!だが、まるでお前達の油断が来るのを待ってたかのように急に反応が出たんだ!』

「なんだってっ!?そんなの今までなかったのにどうして…ってあぶなっ!?」

ダンナが出した言葉を聞いて疑問が浮かび目の前に迫ってきたウナギノイズの触手を間一髪かわす。

ああもう、しつこい!!そんな気色悪いのを飛ばしてくるな!
「く、ならば!」
翼がウナギノイズの触手をかわしてアームドギアの剣を振り上げて斬り裂こうと触手に向けて振り下ろした。
――けど。
ーヌルンッー
翼が振り下ろした剣が通らず、触手の表面を滑り落ちた。
「なんだと!?」
自分の剣が通らなかった翼は驚いて身体を硬直してしまい、その隙をウナギノイズは見逃さなかった。
「しまっ……うあぁぁぁぁっ!!」
「「翼（さん）!?」」
ウナギノイズの触手が翼の足に巻きつき、それに遅れて気付いた翼が抜け出そうと動こうとしたけどそれより早くウナギノイズの触手が翼の全身に巻きつき翼の身体を持

ち上げた。
「くっ、この……ングッ!?」
翼が拘束されてない右手を動かして剣をウナギノイズに突き刺そうとしたけど、それをウナギノイズの触手が翼の右手を拘束した後もう一本の触手を翼の口に入れて妨害する。
「てりゃぁぁぁぁっ!」
「翼から離れろ!」
翼を助けようと駆け出し、響は拳をあたしは槍を振りかぶってウナギノイズの身体に攻撃しようとした。……でも、

ーヌルルンッー

「なっ!?ぐあっ!?」
「そんな!?うあっ!?」
響の拳とあたしの槍がウナギノイズの身体の前にに展開した粘液の盾に防がれ、それに驚いた隙にウナギノイズの触手があたしと響の身体に巻きつき拘束した。
「くそっ、放せよ!この!」

「ン、グ……ングゥッ!?」
「うえぇ、ヌルヌルするぅ……！気持ち悪いいいい……！」
触手を振りほどこうと掴もうとしたけど触手に付いた粘液で滑り、更にあたし達の身体を拘束してくる。
…って、どこに伸ばそうとしてんだよ!?こら、馬鹿！やめろ!!
必死に身体を動かして触手が際どい所に触れるのを避けようとしたけど、更に身体の拘束がきつくなり触手が触れようとしたその時――

――……ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッ!!――

――ドンッ！――

川に繋がる道から黒いバイクみたいなのが物凄い速さでウナギノイズの身体に突っ込みその勢いに耐えきれずウナギノイズは川の上に落ちた。
その衝撃であたし達を拘束していた触手の拘束が解けて地面に落ちた。
「イタタタ…た、助かったぁ」
「ゲホゲホッ！……く、よくもあのような辱しめを！」

片や落ちた時にお尻を打ったのか擦りながら響が愚痴をこぼし、咳き込んでウナギノイズに恨み言を言って睨み付ける翼。

「でもさっきのバイクは誰が?……あっ!?」

あたしは先ほどウナギノイズを突き飛ばしたバイクに乗っていたのは誰なのか顔を向けるとそこには以外な人物がバイクに乗っていた。

「オーズ…オーズッ!!」

そう、バイクに乗っていたのは二年前にあたし達を助けてくれたオーズが黒いバイクに乗っていたからだ!

「オーズ?」

オーズの事を知らない響は首を傾げてオーズの名前を呟く。

「フ、ハァアアッ!」

バイクから降りたオーズは一度構えた後、ウナギノイズに向けて駆け出し拳を突き出した!

でも――

―ヌルンッ―

「っ!?セイ!・セイヤッ!」
ウナギノイズが出した粘液の盾によりオーズの拳が通らず、それに驚いたオーズは手を緩めず拳の他に、蹴り技や鉤爪を展開して繰り出したけど…

―ヌルンッ、ヌルンッ、ヌルルン!!―

オーズの攻撃は粘液の盾に防がれてしまう。
「がッ!?」
「オーズ!」
攻撃が途切れたオーズにウナギノイズが突き出した触手がオーズの胸に当たり、オーズの身体は大きく吹き飛ばされた。
「クッ!」
地面に倒れたオーズは膝を着いたまま再び構えてウナギノイズの動き警戒する。
「どうすればいいんだ……っ!?」
それを見ていたあたしはどうすればこの状況を打開できるのか考えていると突然、頭の中に知らない知識が浮かび上がってきた。

［ウナギヤミー］
・ウナギの特徴を持ったヤミー。
・身体を覆う粘液で攻撃を受け流し、打撃、斬撃、刺突、飛び道具を無効にする粘液の盾を出し、腕を触手に変えて相手に攻撃する。
・超高温の熱で粘液を蒸発させれば、再び粘液を出すのに時間がかかる。

「はっ！なんだ、今のは…!?いや、それよりオーズ!!」
「ッ!!」
頭の中に浮かんだ情報に戸惑うけど、さっきの情報で解ったウナギノイズの弱点をウナギノイズに攻撃しているオーズに教える！
「オーズ、そいつの弱点は熱だ！超高温の熱を浴びせれば攻撃が通る！そこをやれ!!」
「か、奏さん…？」
「奏、何故あのノイズの弱点が解るの？」

いきなりウナギノイズの弱点を叫んだあたしを見た二人はどうしてそれが解るのか質問するけどあたしはそれを無視してオーズの顔を見る。
「熱…そうか！」
あたしの言葉を聞いたオーズは大きく跳んでウナギノイズ離れた場所に着地して、右手を左腰に付いているホルダーみたいのに伸ばし中から二枚の黄色のメダルを取り出し、
ベルトを水平に戻してあたしから見て真ん中のメダルはそのままに左のメダルと右のメダルを抜いて、先ほど取り出した二枚の黄色のメダルを空いている窪みに入れてベルトを斜めに傾けるとベルトに嵌まっている三枚のメダルが光だした。
「つ、また！」
オーズの動きを観ているとまた頭の中に知らない情報が浮かんできた。
「……なっ!?まずい、二人共こっちだ！」
「奏!?」
「えっ、奏さんそっちは川って…ーバシャン！ーみぁぁっ！冷たッ!!」
その情報を読み上げていくとこのままだと危険だと解り二人の手を取ってオーズ達がいる位置からから離れた川の中に飛び込むのとオーズが姿を変えるのは同時だった。

――ライオン!――
オーズの顔の前にライオンの紋章が浮かび上がり、
――トラ!――
次に胸の前にトラの紋章が浮かび、
――チーター!――
最後に足の前にチーターの紋章が現れた後、三つの紋章が一つになってオーズの胸元に重なった瞬間オーズの姿が変わった。

――ラタ・ラタ・ラトラァータァー!!――

「ウオオオオオオオオオオオオッ!!」

オーズが雄叫びをあげた瞬間、物凄い光の後に一瞬で川の水が干上がった。
「アチチチッ!?なにこれ!?冷たかったのにいきなり熱くなった!!」
「それだけではない!あれだけの川の水が蒸発してる!川に飛び込まなかったらギアを纏っていても無事でいられるか…!!」
「って、干上がったと思ったら大量の水が……ガボゴボッ!?」

上流から流れてきた川の水流を浴びた響が突然の事で数メートル流された。
「危なかった…そうだ！オーズは？」
上流から流れてきて元の川の中にいたあたし達はそれに驚きながらオーズの姿を見ると……
オーズの姿はまた大きく変わっていた。
けど、二年前とは違いタカの顔が水色の瞳とライオンの鬣を模した黄色の頭部に変わり。
両腕はさっきと変わらないけど、足はライトイエローの足になっていて、胸にある紋章は上と下に描かれてたタカとバッタの紋章が消えてライオンとチーターの紋章に変わっていた。

［オーズ・ラトラーターコンボ］
・黄色の猫科系のコアメダルを使用して変身した姿。
・足のチーターレッグで翻弄させ、両腕のトラクローで相手の身体を切り裂く。
・固有能力は頭部から超高温の熱線を放ち、相手にダメージを与える事ができるライ

オディアス。

オーズがメダルをベルトに入れたのを見たとき頭の中に浮かんだ《超高温の熱線》の文字を読み、このままだと危険と判断したあたしは二人の手を掴み川の中に飛び込んだ。もし川の中に飛び込むのが遅かったらと思うとゾッとする。

あたしがそう考えているのを知らないオーズは両腕のトラクロー（だっけ?）を展開して熱線により粘液が乾燥して苦しんでいるウナギノイズに向けて構えるとオーズの胸に付いているチーターの紋章が光、身体に走っているライトイエローのラインを通りオーズの足に集まるとオーズの足が本物のチーターの脚に変わった!（お尻の所にチーターの尻尾が生えててかわいいと思ってしまった）

オーズが肉食動物のように両手を着けた次の瞬間、１０メートル程離れていたウナギノイズとの距離を目に追えない速さでウナギノイズの前に現れた!

突然目の前に現れたオーズに驚いたウナギノイズは腕の触手を前に振ろうとしたけど、それより早くオーズのトラクローがウナギノイズの身体を切り裂いた!

「セイ!・セヤ!・セイ、ヤー!!」

オーズは攻撃の手を緩めず、連続でトラクローをウナギノイズに浴び続ける。
「す、凄い！私達があんなに苦戦したノイズを追い込んでる！」
オーズの戦いを見ていた響が拳を握りしめて目を輝かせる。
「あの戦い方、まるで獣のような荒々しさを感じるな」
翼の言う通りあの姿のオーズはまるで獲物を仕留める肉食動物を彷彿させる戦い方をウナギノイズに浴びせている。
「あれが、コンボの力なのか？」
あたしは前に了子さんからもらった欲望の書に書かれていたある文章の一説を思い出した。

・
・
・

［コアメダルによるコンボ］
コアメダルには三枚のコアメダルで変身するだけではなく、ある条件を満たすとコアメダルの能力を最大まで発揮できる。

コアメダルにはある共通点があり、亜種コンボであるタトバコンボを除く、同じ種族のコアメダルを揃える事によりその種族の力を最大まで使用できる。
だが、コアメダルの元となった力は欲望であり、使い方を間違えると欲望に飲み込まれ身を滅ぼす。
――それがコアメダルによるコンボの力である。

・
・
・

「凄い…これがオーズの力なのか！」
オーズの能力について改めて凄いと感じ、あたしはまるで自分の事のように喜んだ。
そうしてる内にオーズの戦いも終わりに近づいていた。
ウナギノイズに変化させたトラクローを喰らわせ大きく吹き飛ばした後、トラクローを元の大きさに戻してから右腰に付いている丸いスキャナーみたいなのを右手に持つとそれをベルトの上を滑らせるようにスキャンすると音声が聞こえた。

――スキャニングチャージ!!――

その音声の後オーズの足が再びチーターの脚に変わり、両腕のトラクローも巨大化し本物の虎のような腕に変化した。

そしてオーズのライオンを模した頭部の鬣が更に伸びてまるで本物のライオンのような光輝く鬣に変わった。

「グゥゥゥゥ……っ！ルゥオォォォォォッ!!」

全身が変化したオーズは両腕を地面に着けて本物の猛獣のような姿勢を取るとウナギノイズに向けて、雄叫びをあげるとオーズの全身から超高温の熱波が放たれ、ウナギノイズの動きを止めるとオーズの前に三つの黄色のリングが現れた。

「ハアァァァァッ、セイヤァァァァァッ!!」

そのリング目掛けてチーターの脚で駆け出しリングを一つ通る度に更に加速していき、三つ目のリングを通り抜けた直後飛び上がり、ウナギノイズに向けて巨大化したトラクローをウナギノイズの身体をX字を描くように切り裂き、オーズの攻撃を受けたウナギノイズはその一撃に耐えきれず爆発した後炭に変わり崩れ落ちた。

「……」
「ま、待ってくれ！」
「奏（さん）!?」
ウナギノイズを倒したオーズの身体が元に戻り、肩で息をしながらあいつはここに来たときに乗っていた黒いバイク乗り込んで、エンジンを掛けてそのまま立ち去ろうとするのを見たあたしは慌ててオーズに声をかけた。
「なんだ?」
「あ、えーと、その……」
あたしの呼び掛けに応じたオーズが顔を向けるとその顔を見たあたしは了子さんに言われた言葉が頭によぎりなんて言おうとしたのか忘れてしまい、緊張してどもってしまった。
（くそ、了子さん、後で覚えてろ！）
「なあ?」
内心余計な言葉を言った了子さんに仕返しすると決心するとオーズが声を掛けてきた。
「お前がヤミーノイズの弱点を教えてくれたおかげでなんとか勝てた。礼を言うよ、ありがとう」

「あ…」
「じゃあな」
その礼の言葉を聞いたあたしは思わず口を空けてオーズの顔を見るとあいつはバイクのアクセルを回してあたし達の前から走り去っていった。
（礼を言うのはこっちの台詞だよ、また助けてもらったな……）
左手を胸に当て、オーズが走っていった方を見てオーズの姿が見えなくなるまで見送り続けた。

・
・
・

どこかの社長室

そこには照明が消された室内で壁に当てたプロジェクターの光のみが室内にいる二人の人物の姿を照らし出す。
「で、プロトベンダーの実験結果はどうなった?」

「はい、オーズに変身した状態での滞空時間、速度、耐久性、そして姿勢制御も問題なく現場まで走り続けました。今までの実験データを合わせれば、いつでも計画に移行できます」

「そうか…ク、ククク、ハーハハハハハハッ!!」

それを聞いた謎の男はプロジェクターに映るオーズの姿を見てから大げさな笑い声を上げる。

それを見たジト目の美人秘書はため息を吐いた後、手元の資料から一枚の紙を取り出してその内容を読み上げた。

「所で、今まで貯まりに貯まった試験機の実験費用なんですけど、そろそろ9桁にいきそうなんですがこの金額をどうするんですか?」

「……」

それを聞いた男は笑い声を止めしばらく無言になり、その後ろ姿に秘書はジト目で睨み付ける。

「……予算でなんとか「駄目です」…はい」

余談だが、貯まりに貯まった実験費用は社長のポケットマネーから支払われたとさ。

終わり。

襲撃と奪われたメダルと重力コンボ

主人公視点

「ふーん、風鳴翼が過労で倒れ、工場では謎の爆発ねぇ・・・日本を離れている間に、随分とまぁ色々あったみたいだな?」

外国のとある秘境の奥地で発見されたゾウのコアメダルを回収して日本に戻ってきた俺は社長さんに呼び出された。そこで二枚の新聞を渡され、大きな見出しの記事を読んでから社長さんに質問する。

「世間ではそうなっている・・・が、実際はそうではないようだ」

社長さんが一度言葉を切ってから、机の引き出しから束ねられた資料を取り出して俺に渡してきた。

渡された資料に目線を落とすと、先ほど読んだ新聞の記事とは全く違った内容だった。

「絶唱により風鳴翼が負傷し戦線離脱、完全聖遺物デュランダルを手にした立花響の暴走により工場が半壊・・・どういうことだ?」

「言葉通りの意味だ。彼女達が纏うシンフォギアに備わっている《絶唱》とは、簡単に説明すると強大な力を引き出す代償に身体にとてつもない負担がかかる諸刃の剣だ。君に解りやすく言うなら、仮面ライダーWがヒートトリガーのツインマキシマムを使う、と言った所かな?

そして完全聖遺物とは、損傷が全くない聖遺物のことだ。フォニックゲインで起動すれば、装者でない者でも使う事ができる代物さ。暴走した原因は、おそらく立花響の胸にある聖遺物の欠片とデュランダルのエネルギーの共鳴増幅だと思われる」

「あんたその情報どうやって手に入ったんだよ・・・」

そんな情報を入手した目の前の男の収集能力に思わず引いてしまった俺は悪くないと思う。

「いや何、わが社の情報収集班は優秀でね。この程度の捜査は、造作も無い事なのだよ」

「それアンタが自慢する事じゃないだろ・・・で?どうせ他にも、何か用があるんだろ?」

ドヤ顔で語る社長さんに呆れながら、俺を呼んだ理由を質問した。

「ああ。実は、とある人物が君のコアメダルを狙っているという情報を入手してね。忠告ついでに、この情報を伝えようと思って呼んだんだ」

「成る程ね・・・それで、俺にどうしろと?」

「ハハハッ!それはね、狙われているのなら――」

どうするのか社長さんに質問すると、彼はいい笑顔で予想外の言葉を告げる。
「こちらから襲えばいいってことさ！」
「・・・は？」

・　・　・

――郊外の屋敷前――

「ここか？」
『はい、間違いありません』
プロトライドベンダー（以下：プロトベンダー）を停めて、社長さんから教えてもらったコアメダルを狙っている人物とやらが住んでいると思われる屋敷を見上げる。
（本当にこの屋敷にそいつがいるのか？）
考えてもきりがないので屋敷に向かおうとプロトベンダーから降りてヘルメットを取ろうとした。その時――

「貴様、何者だ？何故この場所が解った？」

屋敷からサングラスをかけ、コートを着た金髪の女性が現れた。

『マスター、彼女が社長が言っていたコアメダルを狙っている人物・・・《終末の巫女フィーネ》です』

「マジで当たりかよ。ほんとなんなんだあの社長の情報網は・・・」

サポートＡＩのライドから該当の人物だと教えてもらい、目の前の女性に声をかける。

「お前が終末の巫女フィーネとやらで、間違い無いか？」

「成る程。貴様、ただの迷い混んだ一般人ではないらしいな」

フィーネかどうか質問したら、目の前の女が纏う空気が変わった。

「あれ？選択肢ミスったか？」

『単刀直入に本人と質問したのが間違いだと思います。あれだと警戒されるのは当たり前です。マスターが見ず知らずの人に「オーズだろう」と言われたら警戒するでしょう？それと同じです。

なのにカマ掛けもせず馬鹿正直に質問するなんて、マスターは馬鹿なんですか？』

「誰が馬鹿だ!?しょうがないだろ!コミュニケーションが苦手なんだからさぁ!」
『それでも今の問いはどうかと思いますが・・・ハァ』
(ため息をつかれた!?ＡＩなのに!?)
「聞いているのか?もう一度問う・・・貴様は何者だ?私の正体を真正面から看破しておいて、シラを切れると思わぬ方がいいぞ?」
ライドと話しているとフィーネから何者かと声をかけられる。その手にはブレイクガンナーとカイザブレイガンを混ぜたような銃剣を持ち、こちらに向けていた。
「答えないのなら、力ずくで答えてもらうまでだ!」
フィーネは銃剣を上に掲げ、銃口から光弾が発射。その光弾が着弾すると、その着弾地点にノイズが次々と現れる。
「なっ、ノイズだと!?」
(あの杖、ノイズを呼び出せるのか!?そんなのがあるのかよ!?)
驚いている暇も無く、ノイズ共が俺に向かってその姿を変えて突撃してきた。その場から跳ぶように駆け出しノイズの突撃を大きく避け、腹部に《オーカテドラル》を当てて《オーズドライバー》を装着。そして赤黄緑の三枚のコアメダルを取り出し、ドライバーにセットする。
「っ!貴様、そのベルトは!」

それを見たフィーネから驚きの声が上がるが、それに構わず《オースキャナー》でドライバーにセットしたコアメダルをスキャンする。

「変身！」

――タカ！――

――トラ！――

――バッタ！――

――タ・ト・バッ・タトバ・タ・ト・バッ!!――

「ハッ！」

タトバに変身し、トラクローを展開してノイズの群れに向けて駆け出した。

「ハッ！セイッ！フッ！セイヤーッ！」

人型のノイズの身体にトラクローを突き立て縦に引き裂き、背後から飛びかかってきた二体の丸いノイズの突撃を左手だけ能力解放したトラクローで地面に叩き落とす。

ブドウ型ノイズが放ってきた爆弾攻撃をバッタレッグの跳躍力で回避し、ブドウ型ノイズの前に降り立って両腕のトラクローでその身体を切り裂いた。
「次はこれだ！」

――タカ！――

――カマキリ！――

――チーター！！――

タカキリーターにメダルチェンジしてカマキリソードを能力解放。両腕を巨大な鎌に変え、チーターレッグで駆け出しノイズを次々と切り裂き炭に変えていった。
「オーズ・・・なるほど、だから私の正体を・・・。まさか、王自ら私の前に出てくるとはな。それほど８００年前に裏切った私が許せなかったのか？」
（８００年前？裏切った？何の事だ？）
フィーネが口にした言葉に内心首を傾げながらも、最後のノイズの身体を切り裂く。
「流石だな。やはり、普通のノイズでは遊び相手にすらならないか」

「何を言っている?お前が呼び出したノイズは全て倒したぞ。さて、何故お前がノイズを呼び出せたのか・・・じっくり聞かせて戴こうか」
「ククク・・・」
変化したカマキリソードをフィーネに向ける。フィーネは不適な笑みを浮かべ、サングラスを外して再び杖を上に掲げた。
「まだ戦いは終わってないぞ!オーズッ!!」
「なに!?」

ーカッ!ー

銃口から放たれた光が空中に照射された。光が収まると、空中にオウムを人型にしたような風貌のノイズが姿を現した。
その姿を見た俺は思わず、目の前のノイズと瓜二つである怪人の名前を口にする。
「オウムヤミーだと!?」
『キュエエエエエエエーーーッ!!』
オウムヤミーノイズが奇声を挙げて嘴の部分から火球を繰り出してきた。
「くそ!」

俺は悪態を吐き、チーターレッグでその場から駆け出し火球を避ける。だが、オウムヤミーノイズは俺が走る方向に先読みで次々と火球を繰り出してきた。
「く、しつこい！・・・ガアッ!?」
何度か火球を避け続けたが、時間差で繰り出してきた火球の着弾で起こった爆発で吹っ飛ばされる。
「どうしたオーズ。貴様の力はその程度か?」
オウムヤミーノイズに苦戦する俺の姿を見て、挑発を掛けてくるフィーネ。
見ると、その顔には歓喜の表情が浮かんでいた。
「チィッ!なら、お望み通り見せてやるよ!」
吹っ飛ばされながら体制を整え、チーターレッグで何とか持ちこたえる。左手でオーメダルネストから赤いコアメダルを二枚取り出し、カマキリとチーターのコアメダルと入れ換えようとした。その瞬間――
ーパシッー
両手に持っていたコアメダルが、見えない何かに奪われた。
「何ッ!?グアッ!?」
コアメダルが奪われた事に驚いて一瞬動きが止まり、見えない何かからの攻撃を諸に喰らってしまう。

見えない何かは屋敷の前に立つフィーネの元に向かい、コアメダルをフィーネが差し出した手のひらの上に落とした。
「フン、クジャクとコンドルに、今さっき使っていたカマキリとチーターか・・・揃ってはいないが、赤いコアメダルが二枚あるだけましだな」
フィーネは奪ったコアメダルを見て一人納得し、コートのポケットに仕舞った。

――タ・ト・バ！タトバ・タットッバッ!!――

「コアメダルを奪って、何をするつもりだフィーネッ!!」
「何をするつもり、か・・・」
地面に倒れていた身体を起こし、変身が解けないよう直ぐにタトバコンボに変わり、フィーネにコアメダルをどうするか質問するとフィーネは口元を歪ませるとある言葉を口にした。
「コアメダルのエネルギーを使い、カ・ディンギルで月を穿つ！」
「月を!?」
「既にカ・ディンギルは完成している！後は邪魔者を始末して、私はバラルの呪詛から世界解放するのだ！」

『月を破壊する』という発言に、驚いて声が出せない。
（カ・ディンギルとはなんだ?バラルの呪詛?コアメダルのエネルギーを使って月を破壊する?・・・馬鹿げてやがるッ!）
「残りのコアメダルも戴きたい所だが、そろそろあの娘に預けた鎧を返して貰わないといけないからな。このまま、このノイズ達の相手をしてもらおうか」
「待てっ!・・・クッ!」
俺はフィーネを追いかけようとしたが、上空からオウムヤミーノイズが放つ火球に行く手を遮られる。
「オーズ!コアメダルを取り返したければ、カ・ディンギルまで来い!そこで８００年前の因縁をつける!貴様が来るのを、待っているぞ?フフフ・・・ハーッハッハッハッハッハッ!」
笑い声を挙げながら、フィーネは姿を眩ました。
『マスター、どうしますか?このままではフィーネを見失ってしまいます』
「解っている!だが追い掛ける前に、コイツらを倒す!」
ライドにそう告げてバッタレッグで高く跳躍。火球を避けて、《オーラングサークル》に描かれてある《タカラング》に力を込めた。するとタカアイが赤く光り、可視光線領域が大幅に広がった。周りを見渡せば、周りに溶け込むように姿を消したノイズの影が

視界に映る。

「ウオォォッセイヤァーッ!!」

見えないノイズの姿を視界に納めた俺は、能力解放したバッタレッグを使って一瞬で肉薄。同じく能力解放したトラクローでその身体を切り裂いた。

ノイズが炭に変わる瞬間その姿が現れ、そのまま炭になって崩れ落ちる。

一瞬だったが、トカゲのような風貌で身体を透明にするノイズ――カメレオンヤミーノイズとする――を倒したのを確認し、上空に飛んでいるオウムヤミーノイズに目線を向けた。

「次はアイツだ!」

『ですが、フィーネに赤いコアメダルを奪われたのであのコンボでの空中戦は不可能です。空を飛ぶノイズに有効打はありません。撤退を推奨します』

「撤退?何を言ってんだライド?空を飛ぶ相手に有効な手段は・・・」

そこで一旦区切り、オーメダルネストから三枚の灰色のコアメダルを取り出してオーズドライバーに嵌めた三枚のコアメダルと交換する。

「まだ残っている!」

そう叫んで、オースキャナーでドライバーにセットした灰色のコアメダルをスキャンした。

――サイ！――

タカヘッドの前にサイの紋章が浮かび・・・

――ゴリラ！――

次に胸の前にゴリラの紋章・・・

――ゾウ！――

最後にゾウの紋章がバッタレッグの前に現れた。そして三つの紋章が一つになり、胸のオーラングサークルに重なる。その瞬間、俺の姿は大きく変わった。

――主人公視点　終了――

・　・　・

――三人称視点――

――サ・ゴーゾ・・・サツゴーゾォッ!!

その音声が鳴り響き、オーズの姿は大きく変わった。
頭部はタカヘッドから赤い目で白いサイを模した《サイヘッド》に変わり、腕のトラアームは銀色の剛腕の《ゴリラアーム》に、バッタレッグは腰にグリードのガメルと同じ鎧のようなスカートアーマーが付いたゾウのモールドが入った《ゾウレッグ》に。
これが、重量系のコアメダルを使ったコンボ・・《サゴーゾコンボ》である。
「ウオオオオオオオオオオオオッ!!」

―ドンッドンッ!!ドドドドドドッ!!ドンッ!!ドンッ!!ドドドドドッ!!ドンッドンッ!ドンッドンッ!ドドドンッ!!ドドドンッ!!ドドンッ!!ドンッ!ドンッ!ドドドドドンッ!―

サゴーゾオーズは雄叫びを挙げて両腕のゴリバゴーンで胸のオーラングサークルを叩き、激しくドラミングし始めた。
『マスター、一体何を・・・っ!?周辺に重力異常!?』
『キュエエエエエエエッ!?』
プロトベンダーに搭載されているサポートＡＩのライドが驚きの声を挙げると同時

に、上空にいるオウムヤミーノイズに変化が起きた。
なんと、オウムヤミーノイズの周りを囲むように灰色の球体が現れたのだ。その球体・・・超圧縮重力球がオウムヤミーノイズを閉じ込め、飛行能力を封じている。
――重力操作――
重力操作を行う核となる器官《グラビドホーン》が、両腕のゴリバゴーンに重力干渉命令を発信。
更にグラビドホーンからの重力干渉命令をゴリバゴーンが受信。ドラミングをすることにより重力波・重力力場を発生させ、オウムヤミーノイズの飛行を無効化。圧縮重力空間の檻に閉じ込めた。
更にオーズは重力の中心核を操り、オウムヤミーノイズを何度も地面に叩きつける。
地面に叩き付けられたオウムヤミーノイズは立ち上がるがダメージが大きいのかその動きが鈍く、再び飛行するには時間がかかりそうだ――
――その隙を見逃す程、オーズは甘くはなかった。
――スキャニングチャージッ!!――
オースキャナーでメダルをスキャンし、その場を跳躍した。すると、ゾウレッグの能

力解放によりその形状が変わる。両膝にゾウの顔を模した膝当てが形成、そして足首は本物のゾウを模した巨脚に変わった。

変化したゾウレッグで地面を砕いて着地。着地の衝撃がオーリング状のエネルギーとなり、立ち上がったオウムヤミーノイズの脚を拘束してそのまま地面ごとオーズの元に引き寄せた。

「ハアアアアアアアア・・・・・・ッ！」

オウムヤミーノイズは必死に抵抗するが、その拘束は緩まない。オーズは両腕のゴリバゴーンとサイヘッドを引き絞るように力を込めて能力解放。両腕のゴリバゴーンとサイヘッドの形状が変化した。

ゴリバゴーンは一回り大きくなり、本物のゴリラの腕に変わる。サイヘッドのグラビトホーンは巨大化して水平に伸び、より本物のサイに近い角に変わった。そして右足を引いて背中を反らし、両腕と頭にエネルギーを溜め込む。

「セイヤアアアアアーーーッ!!」

オウムヤミーノイズがオーズの前に来た瞬間、ゴリバゴーンとグラビトホーンを同時に叩き付けた。3点の衝撃により敵を粉砕する強烈な一撃。
その一撃の名は――

――《サゴーゾインパクト》

サゴーゾインパクトを打ち込まれたオウムヤミーノイズは、声を挙げることさえも許されず瞬時に爆散。跡形もなくその姿を消した。

――三人称視点　終了――

・　・　・

――主人公視点――

「ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・クッ・・・思ったより、時間がかかりすぎたか。急いでフィーネを追い掛けて、コアメダルを取り返さないと・・・」

『マスター、無理をしてはいけません。先ほどの戦闘とコンボを使った事により、あなたの身体にはとてつもない疲労が蓄積しています。追跡をすることは推奨できません』

変身を解除した瞬間、全身に途轍も無い疲労感が襲って来た。コンボを使用した反動で鉛のように重くなった身体に鞭打って何とか動かし、プロトベンダーに跨がってフィーネを追い掛けようとする。だが、ライドから追跡をやめた方が良いと勧められた。

「でも、フィーネが言っていた『カ・ディンギル』とやら・・・カ・ディンギルが何なのか解らないが、このままだと大変な事が起きるという事はわかる！」

『ですが・・・』

『あー、熱い台詞を言ってる所失礼する。済まないが、ちょっとこっちに戻ってくれないかな？』

ライドの言葉を無視してフィーネを追う為にエンジンを掛けようとした時、ライドが映っている画面から社長さんの顔が写りだした。

「社長・・・何のようだ？今はあんたと話している暇は――」

『フィーネについて話があると言ったら？』

――ッ！・・・わかった。直ぐそっちに戻る」

社長さんが言った言葉を聞きいた俺はフィーネを追う事を諦め、社長さんの居る会社に向かうのだった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・

フィーネの目的と社長の思惑と空間断裂剣

――デザイア・コーポレーション――

２５年前、経済界に現れた後、瞬く間に世界経済の半分を占める程に成長した巨大企業。

そこの社長である片桐眞人（かたぎりまさと）の豪快な経営手腕によって家電製品から食品開発まで幅広い事業を展開している。

更に彼は自ら世界中の紛争被害やノイズ災害にあった人々の下に赴き、心のケアや復興支援をしている人格者として評判がいい。

だが、そんな彼にはとある複数の組織と裏の取り引きしているという噂が流れているがその真相は不明である。

……因みにもうすぐ５０歳（アラフィフ）になる。

「年齢の事は言わないでくれるかなッ!?オジサン気にしてるからね!?」

・・・

――デザイア・コーポレーション、社長室――

――主人公視点――

―バンッ！―

「どういう事だよ社長さん！何でフィーネはコアメダルを狙っていたんだ!?
それにあいつが言っていたカ・ディンギルにバラルの呪詛とは一体なんだ!?」
フィーネが呼び出したヤミーノイズとの戦闘から社長さんのいる会社―デザイア・コーポレーション―の社長室に呼び出された俺は、呼び出した張本人である社長さんである片桐（かたぎり）　眞人（まさと）にどうしてフィーネがコアメダルを狙っていた理由とフィーネが言っていた《カ・ディンギル》と《バラルの呪詛》について質問していた。

「まあまあ、落ち着きたまえ。説明するから私が作ったケーキでも食べなよ。
てか、男に壁ドンされるのは流石の私も嫌だよ？姫川くん、彼にケーキと飲み物を頼むよ？」
「かしこまりました社長」
社長室に入って直ぐに窓際に立つ社長さんに近づいて窓に手をついた状態、いわゆる壁ドンから脱したい社長さんは落ち着くよう俺に言うと離れて見ていた秘書の姫川美香さんに指示を出すと彼女は返事をしながら頭を下げると社長室の出入口の扉とは別のもう一つの扉に入って行った。
「さて、何から話そうか？」

・
・
・

「……月にかけられた呪い【バラルの呪詛】、それにフィーネが８００年前に存在していた錬金術師の一人だった…？」
姫川さんに持ってきてもらったケーキを食べながら、社長さんから教えてもらった

フィーネについての説明を聞いて疑問の声を挙げた。
「そう、彼女が言った人類の意思疎通を妨げ、相互理解を阻む【月の呪い】。
遥か昔、【カストディアン】と称される人類の想像主が月を相互理解を阻害する【バラルの呪詛】の発生装置へと改造した。
それ以来、統一言語を失った人類に様々な不和を生み出し争う事になったと古い記録に残されている。
次にフィーネについてだが、その正体は先史文明期に存在していた巫女。調べてみると各歴史の転換期にフィーネらしき人物が記録に残されているのがわかった」
「ちょっと待ってくれ、それが本当なら何故フィーネはこの時代まで生きているんだ？フィーネは不老不死なのか？」
その説明を聞いた俺は社長さんにどうしてフィーネが生きているのか質問する。
「うん、いい質問だ」
社長さんは待ってましたと頷いて質問に答えてくれた。
「何故フィーネがこの時代に存在してるのか？それはね……フィーネは自身の遺伝子を持つ人物が聖遺物やその欠片が歌の力で起動する際に発生するエネルギー【アウフヴァッヘン波形】に触れる事で転生することができ長い時を生き続ける輪廻転生システム、【リインカーネイション】。

それがフィーネがこの時代まで生きていた理由だ。ああ、更に言うとねフィーネが８００年前に君の持つコアメダルを作った錬金術師の一人で、彼女がコアメダルを狙うのは当時その力を目の当たりにしたからだと私は睨んでいる」

『８００年前に裏切った私が許せなかったのか？』

（なるほどな……あれはそういう事だったのか）

社長さんのおかげで漸くあの言葉の意味を理解できて疑問が解消できた。

「次に【カ・ディンギル】とは先史文明の言葉でその意味は【高みの存在】転じて、天を仰ぐほどの塔を意味も言える。

更に詳しく調べてみてもゲームの攻略情報しか出てこないからこれ以上はわからないね。

……さて、それはさておき…フィーネにコアメダルを奪われたのは痛いね。しかも彼女はコアメダルについての知識を持ち合わせている。

もしフィーネが本当にコアメダルのエネルギーをそのカ・ディンギルに使用して月を破壊されたら……大変な事が起こるのは間違いないね？」

そう、問題はそこだ。

社長さんが言うには仮にフィーネが月を破壊したら、破壊された月の残骸が地表に落下して甚大な被害が出てしまう結果になる。そうなる前にフィーネからコアメダルを取り返して、【カ・ディンギル】の発射を阻止、又は破壊するしかない。

現在、社長さん自慢の解析班がフィーネの居場所について調べてもらっているが情報が少なく難航してるみたいだ。

「まあ、これ以上話しても何の解決にもならないからここまでにしようか。それにノイズとの連戦に重力のコンボを使ったんだ、もう身体が限界だろう？

フィーネについてわかったら連絡するから、今日はもう帰って休みなさい」

俺の身体の心配してくれた社長さんが話を切り上げてくれた。

「……そうだな。それじゃお言葉に甘えてそうさせてもらうよ。それじゃ社長さんまたな」

「ああ、気をつけて帰るんだよ。あ、ちょっといいかい？君が食べた私が作ったケーキは美味しかったかい？」

「クッソマズイ」

「ガーンッ!?」

そう言った俺は四肢を床に着いて落ち込んでる社長さんを無視して社長室を退室した。

―主人公視点、終了―

・
・
・

―社長視点―

「……言ったかね？」
彼が社長室を退室したのを見計らい、秘書である姫川君に確認を取る。
「はい、既にエレベーターに乗ってプロトライドベンダーが安置してる地下の倉庫に向かってます」
「そうか、ありがとう姫川君」
その言葉を聞いて私は床から立ち上がって身だしなみを整える。
「社長、よろしかったのですか？」
いつも通りの無表情だが少し躊躇しながら声をかけてきた。

「社長が――既にフィーネと接触して、彼女の目的も知っておきながら取引もしていた事を彼に伝えなくて？」
「……いいんだよ姫川君」
（全く、何を言うのかと思ったらそんなことか）
私は口の端を上げると社長室の棚に近づき、その上に置いてある地球儀に手を触れてから彼女の質問に答えた。
「人は誰しも欲望を持っている。どんな善人だろうと悪人だろうと欲望の為に生きている。
今回の事件の黒幕であるフィーネは愛しい人に会いたいという強い欲望で動いている、私はそんな彼女の素晴らしい欲望を叶える為に少し手を貸しただけさ、例え世界が壊れようとも……。
私はね、観てみたいのだよ姫川君。彼が……いや、正確には彼の持つオーズの力がこの世界に存在する欲望を乗り越える姿をね……。
そして――」
一度言葉を切ってから―ガシッ！―と地球儀を両手で掴んだ後、身体の向きを彼女に向けて地球儀を見せつけるように高々と前に掲げる。
「――彼の持つ欲望（力）がこの世界を救うのか、又はこの世界を飲み込むのか……、私はこの

目に焼き付けたいのだよ姫川君!!」

そう言った後、姫川君に地球儀を渡した私は社長机に置いてある小型端末を操作して地下倉庫に停めてあるプロトライドベンダーに乗り込んだ彼の姿が映り、更に端末越しにカメラを操作して彼の顔をアップする。

彼の顔を観た私はゆっくりと口角を挙げて、これから始まる戦いに飛び込む彼の姿を幻視しながら彼の名前を口にした。

「……私の欲望を満たしてくれるのを楽しみにしてるよ?仮面ライダーオーズ――」

――氷野(ひの)…　玲司(れいじ)君――

―社長視点、終了―

・
・
・

―玲司視点―

――夕方、河川敷――

「うーん……」

『どうしましたマスター？何か気になる事でもありましたか？』

社長さんと話をしてから数日が経ったある日、俺は河川敷で横になっていたが、さっきからウンウン唸っている俺を見兼ねたライドが話しかけてきた。

「ん？ああ、悪いライド…。実は社長さんと話した２日後に現れたノイズについて気になってた事があってな」

『気になる事ですか？』

そう、あの日に現れたノイズ達はフィーネが俺の持つ残ったコアメダルを奪うために放ったのかと思いオーズに変身してノイズ達を倒していたが、俺はノイズ達の動き違和感を感じていた。

「覚えているか？あの時のノイズ達は俺と戦っていたのに何体か別の場所に向かってた事を。

まるで誰かを探している動きだった……、当時の記録を調べてみてくれ」

『少しお待ち下さい……当時の映像データを確認しました。確かにマスターと戦闘して

いた個体達はその場に残り、他のノイズ達はマスターを無視して別の場所に向かってました』

ライドがプロトライドベンダーに搭載されている内蔵カメラで撮った当時の映像を確認してもらい俺はやっぱりと頷く。

「だろう?それに離れた場所からミサイルや銃撃の音が聞こえたし……一体フィーネは何を探していたんだ?」

暗くなる空を見上げてフィーネの行動について考えているとライドに搭載された通信機に社長から通信が入ってきた。

「大変だ氷野君!ノイズの反応が現れた!」

「!場所は!?」

その言葉を聞いた俺はすぐに起き上がってライドに近づき通信を繋げて、どこに現れたのか質問する。

「場所はそこから20㎞、更に通常のノイズの他にヤミーノイズの姿も確認している。それと、君への贈り物を姫川君に持たせてそちらに向かわせているから、彼女と合流して、荷物をもらったらすぐに現場に向かってくれ!」

「わかった!それで姫川さんはどこに――「既に到着してますので探さなくても大丈夫ですよ氷野さん」――うおぉっ!?いつの間に!?」

社長さんに姫川さんの現在位置を聞こうとしたら、いつの間に来ていた姫川さんが気配もなく俺の背後に立っていた。
「どうぞ、社長からのプレゼントです」
「あ、ああ…これはどうもありがとうございます」
姫川さんが長方形のジェラルミンケースを渡され、礼を言いながらそれを受け取った俺は開けてもいいか?と姫川さんに問うと彼女はコクンと頷いたのでケースの留め具を外し中身を確認するとそれを見た俺は驚いた。
「っ!これって……!」
ケースに入っていた中身、それは――
「……メダジャリバー……」
そう、原作の仮面ライダーオーズが使っていたオーズ専用の武器が俺の目の前に存在していた。更にその横には6枚の銀色のメダル、【セルメダル】も一緒に入っていた。
「社長からの伝言です。『足りない戦力はこれで補いたまえ』との事です」
「それはありがたいけど、……どうしてセルメダルがあるんだ?」
姫川さんにヤミーやグリードがいないのにどうしてセルメダルがあるのか質問すると、彼女は淡々とそれに答えてくれた。
「氷野さんが目覚めた棺を調べると大量のセルメダルの塊でできている事がわかり、そ

こから手に入れたセルメダルのエネルギーを解析して、ノイズに対抗出来るように現代の科学技術で作成したのが貴方が持つプロトライドベンダーやそのメダジャリバーです。

他にも様々な物を開発してますが、それはまたの機会にしましょう」

「そ、そうですか……と、とにかく行ってきます！」

現代の科学技術が凄いのか、それとも社長さんの会社の科学技術が凄いのかわからないがとりあえず納得した俺はケースを閉じて、プロトライドベンダーの荷台に固定した後、ライドに目的地までの最短ルートを調べてもらい目的地に向かって走り出した。

―主人公視点、終了―

・

・

・

―三人称視点―

―工場地帯―

そこには第二号聖遺物【イチイバル】の装者、雪音クリスと天羽奏と同じ第三号聖遺物【ガングニール】の装者、立花響の二人の装者が工場に現れたノイズの群れを倒していたが最後のノイズが倒せず攻めあぐねていた。

それは何故か?その理由はノイズ達の奥にカニを模した巨大なノイズ―カニヤミーノイズ―が持つ硬い甲殻により攻撃が通じにくいからだ。

更に背中の甲殻には卵のような物がついている。その卵が割れると卵からノイズが次々と現れる。ノイズが増える一方それを倒していく装者達に疲労が溜まっていく。

「クソッ!こいつらいい加減しつこいんだよ!」

【―ＢＩＬＬＩＯＮ　ＭＡＩＤＥＮ―】

悪態をついたクリスが両手に持った4門のガトリングになったアームドギアで増えたノイズを一掃しているが、カニヤミーノイズの甲殻についている卵からノイズが減った分だけその数を増やしている。

「この……っ!クリスちゃん後ろ!」

「…ッ!?チィッ!」

ノイズを拳で倒した響がクリスの背後から襲い掛かろうとする数体の飛行型ノイズに気付いめクリスに声をかけた。

響の声を聞いたクリスはその場を横に跳んで背後から襲い掛かる飛行型ノイズの突撃攻撃を避け、アームドギアを地面に刺さった飛行型ノイズに向けて引き金を引こうとしたが……。

「しまった!?」

ダチョウに似たノイズの嘴から出した粘性の液体がアームドギアとクリスの身体に当たり、クリスの動きを封じた。

「クリスちゃん!待ってて、今そこに…うわッ!?」

クリスを助けようと響が駆け寄ろうとしたが、そこに上空から飛行型ノイズ達の突撃攻撃が襲い掛かりそれに気付いた響はそれを避けながらクリスの下に行こうとするが、飛行型ノイズの他にカエル型ノイズや人型ノイズがそれを妨害する。

響は必死でノイズ達を炭に変えながらクリスに近付こうとする最中、ダチョウ型ノイズが出した粘液の拘束から抜け出そうとしていたクリスに再び数体の飛行型ノイズが彼女に襲い掛かる!

「クリスちゃん!」

（駄目だ…ッ、間に合わねぇ……ッ!!）

迎撃が間に合わず、痛みに耐えようとクリスが目を瞑ろうとしたその時。

――ダブル・スキャニングチャージ!!――

「セイヤァァァッ!!」

その叫び声の後、クリスに襲い掛かろうとした数体の飛行型ノイズに斬撃が飛び、数体の飛行型ノイズは二つに斬り裂かれ炭に代わりながら地面に落ちる。

クリスは誰がノイズを斬ったのか?と声が聞こえた方向に顔を向けると……。

「……」

プロトライドベンダーに乗ったオーズが左手に持ったメダジャリバーを横に振り終えていた。

・　・　・

・

――特異災害対策機動部二課、司令室――

「戦闘区域にシンフォギアとは別のエネルギー反応！」
「パターン照合、これは……オーズです！」
「オーズ……だとっ！」
特異災害対策機動部二課でオーズの反応が現れた事に弦十郎が驚きの声をあげる。

・　・　・

「なんだ…あいつは？」
「オーズさん!?」
「オーズ？…オーズって確かフィーネが前に言っていた魔王の……？」
クリスは自分を助けてくれたオーズの姿を見て疑問の声をあげている中、オーズはプ

ロトライドベンダーから降りてメダジャリバーの刃先を左手で添えた構えを取ってノイズの群れに向かっていく。

ノイズ達は装者達からオーズに切り換えてオーズに狙いを集中して攻撃を開始した。

オーズはメダジャリバーを振り、正面から来たノイズを斬り裂き、次に身体を回転して数体の飛行型ノイズを斬り落としたオーズは走る速度を上げて【オーラングルサークル】から生命エネルギーが【ラインドライブ】に流れ、バッタレッグに供給されるとオーズは地面を蹴り高く飛び上がりカニヤミーノイズに向けてメダジャリバーを振り降ろした！

―ギンッ！―

「っ！チィッ!!」

だが、カニヤミーノイズが上げたハサミに防がれオーズは舌打ちをしてメダジャリバーの切れ味を上げようとカニヤミーノイズから離れ地面に着地してオーメダルネストからセルメダルを取り出そうとする。

地面に着地したオーズに再びノイズ達が襲い掛かりオーズはセルメダルを取り出すのを辞めメダジャリバーを構えて迎え撃とうとした――。

―ズダダダダダダッ!!―

「ッ!?」

突然、上空から無数の銃弾がノイズの群れに降り注ぎノイズ達を炭に変えた。

「大丈夫ですかオーズさん!」

「これで貸し借り無しだ!雑魚共はなんとかしてやるから、何か手があるならさっさと使え!」

響がオーズに近づいたノイズを拳で殴り飛ばし、クリスがノイズ達に向けて銃弾を浴びせながらオーズに声をかける。

「任せた!」

オーズはメダジャリバーを左手に持ち換え、右手でオーメダルネストからセルメダルを三枚取り出しそれをメダジャリバーの柄にある投入口に三枚のセルメダルを投入してレバーを動かし剣身に装填されると右手に持ったオースキャナーをメダジャリバーの剣身に当て、剣身のスキャンし後、オーズはメダジャリバーを右手に持ち替え剣先に左手を添えてカニヤミーノイズに向けて構える。

――トリプル・スキャニングチャージ!!――

「ハアアアア……ッ、セイヤアアアアアアッ!!!!」
その声と共にオーズがメダジャリバーを右に振り抜いた瞬間――

―斬ッ!!―

「嘘ォッ!?」
「まじかよ……！」
――カニヤミーノイズの身体を目の前の空間ごと二つに両断した。

【オーズバッシュ】
オースキャナーでメダジャリバーに装填されたセルメダルをスキャンする事によりメダルのパワーを開放、メダジャリバーに解放されたエネルギーが集まり、メダジャリバーを振るう事で敵だけでなく振った空間も断裂する空間断裂剣。
空間も断裂するが空間は元に戻り、敵だけが両断される。

そのすぐ後に空間がカニヤミーノイズを除いて元に戻りカニヤミーノイズは爆散した。

・・・

――デザイア・コーポレーション、社長室――

薄暗い社長室で社長机に座る片桐眞人が背後に控えている秘書の姫川美香にオーズ―氷野玲司―について質問する。

「彼は？」

「はい、あの後無事にその場を離脱後、こちらに戻っています。同時にイチイバルの装者も姿を眩ましました、こちらは追跡しますか？」

「いや、追跡はいい。それでメダジャリバーの結果は？」

片桐がそう言うと姫川が手元のタブレットを操作して先ほどの戦闘での結果を報告する。

「はい、オーズバッシュにより断裂した空間に影響はなく、更に設計当初に予想されていた以上の威力が出されてます。研究班が結果に驚いていました」

「くくっ、そうかそうか」

片桐は椅子から立ち上がると社長室の壁に近付き、壁を操作すると壁が左右に別れ奥から一枚の巨大な石板が出てきた。

石板には所々欠けていたが様々な動物のレリーフが描かれており、その中で昆虫系、猫系、重量系のレリーフだけが緑、橙色、灰色のそれぞれの色で光っていた。

片桐は上部に視線を向けると一番上には中心に一つの眼がある黒い太陽がこちらを見下ろすように描かれ、その下には鳥類系のレリーフの内、タカのレリーフだけが赤く光っていた。

――三人称視点、終了――

フィーネと魔王とカ・ディンギル

――玲司視点――

――私立リディアン音楽院――

――スキャニングチャージ!!――

「セイヤァァァッ!!」

スキャニングチャージで強化された【ガタトラバ】の電撃をトラクローに流し込む。

その爪を素早く振るい、目の前にいる複数のノイズを炭に変えた。

「くそっ!なんでこんなにノイズがいるんだ!」

どうしてこうなっているのか・・・それは、数十分前に遡る。

――数十分前――

カニヤミーノイズを倒してから数日が経ったある日、社長さんから【私立リディアン音楽院】にノイズが現れたと聞き、ライドに乗って教えてもらった現場に急行した。するとそこには校舎を破壊している大量のノイズと、リディアンの生徒を避難させようと応戦している自衛隊の姿があった。

俺はすぐにオーズに変身し、生徒の一人に襲い掛かろうとした人型ノイズをライドの前輪でを轢き飛ばす。

『ひっ！ば、化け物!?』

『…っ！いいから逃げろ！死にたいのか!?』

『は、はいっ!?』

化け物と呼ばれ仮面の下で顔をしかめたが、いつも言われ慣れた言葉だと自分に言い聞かせて抑え込んだ。怯えている生徒を一喝すると、生徒は悲鳴を挙げてシェルターに向かって行く。そうだ、それで良い。

『マスター……』

『大丈夫だライド、いつもの事だ。今はノイズを倒すのが先決だ。さぁ行くぞ！』

心配して声を掛けてくれるライドに大丈夫と伝え、アクセルを回してまだ残っているノイズに向かって走り出した。

――現在――

ノイズとの激しい戦闘でライドと離れてしまった俺は、メダルチェンジで【タカゴリバ】に変わり【能力解放】で巨大なゴリラの腕に変化したゴリラアームで飛び掛かってきたカエル型ノイズを掴み取る。そしてこちらに向かって来るノイズ達に向けて投げ飛ばした。ノイズ達は吹き飛び、瞬く間に物言わぬ炭に変わった。

投げ飛ばした俺の背後からブドウ型ノイズが球体爆弾を飛ばしてくるが、額の赤い宝石【オークォーツ】の超感覚センサーでその攻撃をバッタレッグの跳躍で回避。両手で手を組んだゴリラアームのアームハンマーで、ブドウ型ノイズを叩き潰した。

「た、隊長！ノイズを倒しているあの化け物はどうしますか!?」

「わからん！だが、ノイズは何故かあの化け物に集中している。我々は今の内に避難を進めるぞ！」

「了解です！」

（……そうだ、それでいいんだ）

――タカ！――

――トラ！――

――バッタ！――

――タ・ト・バ！タトバ・タ・ト・バ！――

「俺はここだッ！来い！ノイズ共ォッ!!」

自衛隊が避難を進めているのを横目に、俺はこちらに向かって来るノイズ達にメダジャリバーを構えて走り出した。

・　・　・

「はぁ……はぁ……はぁ……っ！」

漸く大量にいたノイズを殲滅した俺はメダジャリバーを地面に突き立て、倒れ込まないように膝を着いて息を整える。

（…クソッ、なんで大量のノイズが学校に？フィーネは何を考えている？）

「なんだよ……これ……!?」

フィーネの行動について考えていると、後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。何とか膝に力を入れて立ち上がりゆっくりと後ろを振り向くと――。

「オーズ!?」

そこには天羽奏、風鳴翼、立花響、そして前の戦闘で会った銀髪の少女の四人が立っていた。

「どうしたんだよその姿……、ボロボロじゃないか……!」

「お前…達、か……」

「お、おい！大丈夫か!?」

彼女達の姿を見た俺は身体がフラついてしまったが、天羽奏が駆け寄り身体を支えてくれた。

「ここにいたノイズは、お前が倒してくれたのか?」

俺に近付いてきた風鳴翼がノイズを倒したのか質問されて、俺はゆっくりと頷く。彼女は「私達が来るまでノイズを倒してくれて感謝する」と頭を下げた。

「未来ぅーー！みんなーー！」

立花響が大声でおそらく友達の名前を呼ぶが、辺りに声が響き渡るだけだった。

「無様だなぁ……オーズ?」

不意に俺達の頭上から声が聞こえ、顔を上げる。半壊した校舎の上には眼鏡をかけ

た、腹部に血の跡を残す白衣を纏った茶髪の女が立っており、俺達を見下ろしていた。
「櫻井女史!」
「フィーネェ…!これはお前の仕業か!」
「っ!?あいつがフィーネだと!?」
銀髪の少女が言った言葉にも頷ける。俺だって、あの女が前に会った奴と同一人物には到底見えなかった。
フィーネと呼ばれた女は笑い声を挙げ、光に包まれる。その光が収まると、前に会ったフィーネの姿となり金色の鎧を纏った。その姿を見た俺はあの時会ったフィーネ本人と改めて確信し、拳を握り締める。
「フィーネ……ッ!」
「無様だなオーズ。この程度のノイズ共に膝を着くなんて……魔王と呼ばれていたかつての姿とは大違いだ。弱くなったものよ」
「言ってろ…お前こそ、なんでノイズをここに呼んだ…っ!」
天羽奏から離れ、どうして関係のない学校にノイズを呼んだのかメダジャリバーをフィーネに向けながら問い掛けた。
「フ、フフフ……ハッハッハッハッ!なんだまだ気付いてないのか!わかってここに来たのかと思ったが……滑稽だな魔王っ!」

「なんだと！」
「忘れたか？あの時私が言った言葉を」
フィーネは口角を上げて俺にヒントを口にする。
「あの時……まさか！」
「そう、そのまさかだ」
俺はまさかと思いフィーネの顔を見ると、フィーネは両手を拡げてその質問に答えた。
「貴様の考えた通り！ここが…この場所こそが！月を穿つ塔、カ・ディンギルが建つ場所だ!!」
フィーネが叫んだ直後、突然巨大な塔が地面を砕きながらその姿を現した。
フィーネは狂喜の笑みをこちらに向ける。
「これこそが地より屹立し、天にも届く一撃を放つ【荷電粒子砲カ・ディンギル】！」
「荷電粒子砲！それで世界が一つになると言うのか!?」
銀髪の少女が言った言葉にフィーネは自分の目的を話した。
それはかつて、己の恋心を拒絶した創造主【カストディアン】に会いたい一心の行動、【バラルの呪詛】そのものである月を破壊して世界を再び一つに束ねる為だと。
「それはお前が世界を支配すると言うのか!?安い……安さが爆発しすぎてる！」

「フゥ・・・永遠に生きる私の歩みを、余人が止める事などできない。そして――
――感謝するよオーズ。貴様が復活したおかげで、私の悲願が成就されるのだからな？
ああ、礼に貴様にこれを返してやろう。もうすでに用はないからな、こんな残りカスには」
―ヒュンッ―
「……なっ!?」
そう言い、フィーネは左手に持った何かを投げつけてくる。それを掴み取り、なんなのか確認した俺は眼を見開いた。
それは――

――【チーターメダル】と【カマキリメダル】、そして【クジャクメダル】と【コンドルメダル】、奪われた四枚のコアメダルが、色を無くした変わり果てた姿で俺の手に戻ったからだ。
「不思議と思うだろう？そのコアメダルの元となる欲望のエネルギーを、カ・ディンギルの強化の為に吸収した結果だ。
既にコアメダルに用はない、それがバラルの呪詛を解く糧になった事、精々喜ぶが良

い」

「……ふざけるなよ」

左手に持つ四枚のコアメダルを握り締め、フィーネに顔を向けて声を挙げた。

「ふざけるなっ！お前の・・・お前のふざけた欲望の為にッ！どれだけの人間が犠牲になったと思うんだ!?

そんなお前の欲望……俺は否定する!!」

「フッ・・・ならばやってみせろ、人間？」

俺の言葉を笑って流しフィーネはゆっくりと口角を上げる。俺を含めた五人は一斉に身構えた。

「―Ｃｒｏｉｔｚａｌ　ｒｏｎｚｅｌｌ　Ｇｕｎｇｎｉｒ　ｚｉｚｚｌ―」

「―Ｂａｌｗｉｓｓｙａｌｌ　Ｎｅｓｃｅｌｌ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｔｒｏｎ―」

「―Ｉｍｙｕｔｅｕｓ　ａｍｅｎｏｈａｂａｋｉｒｉ　ｔｒｏｎ―」

「―Ｋｉｌｌｔｅｒ　Ｉｃｈａｉｖａｌ　ｔｒｏｎ―」

四人の少女達が歌を唄い、一斉に鎧を纏った俺達はフィーネに攻撃を開始。

銀髪の少女が撃った光弾がフィーネが立っていた足場に着弾し土煙に包まれる。

地面に降り立ったフィーネに向けてメダジャリバーを振り降ろすが、フィーネは鞭で受け止め、鞭を大きく振って俺の身体を吹き飛ばす。

天羽奏が突き出す槍をフィーネは何でもなさげにかわし、すれ違い様に彼女の腹を蹴り飛ばした。
蹴り飛ばされた天羽奏を立花響が受け止め、その横を抜けて風鳴翼が剣を振るう。しかしフィーネはそれを腕の籠手で打ち払い、左の拳で彼女を殴り後退させた。
「喰らえっ!!」

【―ＭＥＧＡ　ＤＥＴＨ　ＰＡＲＴＹ―】

銀髪の少女が腰から撃ち出したミサイルを鞭の一振りで叩き落とすが、銀髪の少女は俺達に目配せを送る。それを見て意思を察した俺達は頷き、フィーネに一斉に飛びかかった。
俺はフィーネに展開したトラクローの斬撃を喰らわせるが、フィーネはそれを軽々と避ける。それに続いて天羽奏が槍を回転させ振り降ろすが、フィーネは彼女の横腹を蹴りを叩き込んだ。横にいた俺の身体ごと蹴り飛ばされ、地面に転がる。
風鳴翼が振り降ろした剣を剣状に硬直した鞭で受け止めつばぜり合いになったが、元の鞭に変えて彼女の剣を絡めとり上に弾き飛ばす。
「く、ならば!」

【―逆羅刹―】

風鳴翼は逆立ちになり、両足を拡げて身体を回転させ足のブレードで連続で斬りつける。

だが、フィーネは鞭を回転させて風鳴翼の攻撃を受け止めた。この程度では傷は付かんという余裕の表情は未だ健在だ。

「うりゃぁぁぁぁっ!!」

その隙を突き、立花響が横から飛びかかり拳を繰り出す。しかしフィーネはそれに気付き、左の籠手で防いだ。その衝撃で地面が陥没し、土煙が上がる。

俺達の攻撃をあしらいながら、フィーネはようやく銀髪の少女の狙いに気付いた。しかし一瞬早く、銀髪の少女が巨大なミサイルをフィーネに向けて撃ち放つ。

フィーネはそれを避けるが、銀髪の少女が放ったもう一つのミサイルがカ・ディンギルに向けて放たれカ・ディンギルに直撃すると思われる。だが……

「そうは……させるかぁぁぁっ!!」

フィーネは二つの鞭を二つのミサイルに向けて振るう。その二つは同時に斬り裂かれ、ミサイルは爆発した。

「なっ!?」
「そんな!?」
「これではカ・ディンギルが…!?」
「もう遅い!もうすでにカ・ディンギルの発射は止められない!これで終わりだぁっ!!」
ミサイルを止められ、少女達が驚愕の声を挙げる。フィーネは高笑いを挙げ、自身の勝利を確信して笑みを浮かべた。
(だが、それでも……)
「まだ、手はある!」
俺はメダジャリバーを握り締め、【オーラングルサークル】から流れたエネルギーをライインドライブを介してバッタレッグに込流し込み、地面を砕きながらカ・ディンギルに向けて跳躍した。
「オーズ、何をするつもりだ!?」
「無駄だな事を!チーターメダルを使えないお前ではもう間に合わない距離!!諦めろ、オーズ!!」
確かにバッタレッグの速さではカ・ディンギルの発射には間に合わない……けどな。
―オオオオ……ッ―
俺にはまだ……。

―オオオオオオオオオオオッ―
「頼りになる相棒がいる！ライドォッ!!」
『はい！マスター！』

―ブオオオオオオオオオオオンッ!!―

「バイクだとっ!?」
ノイズとの戦闘ではぐれてしまっていたライドが、地面に降り立つ地点まで自律走行で来てくれたからだ。
俺はライドに飛び乗って直ぐにアクセルを回し、フルスロットルでカ・ディンギルまで一気に近付く。そしてライドから降りてメダジャリバーを構え、オーメダルネストから三枚のコアメダルを取り出した。
メダジャリバーに一枚ずつコアメダルを投入しながらライドに声をかける。
「悪いなライド、こんな時まで俺に付き合わせて」
『いえ、私はマスターのサポートを目的に作られました。なので、最後まであなたに付き合います』
「……ありがとな」

俺は礼を言いながら最後のコアメダルを投入し終え、メダジャリバーのレバーを引押し込む。剣身にコアメダルが装填された瞬間、メダジャリバーからエネルギーが漏れだし火花が飛び散った。

「グッ……ガァァァァァァッ!!」

俺はメダジャリバーから逆流するエネルギーに齎される激痛に絶叫。しかしその痛みに耐えながら、オースキャナーを右手に持って剣身に当て、ゆっくりと剣身に装填されたコアメダルをスキャンしていく。

――サイ!――

一枚目のコアメダルをスキャンした時、俺は以前社長さんに言われた言葉を思い出した。

『何?メダジャリバーにコアメダルの使用は可能かって?うーん……まあ、結論から言うと可能と言えるが、あまりオススメはできないね』

――クワガタ!――

『何故かって？理由は簡単さ、セルメダルのエネルギーの解放であの威力だ。もしメダジャリバーにコアメダルを入れたとしたら、入れた途端にコアメダルのエネルギーがメダジャリバーに溢れ出るだろう。

そこでエネルギーを解放でもしてみたまえ。よくて剣が爆散、悪ければ逆流したエネルギーが君自身に襲いかかって命を刈り取る。そしてそのエネルギーを放てば、どうなるか私にはわからない』

――ライオン！――

『これだけは言っておくが、決してメダジャリバーにコアメダルを使用しない事だ。わかったかね、氷野君？』

（悪いな社長さん・・・あんたとの約束、破らせてもらうぜ）

――サイ！クワガタ！ライオン！――

――トリプル・スキャニングチャージ!!――

コアメダルのスキャンが完了した瞬間、カ・ディンギルが発射される。
「グ、　ガッ　……　アアアアアアアアアッ!!　セ　イ、ヤアアアアアアアアアアアアアッ!!!!」
「や、やめろおおおおおっ!!」
俺はエネルギーが溢れ出ているメダジャリバーを構え、下から上へと斬り上げる。メダジャリバーから熱と電撃、そして重力のエネルギーが混じった極大の斬撃が繰り出され、エネルギーを発射しているカ・ディンギルを真っ二つに切り裂いた。
「なぁっ、そんな……!?」
フィーネがその光景を見て信じられないと驚愕の声を挙げる。
「……はっ、ざまーみやが……」
―カッ!―
発射している途中で斬り裂かれたカ・ディンギルのエネルギーが爆発を起こし、近くにいた俺は回避する間も無く爆発に巻き込まる。俺の意識は其処で途切れた。

――玲司視点、終了――

奇跡と唄と不死鳥コンボ

――玲司視点――

気が付くと俺は、真っ白な空間に浮かんでいた。
「ここは……？そうか、俺はカ・ディンギルの爆発に巻き込まれて・・・死んだんだっけ？」
身体がふわふわする感覚に違和感を感じながら俺は両手を見下ろし、ここにくる前の事を思い出す。
「俺は、これで終わりなのか…？ん？」
胸に穴が空いた感覚を誤魔化そうと手を当てて強く抑え込んでいると、どこからか声が聞こえた。
俺は声が聞こえた方向に顔を向け、そちらに近付いていく。
「あれは……光？……くっ!?」
しばらく進んで行くと前方に光が見えた。それに手を伸ばすと突然強く輝きだし、光に包み込まれる。

「……一体何が……っ!?」

光が収まり目を開けると、先ほどいた空間とは全く違う、城のような場所に立っていた。

「なんだ?ここは・・・」

俺は驚き下を覗きこんで周りを見渡してみる。建物の造りとさっきから騒いでる人々の服装を観るに、どことなく中世の時代のようだ。

・・・

――ワアアアアツ!――

――王様ぁぁぁっ!!――

「王様・・・王様って、誰のことだ?」

疑問を浮かべ首を傾げる。すると俺の背後から、王冠を被り赤いマントを翻した男が現れた。

男が現れた途端人々の歓声が強くなり、思わず耳を押さえてしまう。

王様と呼ばれた男が右手を挙げると、あがっていた歓声がピタリと止む。静まった頃を見計らい、王は人々に向けて口を開いた。

『聞いてくれ、我が親愛なる民達よ！我は遂にッ！ノイズに対抗できる力を！手に入れた！』

――ワアアアアッ！――

王が放った言葉に、人々から再び歓声が上がる。それを見た王は嬉しそうに頷き、後ろに控えさせていたフード付きのローブを纏った人物を呼ぶ。そいつは直ぐに王の元に近寄り、その両手に持っていたどこか見覚えがある長方形の黒い箱と赤黄緑の三枚のメダルを王に渡す。

「あれって、オーカテドラルとコアメダル!?なんで・・・」

その光景に疑問が浮かぶ。王がオーカテドラルを腹部に当てると、飛び出した帯が腰に巻かれてオーズドライバーになる。

次に王は三枚のコアメダルをオーズドライバーにセットし、オースキャナーを右手に持って人々の前である言霊を口にした。

『変身！』

――タ・ト・バ！タトバ・タ・ト・バ!!――

――ワアアアアツ！――

――王！――

――王！――

――王！――

――王！――

――王！――

「…そうか、ここは……８００年前のオーズの時代、か」

俺は王が変身した姿を見て、漸くここが何処なのか分かった。

・・・

それから、王がオーズの力で現れたノイズを何度も倒していく姿を見た。
俺と同じ姿なのに怯えられず、それどころか喜ばれる。その姿はまさしく、王に相応しい行動だった。
『王よ・・・その力があれば、この世界をその手中に収める事さえ容易き事でしょう。なのに何故、その力を護る為だけに使うのですか?』
ある時、王は臣下の一人から質問された。その質問は、欲深い人間からすれば当然のもの。しかし、この優しき謙虚な王は違った。その家臣の方を振り向き、優しげな笑みを浮かべながら口を開く。
『分からないかな?この力を使うことで国を護る事、それは民を護る事に繋がる。
我は、民達が1日でも多く笑顔が続いて欲しい、そう強く願っているのだよ。その為に我はこの力を振るい続ける。この欲望のままにな。それに、世界を手にしてどうなる?我の心は既に、この国の民の笑顔によって満たされている。これ以上高望みすれば、

身を滅ぼすだけだ。大切なのは、身の丈にあった望みを抱く事。そして我の器は、この国の事で一杯なのだよ』

その言葉を聞いた臣下は頭を下げ、自分の浅はかな考えを王に謝罪した。

『―これが、８００年前の王の抱いた欲望。彼はただ、民達の笑顔の為にその力を振るい続けた。だが彼は最初、その為に力を求めたのではない。それは……―』

その光景を観ていると突然謎の声が聞こえ、辺りに響き渡る。

場面が変わり、月明かりに照らされた城のバルコニーで星空を見上げていた彼の元に一人の女が歩み寄って行った。

女に気付いた王は優しい笑みを浮かべて女と手を繋ぎ、共に宝石箱のような満天の星を見上げる。

『―愛なんだよ―』

「何故そこで愛!?」

謎の声が言った言葉に突っ込みを入れたが、謎の声は無視して俺に問いかけた。

『今代のオーズよ……お前は、何の為にその力を振るう?』

「何の為……俺が、俺が力を使う理由は……」

謎の声の言葉を聞いて、何故この力を使うと決めた理由を思い出そうとする。その時――。

『♪～♪～』

「歌？」

優しい歌が俺の耳に入り込み、身体の芯に染み渡った。暖かく、力強い歌だ。

「なんだ？この歌・・・心が、暖かくなる……これは、この歌は、一体……？」

『シンフォギアアアアアアアアッ!!』

聞こえてくる歌について考えていると、今度は背後から少女の叫び声が聞こえた。同時に、俺の意識が引き戻される。

・　・　・

目を開けると欠けた月が最初に視界に入った。
「ぐっ……俺は、生きている・・・のか？」
歌によって目が覚めた俺は、痛みに耐えながらゆっくりと身体を起こし、周りを見渡す。すると、少し離れた場所にライドが半壊した状態で横倒しになっているのを見つけた。
「ライド……」
立ち上がってライドに近寄り声をかける。しかし機能を停止したのか、返事は返って来なかった。
俺はライドの機体に触れ、最後まで付き合ってくれてありがとうと礼を零す。そして地面に散らばっていた三枚のコアメダルを拾いあげると、オーメダルネストから熱が感じた。
オーメダルネストからコアメダルを取り出すと、フィーネによって力を失った筈の【クジャクメダル】と【コンドルメダル】からドクン、ドクンと脈動するエネルギーが溢れているではないか。
まるでこの歌に反応してるかのように。
歌が終わると同時に、ここから離れた場所から四本の光が立ち上がった。そのすぐ後に少女達の声が空から聞こえ、上を見上げると、白い鎧を纏い、光輝く翼を生やして、空

を舞う少女達が目に映る。
「……天、使？」
未だ戦闘が終わってないのにも関わらず、俺は場違いにも素直に口にした。
「あっ、オーズさん！無事だったんですね！」
「本当か！」
「オーズ……良かった、生きていたんだな……っ！」
俺に気付いた立花響の声に反応し、他の少女達もこちらを見る。
「オーズ…!!生きてたのか……この死に損ないがぁっ!!」
「フィーネ……っ！」
俺に気付いたフィーネが顔を歪めて、怒りが籠った瞳をこちらに睨みつける。
「何故だ！何故だ何故だ何故だっ!!何故貴様は私の邪魔をする!?化け物の分際で!!
８００年前の時もッ！そして今もッ！貴様は、貴様は一体何がしたいんだ!!答えろ魔王ッ!!」
フィーネは頭をかきむしり、子供のように取り乱しながら問う。
（そうだ、俺はこの力を使う理由は既に決まっていたんだ！）
「そんなのは決まっている……俺は……いや、俺の名は……!!」

クジャクとコンドルのコアメダルから放たれる熱を右手に感じながら、俺は今まで名乗らないと決めていたあの言葉を、その意味と重みを背負うと覚悟を決めて口にした。

「《仮面ライダー》だ!!魔王でも化け物でもない……一人の仮面ライダー・・・愛と平和を願い望む戦士として!これ以上誰かが、涙を流すのを俺は見たくないッ!それが俺の欲望だッ!!

だから俺は!フィーネ・・・お前の欲望を……止めてみせる!!」

その言葉と共に、二枚のコアメダルを握る右手から炎が上がる。

上空にいる少女達から驚きの声が聞こえたが、不思議にも熱はなく、それどころか暖かさを感じる。それはまるで、過去の王が残した暖かい想いのように感じられた。

俺は目を閉じてコアメダルを握り締め、胸に当てる。コアメダルから流れてくる炎にここにいる人達の想いが込められており、さっきまで負っていた傷が癒え、更に身体に蓄積していた疲労が消えていくのを感じた。

「フィーネ!お前に見せてやるよ!コアメダルの……いや、人間の欲望が起こした奇跡を!!」

俺は目を開いてフィーネに宣言し、オーズドライバーからトラメダルとバッタメダルを抜く。そして力が戻り元の色を取り戻したクジャクメダルとコンドルメダルをオーズドライバーにセットし、オースキャナーを右手で握った。

「っ!?まさか……させるかぁぁっ!!」

【―ＩＭＰＥＲＩＡＬ　ＥＤＧＥ―】

俺がやろうとしている事に気付いたフィーネは、鞭を振り上げて俺の頭上から振り下ろす。衝撃と共に轟音が鳴り響き、俺の身体が土煙に包まれた。

「オーズゥゥッ!?」

「これで奴も……っ!?」

天羽奏が叫び、フィーネは俺を倒したと嗤う。だがしかし、奴の攻撃が当たる直前、俺コアメダルのスキャンするのが間に合った。俺の身体は、紅蓮と金の炎に包まれる。

――玲司視点、終了――

・

・

・

――同時刻――

――デザイア・コーポレーション、社長室――

社長室に設置してある石板が、炎に包まれるオーズに反応するように輝く。石板の上部に描かれた鳥類系の三枚のレリーフの内、クジャクとコンドルのレリーフが赤い色に染まると、鳥類系のレリーフから炎が沸き起こった。

それと同時に石板の欠けた部分が自動的に修復されていき、今まで見られなかった他の動物のレリーフが浮かび上がる。

「うおぉおおおおおっ!?素晴らしいッ!!」

その光景を見た石板の前に立つ片桐眞人は、燃え続ける石板に狂喜の笑みを向け、両手を拡げて歓喜の声を挙げた。

「遂に……!遂にその名を受け入れたか、氷野君!!

漸くこの世界に、仮面ライダーが真に誕生した!もう一度改めてこの言葉を君送ろう……!

ＨＡＰＰＹ　ＢＩＲＴＨＤＡＹ　!!この世界にようこそっ！

仮面ライダー……

オオオオオオズゥゥゥゥゥゥッ!!!!」

・

・
・
――三人称視点――

――タカ！――

――クジャク！――

――コンドル！――

――タ～ジャ～ドル～～ッ!!――

その音声の後、土煙から炎が立ち昇り、炎から火の鳥が現れ頭上にいた装者達よりも空高く舞い上がった。

「……はぁッ！」

火の鳥が弾け飛ぶと、紅にそまったオーズが姿を現した。その背中からは3対の赤い翼【クジャクウイング】を展開し、孔雀の飾り羽のような虹色のエネルギーを広げる。

現れたオーズの姿は、先ほどまでと大きく変化していた。

タトバコンボの状態から大きく変化し、3倍に強化された超視力と周囲の空気の流れを敏感に察知しする、飛行に特化したスペックとなったタカヘッド・ブレイブ。

背中に畳んであった【クジャクウイング】を展開し、空中を超高速で飛行するクジャクボディ。

爪先に【ストライカーネイル】、踵に【ラプタードエッジ】と呼ばれる鋭利な爪を備え、膝から下を巨大なコンドルの鉤爪に変化させて炎の蹴撃を繰り出すコンドルレッグを備える天空の王者。

オーラングサークルは他のコンボのようにそれぞれのメダルをつなげたものではなく、一羽の不死鳥の模様になっている。

それは【タカ】、【クジャク】、【コンドル】をオーズドライバーにセットし変身した、仮面ライダーオーズの鳥類系コンボ形態……

天空を支配し、その身に宿る炎で敵対する者全てを焼き尽くす、炎の戦士。

その名も……仮面ライダーオーズ・タジャドルコンボ・・・

フィーネの手によって失った欲望の力が今、ここに復活した。
「赤い……オーズ？」
「綺麗……っ」
「すげぇ……！」
「まるで……不死鳥みたいだ」
少女達の驚き声を挙げているとフィーネは顔を歪めてオーズの姿を見上げる。
「炎のオーズか……！８００年前、敵対する者を全て燃やし尽くした紅蓮の炎！その焔で、私を焼き尽くすつもりか？」
「違う！この姿は、ここにいる人々から紡いだ想いによって復活した姿！お前を倒す為ではなく、お前のその欲望を止める為の……想いの力だ!!」
オーズは手を振り払い、フィーネの言葉を強く否定する。
「だが、例え限定解除したギアと炎のコンボがあろうと、私を止められると思うなぁぁぁぁぁっ!!」
フィーネが声を張り上げソロモンの杖を上に掲げると、光が放たれる。光がある高さまで上がると光が弾け飛び、リディアン音楽院を囲むように大量のノイズが現れた。
「こんなに大量に……！」
「はっ！全員まとめてぶちかましてやる！」

「私達も雪音に続くぞ！」
「は、はい！」
大量のノイズを前にした装者達だったが、クリスが先行してノイズの元に向かい、翼と響もクリスの後に続いて飛んで行く。
「……オーズ！」
「ん？」
彼女達に遅れてその場にいた奏はオーズの近くまで飛んで彼に話しかけた。
「あんたには色々言いたい事があったけど、これだけは言っておく！……あんたが無事で、本当に良かったよ！」
言い終えた奏は、照れ隠しに直ぐ身体の向きを変えて街に現れた大量のノイズを倒しに向かった。
「ほう…？貴様一人で、この私を相手にするか？」
「ああ、そうだ。言っただろ？お前の欲望を止めると…」
「……ふ、私を舐めるなよ！オーズ!!」
フィーネはソロモンの杖を左手に持ち、自身の身体を飛翔させた。空中を飛んでいるオーズに向かい、右手に持った鞭を鋭く振るう。
だが――、

―シュッ―

「消えっ……ガッ!?」

フィーネの鞭がオーズに当たる直前、オーズの姿がかき消えた。鞭が何もない空間を切り裂きフィーネは驚いていたが、下方からオーズが繰り出した炎を纏う強烈な蹴りが彼女の腹部を繰り上げる。

そしてオーズは身体を捻り、追撃言わんばかりにフィーネの背中に踵を振り落とした。フィーネの身体は落下して地面に激突。土煙が舞い上がる。

「その鎧は空を飛べるみたいだが、タジャドルコンボの超音速飛翔には遠く及ばないらしいな。お前の鞭すら、今の俺には止まって見える」

オーズはゆっくりと地面に降りながら、地面に落下したフィーネに声をかける。

「ぐぅ…っ!なっ、再生が遅いだとっ!?どういう事だ!?」

フィーネは地面に手を着いて身体を起こしオーズの姿を睨み付ける。その腹部と背中には大きな火傷が出来ていて、ネフシュタンの修復能力で身体を再生させていた。しかし、コンボの力のせいか傷の治りが遅くなかなか再生しないようだ。

「まだ俺の攻撃は終わってないぞ、フィーネ!」

左手を前に、右手を横に伸ばした構えを取ったオーズは地面を蹴り、フィーネに向かって駆け出す。そして、拳と蹴りを織り混ぜたコンビネーション攻撃を繰り出した。

フィーネは完全に修復が終わってない身体を動かしてオーズの攻撃を捌いていくが、オーズの鋭い蹴りがフィーネの身体を後方に蹴り飛ばす。
「がぁっ!?……くっ、舐めるなぁぁぁっ!!」
フィーネはオーズに向けて鞭を繰り出したが、オーズは左腕をオーラングルサークルに翳す。するとオーズの左腕に胸のオーラングルサークルと同じ模様が彫り込まれた、オーメダルのエネルギーを解放する【タジャスピナー】が装着、フィーネの鞭を受け止めた。
「っ!?防いだだと!?」
「ふっ…はぁっ!!」
「ぐぅっ!!」
小盾を上に上げて鞭をかち上げ、タジャスピナーを前に突き出して炎弾を飛ばしてフィーネを吹き飛ばした。
「ぬぅぅ・・・どういう、事だ……ッ、何故、身体の再生が遅い!?一体、私に何をした!?オーズ!!」
「別に、俺は何もしてないさ。俺にわかるのは、コアメダルを通して感じる……人々の欲望(想い)の力という事だ!!」
「想い……だと!?ふざけているのか!」

「待たせたなオーズ！」

オーズの言葉に激昂するフィーネ。その時、二人の頭上から声が聞こえた。

「どれだけいようが、所詮はノイズ！あたしらの敵じゃねーよ！」

「もう貴様に手はない、降伏しろフィーネ！」

「手がない……だと……？ククク……否！私にはこの手がある！」

大きく言い放ち、フィーネはソロモンの杖を自身の腹に突き刺した。

「「「「なっ!?」」」」

それを見た五人は驚愕の声を挙げるが、フィーネの変化はまだ終わらない。

未だ残っているノイズが一体、また一体とフィーネの身体を取り込み……否、逆にフィーネがノイズを取り込んでいき、その姿とサイズを変えていく。

『来たれ…っ、デュランダル!!』

ノイズを取り込んだフィーネは巨大になった手を伸ばし、破壊されたカ・ディンギルの地面を砕いて地下に設置してあるデュランダルを取り込む。そして地面を砕きながらその姿を巨大な姿、黙示録の赤き竜へと変えた。

赤き竜の頭部から閃光が放たれると、着弾地点で爆発が起こった。

「街が！」

『逆さ鱗に触れたのだ……相応の覚悟は、出来ておろうな？』

フィーネの言葉を聞いた五人はすぐに動き、それぞれ赤き竜に攻撃を加える。が、傷付けた箇所が先ほどとは桁違いの速度で再生された。
「早すぎる！」
「こちらの攻撃が通じないとは！」
『いくら限定解除されたギアであっても、所詮は聖遺物の欠片から作られた玩具！完全聖遺物に対抗出来るなどと思うてくれるなっ!!』
「「ッ！」」
響とオーズを除いた三人はフィーネが言った言葉を聞いて、フィーネに対抗できる方法が頭に浮かび顔を見合わせる。
《聞いたか？》
「回線をオフにしろ」
「もう一度、やってみるぞ！」
「だが、そうなると……」
三人は後ろにいる響の顔を見る。
「え？えーと、やってみます！」
響は戸惑いつつも、両手を握りこんだ。
「オーズ、お前も手伝ってくれるか？」

「ああ。倒せる手があるなら、その案に乗ってやる」
「よし、それじゃ……行くぞ！」
響をその場に残して、四人は散開する。ある程度飛んでいくと翼はその場に滞空して剣を構え、オーズと奏は空高く舞い上がり、クリスは赤き竜に近づく。
「はぁぁぁぁっ！」
【―蒼の一閃・滅破―】
翼が先ほどまでより更に大きくさせたアームドギアを振り下ろすと、通常より強力な斬撃が赤き竜の身体を傷がつき、風穴が開いた。
「喰らいな！」
傷つけた場所は修復されるが、完全に修復される前にクリスが中に侵入。内部にいるフィーネに向けて光のミサイルを撃ち出し、爆煙に包まれた。
『くっ、小賢しい！……っ!?』
「はぁぁぁぁっ！貰ったぁぁぁぁっ!!」
【―ＵＬＴＩＭＡＴＥ∞ＣＯＭＥＴ―】
フィーネは蔓延した煙を排出しようとシャッターを消すと、開いた視界の先に光を纏った奏が槍を突き出し高速で接近して来る。フィーネは咄嗟に光の壁を展開、奏が突き出した槍とぶつかりあい爆発を起こした。

その衝撃によって、フィーネが持っていたデュランダルが飛び出した。
「それが、勝利の切り札だ！」
「っ！」
「勝利を逃すな！掴み取れ、響！」
「ちょせぇ！」
クリスが拳銃で響が掴み取れるようにデュランダルを弾き、響は手を伸ばして掴み取る。
―ドクンッ―
デュランダルを掴んだ響の身体が一瞬で黒く染まり、デュランダルから光が輝き出した。
響が自身の中にある破壊衝動に抗いながらデュランダルを握り締めていると地上にあるシェルターの扉が吹き飛び、中から風鳴弦十郎が出てきて響に発破をかける。
「正念場だっ！　踏ん張りどころだろうがっ!!」
「っ!!」
「強く自分を意識してください！」
「昨日までの自分を！」
「これからなりたい自分を！」

弦十郎に続いて緒川、藤堯、友里がシェルターから出てきて響に声をかける。
「ミんナ…！」
声をかけられた響は呑み込まれそうになった意識を繋いだ。そして翼、クリス、奏が響の周りに集まり、彼女の肩に触れて声をかける。
「屈するな立花。お前が抱えた胸の覚悟、私に見せてくれ」
「お前を信じ、お前に全部賭けてんだ！　お前が自分を信じなくてどうするだよ！」
「その拳は誰かと繋ぎ合わせる為のものだって言ったのはお前だろ！お前の想いはその程度じゃないって所を見せてくれよ！」
それに続くように地上から再び声がかけられる。
「あなたのお節介を！」
「あんたの人助けを！」
「今日は私たちが！」
響のクラスメイトである寺島詩織、板場弓美、安藤創世が響に声をかける。
だが、それをフィーネは黙っていなかった。
『かしましいっ！黙らせてやる!!これで消し飛べっ!!』
フィーネは赤き竜に残っていたデュランダルのエネルギーをかき集め始めた。赤き竜の頭部から光が漏れる。

そして光線を響達を向けて繰り出そうとしたその時。

――スキャニングチャージ!!――

「はぁぁぁぁぁぁぁっ！セイヤァァァァァァッ!!」

竜の頭上からオーズが、能力解放で巨大な鉤爪に変化したコンドルレッグによる必殺の蹴撃、【プロミネンスドロップ】を叩き込む。その鉤爪は赤き竜の頭部を抉り、蹴り砕いた。

「オーズ、貴様ぁぁぁぁっ!!」

「そのままいけっ！」

オーズは響にそう言って、フィーネに向けてタジャスピナーの炎弾を撃ち続ける。

「グググ、ガアアアアアッ!!」

「響いいいいーーーーっ!!」

「はっ！」

小日向未来の叫びに破壊衝動に呑み込まれそうになった響の意識を取り戻す。

「そうだ……この衝動に、塗り潰されてなるものかぁ！」

その言葉の後に黒く染まっていた響の身体が元の姿戻ると光の翼が大きく拡がった。

『その力…、何を束ねたっ!?』

「響き合う皆の歌声がくれた、シンフォギアだあああああっ!!」

【―Ｓｙｎｃｈｒｏｇａｚｅｒ―】

響は両手に握った光輝くデュランダルを赤き竜に向けて振り下ろし、赤き竜を上から真っ二つに斬り裂きながら爆発が起こる。

『完全聖遺物同士の対消滅……!?どうしたネフシュタン！　再生だっ!!この身、砕けてなるものかアアアアアアアッ!!』

再生しようとフィーネが叫び声を挙げるが、完全聖遺物同士の対消滅によってネフシュタンの再生能力が停止され、フィーネの身体は爆発に包まれた。

こうして、一人の女の欲望が生み出した戦いはこれで終結した。

――三人称視点、終了――

終わりと始まりと新たな欲望

立花響に助けられたフィーネが最後の悪あがきにネフシュタンの鞭を天高く伸ばし、月の欠片を地表に落とそうとしたあのルナアタック事変から二ヶ月が経過した。

月の欠片の落下を阻止しようと装者達四人は月に接近、絶唱を唄い月の欠片を破壊した。

その時に装者達は行方不明となり、しばらくしてから死亡したと情報が流れたが、その三週間後に街に現れたノイズを倒した時に生存が確認された。

そして、装者達と共にフィーネと戦っていたアンノウン、《仮面ライダーオーズ》については、各国から過剰戦力ではないかと問い詰められたが、オーズの存在は数年前に世界中に確認されていた為、日本政府からは自国が保有している力ではないと反論。

オーズの所在を調べようにも装者達が月に向かった後、その姿を消している為、行方が知られていない。

その後、度々現れるノイズを倒す彼の姿が目撃され、オーズの力を手に入れようと各国から狙われている。

又、彼が乗っていた黒いバイク《プロトライドベンダー》の残骸からオーズについて

調べていた日本政府だったが、調べられた瞬間に発動するよう仕掛けられていたのか既にデータが消去されていた為オーズに関する情報を得られなかった。

・
・
・

――デザイア・コーポレーション――

――社長室――

「お久しぶりです、片桐社長。昔会った時とは変わりませんね貴方は」
「はっはっはっ、ありがとうナスターシャ教授！そういう貴女も変わらないね！」
社長室でこの会社の社長、社長机に座った《片桐眞人》が目の前の車椅子に座る女性、《ナスターシャ・セルゲイヴナ・トルスタヤ》に笑い声を挙げる。
「フフ、お世辞はいいですよ。相変わらず破天荒な人ですね」
「イヤー、よく知り合いの青年に言われてるよ！はっはっはっ！」

ナスターシャに言われた片桐は照れ臭そうに頭を掻く。いつもの彼からは信じられない光景である。

その顔をよく見るとうっすらと頬が赤くなっていた。

「…ゴホンッ、ところで本気なのかい？米国政府から離れるということは、世界を敵に回す事だ。

確かに米国から開示された情報は君が言った通り偽りの情報だ。そして世界を救う為に貴女はその準備を進めている」

「ええ、その通りです。そして計画を前に貴方からこの場に呼び出されました。

それで私を呼んだのはただ世間話をするだけではないでしょう？」

ナスターシャの問いかけに片桐は口角を上げて、背後に控えていた姫川に声をかける。

「……ああ、そうだね。そろそろ本題に入ろうか？姫川君、彼を呼んでくれ」

「かしこまりました」

姫川が頭を下げて片桐に言われた【彼】を呼びに一度社長室から退室した。

「……ところで、貴女の後ろに立つそこの彼は一体誰だい？」

片桐がナスターシャの背後に立っている白衣を着た銀髪の男性について質問する。

「ええ、彼は……」

「自己紹介くらい自分で出来ますよ、ナスターシャ教授」
ナスターシャが紹介しようと口を開くが、銀髪の男性がそれを止め、片桐に話しかける。
「はじめまして、Ｍｒ．片桐。僕の名はジョン・ウェイン・ウェルキンゲトリクス。周りからはウェル博士と言われています。
そして――英雄になる男です」
「ほう…っ?」
銀髪の男性――ウェル博士は薄い笑みを片桐に向けるとそれを見た片桐は、ウェル博士の内にある欲望を感じとり、眼を見開く。
「英雄…か、面白いことを言うね君は。
だが……素晴らしいっ!!
素晴らしいよＤｒ．ウェルッ!!まさかこの時代にそのような欲望を持つ人間に出会えるなんて!」
「いえいえ、世界がこんな状況だからこそ、英雄が必要なんです。
そこを僕達が世界を救い!僕は英雄と呼ばれる!
この飽くなき夢を見て、誰かに夢を見せるものそれこそが英雄であることっ!!」
「「……」」

―ガッシッ！―

話しの中に通じる何かを感じた二人は、無言で近づいた後、固い握手をかわす。

それを黙って観ていたナスターシャは額に手を添え、ため息を吐く。

「お待たせしました社長」

社長室に【彼】を連れてきた姫川は、握手を交わしている二人を観ても表情を変えず片桐に声をかける。

「おお、待っていたよ。ナスターシャ教授、彼を貴女のチームに連れていきたまえ。彼はこう見えて腕が立つ、貴女の目的に必ず役に立つ筈だ」

片桐に紹介された男は、「よろしく！」と笑顔を浮かべナスターシャに挨拶する。

「よろしいのですか？もしかしたら、彼の命が亡くなるかもしれませんよ？」

「大丈夫、大丈夫！こう見えても何度も死線を潜り抜けてきたんだ。あんたが心配する程ではないぜ、ナスターシャ教授？」

「……わかりました。では、よろしくお願いします」

【彼】の答えを聞いたナスターシャは、握手を求めようと手を差し出すと、それを見た【彼】は笑顔を浮かべて握手に応じた。

・　・

ナスターシャ達がデザイア・コーポレーションから去った後、片桐は社長机に飾られていた、複数の男女が写った写真立てを眺めた後、傍に控えていた姫川に声をかける。
「あれの開発状況はどうかね？姫川君」
「はい、プロトタイプの開発状況は現在、セルメダルを使用した武装の展開、固定化まで完了してます。
ただ、現状では一つだけですが…」
姫川は手元に持つタブレットを操作して、画面に表示された情報を片桐に報告する。
「ふむ、そうか。一ヶ月後の【ＱＵＥＥＮＳ　ｏｆ　ＭＵＳＩＣ】までに最低でも、武装を後二つは増やしておくよう開発班に伝えるように」
「かしこまりました」
片桐の指示を受けた姫川はタブレットの画面を消して、頭を下げた後、スマートフォンを取り出し、開発班に通信を繋げ片桐が言った内容を伝える。
姫川から視線を外した片桐は、引き出しから出した金色縁取られた三枚の黒いコアメダルとＭと記された緑色のＵＳＢメモリを手に持って眺める。

（しかしＤｒ．ウェルか……、中々面白い欲望を持った男だ。彼なら、この二つを起動させる事が出来るだろう。

……そして、彼女達が保有するネフェリムが起動すれば、あれが確実にこの世界に現れる！）

狂喜の笑みを浮かべた片桐は、この場にいない仮面ライダーオーズ―氷野玲司の姿を思い浮かべる。

「楽しみにしてるよ氷野君……、君の欲望が新たな欲望を止める事が出来るのを……!!」

片桐の欲望に呼応するようにと彼の手にある黒いコアメダルがドクン、ドクンと生きているように脈動した。

フロンティア編
ハイテンションと列車と虎とらトラ

ルナアタック事変から三ヶ月後、山口県、岩国にある米軍基地に向かって、疾走する完全聖遺物【ソロモンの杖】を載せた貨物列車に空を覆い尽くさんとする大量の飛行型ノイズに襲われていた。

ノイズ達の行動は統率された動きで正確に列車を狙っていた、まるで何者かに操られているかのように……。

飛行型ノイズを撃退しようと列車から、立花響、雪音クリス、二人のシンフォギア装者が列車の上に立ち戦闘を開始、その拳と弓で飛行型ノイズを次々と倒していく。

「あーもう！倒しても倒してもきりがない！どうなってんだ!?」

「っ！クリスちゃん、あれ！」

次々とノイズを撃ち落としているクリスが愚痴をこぼしていると、視界に入った何かに気付いた響がクリスに声をかけ上空に指を指す。

響が指した指の先に、高速で接近するコウモリを人型にしたノイズ――コウモリヤミーノイズが上空から姿を現した！

コウモリヤミーノイズが現れた途端、他の飛行型ノイズの動きが変わり二人を翻弄する。

「ノイズの動きが変わった!?」

「どうやらあれがこいつらを率いてる親玉みたいだな?」

二人が身構えているとコウモリヤミーノイズが口にあたる箇所から口が開き、そこから空気を超振動させて音の攻撃、《超音波》を二人に向けて放つ!

「はっ!一体何をするつも……ぐぅっ!?」

「あぁぁぁっ!?み、耳が痛い…!?」

コウモリヤミーノイズの超音波を浴びた二人はその超高音に耐えきれず耳を抑えてしまい、動きが鈍ってしまい、その隙を見逃さなかった取り巻きの飛行型ノイズ達は形を杭の姿に変えて二人に襲いかかる!

「く、この……っ!?」

クリスは片耳を抑えてアームドギアをガトリングの形に変えて襲いかかる飛行型ノイズを迎撃しようと構えたが、コウモリヤミーノイズが超音波を更に強くしたせいでガトリングを構える事が出来ず膝を着いてしまい、飛行型ノイズが彼女達の頭上に迫ったその時!

――ガアオォォォォォォォンッ!!!!――

突然猛獣のような雄叫びが聞こえるとコウモリヤミーノイズが放っていた超音波が掻き消され、直前まで襲いかかっていた複数の飛行型ノイズもその動きが止まった瞬間、炭に変わり崩れ落ちた。

「な、何が起こったの?」

「それにさっき聞こえた雄叫びは?……っ!おい、あれ!」

「えっ!」

クリスが線路の後ろに指を指すと線路の先から大きな影が獣のような動きをしながらこちらに向かってくる。

その姿を確認しようと二人は目を凝らすと……。

「ウェェイツ!?」

「な、なんだあれっ!?」

それを見た二人は驚きの声を挙げた、何故なら……。

――ガオォォォォォォォォッ!!!!――

虎のような姿を模した機械が雄叫びを挙げながら、前足らしきのを上げてそこからメ

ダルの形をしたエネルギー弾を放ち、飛行型ノイズ達を撃ち落としていたからだ。

・
・
・

――同時刻――

――二課仮設本部――

「なんだあれは…っ！」

二課仮設本部で風鳴弦十郎は画面に映った装者達の前に現れた虎のような機械を観て驚愕の声を挙げた。

「一体誰があんな物を？」

「これは……っ、司令！」

「どうした！」

弦十郎が虎のような機械を誰が開発したのか考えていると、画面を観ていた藤尭がノイズとは別の反応が現れた事に気付き、弦十郎に報告する。

「高速で接近する何かが、戦闘エリア内に侵入しました！」
「なんだとぉっ!!」
「パターン照合…モニターに出します！」
「こ、こいつは…っ!!」
パターンを照合した藤堯がモニターに映し、それを観た弦十郎は再び驚愕の声を挙げた。
現れたエネルギーの正体、それは……。
・
・
・
「あれは一体……？」
「あれ？クリスちゃん！あの虎みたいの後ろからまた何か来るよ！」
「今度はなんだっ!?」
虎擬きの更に後方からやって来たのは…。
「おいっ！いい加減に止まれライド!!」

「「オーズ（さん）っ!?」」

そう、後方からやって来たのは、【タカトラーター】にメダルチェンジしたオーズが高速で独走している虎擬き――トライドベンダーであるライドを追い掛けてきたからだ！

何故、オーズがトライドベンダーを追い掛けているのか?そして、ルナアタック事変の時に破壊された筈のライドが何故いるのか?

それは数十分前に遡る。

――三人称視点、終了――

・・・

――玲司視点――

「あれがソロモンの杖を載せた貨物列車か?」

『はい。片桐社長の情報通り、ノイズが列車を襲撃してますので間違いありません』

オーズに変身した俺は、雨が降り続ける山の上からライドベンダーに組み込まれたライドと共にノイズに襲撃されている貨物列車を見下ろしていた。

え？なんで破壊されたライドがここにいるのかって？あー、説明すると長くなるんだけど、簡単に言うと……。

『私のおかげだネ！』

「勝手に人の地の文に干渉してくんなよ！馬鹿社長っ！」

ライドが映っていた画面が変わり、俺の天敵であるデザイア・コーポレーションの社長、片桐眞人の顔が画面に映った。

『最近ちょっと冷たすぎない君？二ヶ月前、新たな機体に生まれ変わったライド君を会わせてあげたのは私なんだよ？』

「ああ、確かにその件は感謝してるよ。けどな……ライドとは二度と会えないと言ったのはどこの誰だったのか言ってみろよっ!?」

そう、フィーネが起こしたルナアタック事変が終わった後、ライドは日本政府に連れていかれ、機密保持の為にデータを消去して二度と会うことはないとこの男の口から聞かされた。

それから一ヶ月がたったある日、社長さんに呼び出され、完成した新たな機体、【ライ

ドベンダー】の引き渡しとそれに組み込まれた消えた筈のライドが戻ってきたからだ！
『やだなー、人聞きの悪い。ライド君は規定値以上のダメージを受けたら、自動的に我が社にある専用ＰＣに転送されて無事だったけど、日本政府に連れていかれたプロトライドベンダーは二度と戻って来ないと私は言ったんだよ。
　早とちりはいけないよ？』
「こ、この男はぁ……!!」
　拳をわなわなと震わせて、戻ったらこの男の顔を全力で殴ると決めて、なんで連絡をしてきたと質問すると社長さんは待ってましたと指を鳴らした。
『そうそう、君に伝え忘れていた事があってね。ライド君の荷台にある物を入れて置いたんだよ開けてみたまえ』
「ある物？」
　そう言われ、振り向いてライドに取り付けられた荷台を確認すると、前と同じジェラルミンケースが取り付けられていた。
　荷台からジェラルミンケースを取り出して中を見ると、ジェラルミンケースから赤黄緑のどこか見たことがある三本の缶が入っていた。
『驚いたかね氷野君！フィーネの欲望を阻止した君の為に開発した、カンドロイドさっ!!

フィーネとの戦いでの経験を生かし、オーズの戦闘をサポートしてくれる頼れる存在だ！これを使えばもしもの時や、戦闘の幅が拡がる事間違い無しさっ!!』

「おおっ！本物のカンドロイドだ、スゲー……ッ！」

『って、無視かいっ!?』

俺は社長の話を無視して、三本のカンドロイドの【プルトップスターター】を引いて、【缶モード】から【メカモード】に変形させる。

ヤミーの追跡やセルメダルの回収する役割を持つ、赤いタカを模した【タカカンドロイド】が俺の頭の上に乗り、ウサギにも見える姿で、通信機や移動型のライブカメラになる緑色のバッタを模した【バッタカンドロイド】が俺の手のひらに飛び乗り、巨体化してライドベンダーと合体する事が出来る黄色の虎を模した【トラカンドロイド】が俺の肩に乗る。

『…ゴホン！全く、君は人の話を聞いてくれないのかい？』

手のひらに乗っているバッタカンドロイドから映像画面が空中に投射され、社長さんの顔が映る。

『まあ、それはいいとして…少し面白い事を教えよう』

「面白い事？」

社長さんの言葉に首を傾げ、話を聞く姿勢を取るとトラカンドロイドが俺の肩から降

りてライドの前に降り立つ。
『おや？どうしました？』
『ガオガオ』
『はあ…、つまらないから少し付き合えと？構いませんが、私は何をすればいいのですか？』
『ガオガオッ！ガオガオガーオ！』
『自分と合体すればいいと……はい？合体？』
　ライドがトラカンドロイドと話しをしてるのを他所に俺は社長さんの話しを聞いていた。
『トラカンドロイドがライドベンダーと合体したら、特定のコンボではないと乗りこなせないのは知っているね？』
「ああ、確かラトラーターコンボの過剰放出するエネルギーを抑える役割を持っているラトラーターコンボ専用機で、その代わりそれ以外のコンボでは制御できないモンスターマシンだったな？」
『その通り！』
　ウゼェ……。
「…で？面白い話ってなんだ？」

『そうそう、実はライド君を作った時、彼女の性格の元になったモデルがいてね。トラカンドロイドと合体したら、元となった彼女と同じような事が起こるように設定したんだ。

イヤー、苦労したよ。彼女にバレないようにデータを取るの、まさかハンドルを握ると性格が変わるなんて…普段の彼女からは想像できないね！』

社長さんの言葉を聞いて俺は素直に驚いた。確かにＡＩにしては人間臭い感じがしたけど、まさかモデルがいたとは……一体誰をモデルにしたんだ？

『何を言っているんだい？既に君も会ってる姫川君に決まっているだろう？』

「だからまた地の文に……いやまて、今なんて言った？」

社長さんが言った信じられない言葉を聞いて、つい聞き返してしまった。

えっ？マジで姫川さん？あの知的美人の？

『驚くのも無理はない。まあ、とにかくトラカンドロイドと合体する時は注意するように――『社長、ちょっとよろしいでしょうか？』――あれぇっ!?姫川君!?いつの間に!?』

『少し聞き捨てならない話を耳にしたので……。それで？私の性格が…何ですか？』

『ヒイィィィィィィィッ!?』

画面の向こうで社長さんの悲鳴が響いた。

俺は目を反らして、そろそろこの場を離れるかとライドに顔を向けると……。

『ヒャッホーッ!!絶好の爆走日和でーすっ!!』

「……ハッ?」

信じられないのを観て思わず呆けてしまった。

「ら、ライド…?」

俺の目の前に見慣れたライドベンダーではなく、トラカンドロイドと合体した【トライドベンダー】となったライドが普段のあいつからは想像がつかない口調で前足の形をしたメダルエネルギーを射出口を高く上に上げた後、山の斜面を下り初める。

『誰も私を止められませーんっ!!』

「ライドさん、どこに行くッ!?」

俺はライドに声をかけるが彼女はハイテンションのまま、ノイズの元へ走り去って行った。

『驚いたかね?そう!これがトラカンドロイドと合体したライドの【テンションチェンジシステム】!!

姫川君の性格をモデルにした時は私も驚いたが普段の彼女とは違うギャップがオタク心をくすぐる素敵仕様!

フフフ……何、礼はいらないよ。君が喜ぶと思ってやった事さ……』
「姫川さん。その馬鹿、代わりに殴っておいてください」
『かしこまりました。全力で振り抜きますのでご安心ください』
『あれ、ちょっと君達!?』

――タカ！――

――トラ！――

――チーター！！――

バッタカンドロイドが投射してる投影画面から鈍い音がするのを尻目に、【タカトラーター】にメダルチェンジした俺は急いでライドの跡を追い掛けに山の斜面を下って走り出した。

・　・
・

「おい！ちょっと、待てって！」
　そして現在、漸くライドに追いついた俺は制止の声をかけるが、ライドの耳に届いてないのか速度を緩めない。
「あーもう！こうなったら……ハァッ！」
　俺は地面を跳躍してライドに飛び乗り、振り落とされないようにハンドルを強く握る。
『ちょっと！何勝手に乗っているんですか!!セクハラで訴えますよ！』
「ドサクサに何を言っているんだお前は!?」

――ライオン！――

――トラ！――

――チーター！――

――ラタ・ラタ・ラトラァータァー!!――

俺は突っ込みをいれながら、振り落とされないように左手でハンドルを握り、右手でオーメダルネストからライオンのコアメダルを取り出し、タカメダルと交換してオースキャナーでコアメダルをスキャンしてラトラーターコンボにコンボチェンジした。

ラトラーターコンボになった途端、過剰放出したエネルギーがトライドベンダーを通して循環され体力の消耗が落ち着いた。

『あれ、マスター?私、何か粗相をしてしまいましたか?』

「漸く落ち着いたか……。それより、覚えてないのかよ……うおっ!?」

線路の上で停止していると頭上から飛行型ノイズ達が攻撃を仕掛けてきた。

「詳しい事は後で話す!今は周りのノイズを……グゥッ!なんだこれ!?耳が……ッ!?」

突然、俺の耳に不快な音が入り、ハンドルから手を離し両手で耳を抑える。

『マスター……っ!上空に超高音の音波を確認!あれが原因ですか。

あれの対処方は……これです!』

――ガアアアオオオオオオオオオッ!!!!――

ライドが原因を調べると雄叫びを挙げると、不快な音を掻き消してくれた。
「音が……！」
『私の雄叫びで超音波を相殺しました。その原因であるヤミーノイズの姿も確認してます。
行きましょう、マスター！』
「ライド……っ。ああ、行くぞ!!」
俺はトライドベンダーになったライドのハンドルを握り、フルスロットルでその場を駆け出し、一気にトップスピードになると、そのゴツイ見た目からは想像できない猛獣のような動きで木々を足場に飛行型ノイズを次々と砕き、前足の射出口からメダル状のエネルギー弾を発射して撃ち落としていく。
線路の上に降りて、次のノイズを倒そうと顔を上げると仮面ライダー電王に登場するバットイマジンに似たノイズ――コウモリヤミーノイズが俺に向けて超音波を放ってくるが、ライドが再び雄叫びを挙げて超音波を相殺する。
超音波を相殺されたコウモリヤミーノイズは、自身の攻撃が効かない事に戸惑っているのか顔をキョロキョロと振った後、身体の向きを変えてに既に遥か先に向かった貨物列車の跡を追い掛けようとする。
その隙を俺達は見逃さなかった。

「決めるぞ！」
『はい！』

――トリプル・スキャニングチャージ!!――

俺は左手にメダジャリバーを持ち、セルメダルを装填した後、すぐにオースキャナーでセルメダルをスキャンして右手でアクセルを回し、木々を足場にコウモリヤミーノイズに躍りかかる！
「はぁぁぁぁぁぁ……っ!!」
俺達に気付いたコウモリヤミーノイズは迎撃しようと超音波を出そうとするが、それをさせる前にライドが雄叫びを挙げてコウモリヤミーノイズの動きを止め、動きが止まったコウモリヤミーノイズに一気に近付いてメダジャリバーを振り抜いた！

「セイヤァァァァァァッ!!」

メダジャリバーを振り抜いた俺達はコウモリヤミーノイズの身体を通り過ぎて地面に着地した瞬間、コウモリヤミーノイズの身体は爆発した。

――玲司視点、終了――

・　・　・

――弦十郎視点――

「貨物列車、無事に戦闘エリアの離脱を確認、そのまま目的地まで向かっていきます」
「そうか…、今回もオーズに助けられたな」
「本当ですね。もし、あの時オーズが現れなかったらどうなっていたことか……」
「ああ、そうだな…」
藤尭の報告を聞いた俺は息を吐いて肩の力を抜き、先ほど現れたオーズの事を考えていた。
（三ヶ月前、日本政府が回収したオーズが乗っていたバイク。データは全て消されていたが、機体を調べた結果、未知の技術の塊だったと記されていた。

そして、今回彼が乗っていた虎のような機体……一体、誰が彼を支援している？）

俺はモニターに映っている全身が黄色の姿のオーズの姿を黙って観ることしか出来なかった。

――弦十郎視点、終了――

宣戦布告と廃病院と復活の巫女

――三人称視点――

最大規模の音楽祭典《ＱＵＥＥＮＳ　ｏｆ　ＭＵＳＩＣ》。
そこで新進気鋭のアーティスト・マリア・カデンツァヴナ・イヴと天羽　奏と風鳴翼の《ツヴァイウィング》はこの日だけの特別ユニットを組む事になった。
ライヴの結果は大成功、歌い終わった三人は会場やカメラ越しにいる観客達に各々のコメントをして、この特別ライヴが終わりになると誰もが思われた。
だが――
先頭の観客席の前に大量のノイズが現れた事により、会場は混乱に陥った。
混乱に陥った観客達に「狼狽えるな！」と叫んだマリアはノイズが出現して身構えた奏と翼に声をかけた後、世界に向けて宣戦布告を告げた後、ある聖詠を――二人にとって聞き覚えがある聖詠を唄った。
「―Ｇｒａｎｚｉｚｅｌ　ｂｉｌｆｅｎ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｚｉｚｚｌ―」
その聖詠を唄い終えた瞬間、マリアの姿は大きく変わっていた。

全身の色と黒いマントを身に付けた以外、奏と同じ聖遺物、《ガングニール》身に纏ったマリアが彼女達の前に立っていた。

それを見た奏と翼はマリアを止めようと聖詠を唄おうとしたが、二人の耳に嵌めた通信機から二人のマネージャーである緒川　慎司が制止の声がかけられた。

シンフォギアを纏わない二人を一瞥したマリアは会場にいる観客達を解放した後、マリアは二人に剣のようなマイクをレイピアのように構えて襲いかかった！

翼と奏は自身も持つマイクを剣のように持ち替えて応戦したが、二人のマイクの柄が真ん中から折れ、二人はそれをマリアに向けて投げ捨てカメラの目が届かないステージの裏に出ようと駆け出した。そうはさせるかとマリアが、マイクを二人に向けて投擲した。

二人は跳躍して投擲されたマイクをかわしたが、着地した直後、翼の履いているヒールの踵が折れてしまい彼女の姿勢が崩れてしまった。

「駄目よ……貴女達がステージを降りるのは許されない！」

その瞬間を逃さなかったマリアが放った蹴りを腹部に受けてしまい、翼の身体はステージから観客席の上に蹴り飛ばされた。

観客席にいたノイズ達が蹴り飛ばされた翼の命を奪おうとまだ宙にいる彼女の下に集まり、その死を招く手を伸ばし出した。

「っ！勝手な事を！」
「翼ぁぁぁぁーーーっ！」
「……聴くがいい！防人の歌を！」
　自身の下に集まったノイズを見た翼はこの場を打開する為に歌女である自身と決別すると決意して、聖詠を唄おうとした。その瞬間――
―ズドドドドドドッ!!―
「な、なんなの!?」
「これは……うわっ!?」
　夜空が見えるように展開している会場の天井から無数の炎に包まれた孔雀の尾羽の弾丸が観客席にひしめくノイズ達に降り注がれ、ノイズ達は抵抗する事もなく炎に包まれ、その身を爆散した。
　ノイズ達が炎に包まれた光景を見て、聖詠を唄うのを止めた翼が驚いている間に上空から現れた赤い影が彼女の身体を抱き抱え、ステージの上に降り立った。
　三人は会場に現れた赤い影を見て、驚きの表情を隠せなかった。
「な、あなたは……！」
「どうして、ここに……？」
「……そう、あなたがマムが言っていた。ルナアタック事変を解決に導いた一人。仮面

ライダー……」

「……」

その赤い影は抱き抱えていた翼を地面に下ろし、顔をマリアに向ける。

「オーズッ！」

赤い影――仮面ライダーオーズ・タジャドルコンボは、左腕に装着してる小盾――タジャスピナーを前に出して、マリアに向けて構えを取った。

・
・
・

――1週間後――

――特異災害対策機動部二課、仮設本部――

「以上が会場のカメラに映ったオーズの映像です」

仮設本部の司令室のモニターに一週間前に全世界にその姿を晒した仮面ライダーオーズ・タジャドルコンボが映った場面で映像が止まり、藤尭が後ろに立つ風鳴　弦十

郎に声をかける。
　本来の歴史なら制御室に到着した緒川が会場のカメラの中継を全て止める筈だったが、何者かに制御室のコンピューターをハッキングされ、中継を止める事が出来ず、翼が聖詠を唄おうとしたその瞬間。
　会場の上空から現れたオーズ・タジャドルコンボにより助けられ、その姿をカメラを通じて全世界に晒した直後、中継が切断された。
　まるで、オーズの存在を世界に知らしめるかのように――
「この映像はＳＮＳを中心に世界中の動画サイトに蔓延していて既に隠蔽が不可能になってます」
「そうか。遅かれ早かれこうなると了子君が言っていたが、まさかこのタイミングになるとはな……」
　友里がこの映像をきっかけにオーズの存在知った世間の反応を告げると弦十郎は腕を組み、以前フィーネ――櫻井　了子が言っていた言葉を思い出していた。
「しっかし、危ない所でしたね？あの時、中継が切れるのが遅れて、あの場に現れたオーズが翼さん達を助けなかったらどうなっていたことか……」
　モニターに映った情報を整理していた藤尭が一週間前に現れたオーズについて口を開いた。

「そうね、二人の正体を世界中に知られずにすんだけど、その代わりオーズの存在が確実に知られた事が世界にどう影響するかが心配だけどね……」

続いて口を開いた友里の言葉をこぼす中、弦十郎は視線をモニターに映るオーズの姿を観ていた。

（……読めんな。まるでオーズの存在を世界に知らしめるかのようにした手際。一体、何が目的なんだ？）

・
・
・

――デザイア・コーポレーション、社長室――

「こちらがF．I．Sが潜んでると思われる廃病院の資料です。襲撃は深夜にお願いします」

社長室にてこの会社の社長、片桐　眞人秘書である姫川　美香が仮面ライダーオーズ――氷野　玲司にこの一週間で調べ上げたF．I．S　が拠点にしている使われてい

る廃病院が映った写真がプリントされた資料を彼の前の机に差し出した。
「どうも。……その前に社長さんちょっと聞きたい事があるんだけどいいかな？」
「なんだね？」
　玲司は姫川に礼を言った後、資料を目で追いながらか、社長の片桐に声をかけた。
「一週間前、何でオーズの姿を世界中に晒すような事をしたんだ？」
「……何の事かね？」
　問われた片桐は少し間を空けてから答えるが、玲司はそれを一蹴した。
「惚けるなよ。あの後、おかしいと思ってライドに調べてもらったが。当時、会場にあった全ての中継カメラにハッキングされた形跡があった。ご丁寧に逆探されないように痕跡を消してな。
　それに、俺のサポートをすると言ったあんたがそんなヘマをするとは思えない。なら、答えは簡単――」
　そう言った玲司は椅子から立ち上がり、社長机に座っている片桐の前まで移動するとバン！と右手で机を叩き、彼に詰め寄るように顔を近づける。
「あんたがそうなるように仕向けた。……違うか？」
「……クッ」
　事実を突き付けられた片桐は片手で顔を覆うように当てると、上半身を反らして堰を

切ったように笑いだした。
「ハーッハッハッハッハッ！素晴らしい！素晴らしいよ氷野君！まさか君にバレるとはねぇ。やはり君と会って正解だよ！」
「もう一度聞くぞ、社長さん？何でそんな事をした？あんたは一体何を考えている？」
笑い続ける片桐に玲司はもう一度問いかけると片桐は笑うのをやめて、玲司の問いに答えた。
「ハーッハッハッハッ……ふぅ、失礼した。だが、それはまだ言えない。言えないが、この世界の為としか…今は言えないね」
「……わかった。でも、もしあんたが俺を利用して何かをしようとするなら……」

――俺があんたを止めてみせる――

そう言った玲司は資料を手に取ってから、社長室を跡にした。
「……よろしいのですか？」
「いいんだよ姫川君。まだ彼に知られる訳には行かないからね。ああ、そうだ。明日までにこれを彼らの新たな拠点にまで運んでくれるかね？」
玲司が出ていってから、しばらくして姫川が片桐に問いかけると、片桐は片手を上げ

て大丈夫と告げた後、机の下から《M》と記されたUSBメモリと《甲殻生物》が刻まれた黒いコアメダルが入ったジェラルミンケースを取り出して、ケースの留め具を外しそれを姫川に見せてから頼むと彼女は軽くため息を吐いて、「かしこまりました」と頭を下げた。

――三人称視点、終了――

・　・　・

――玲司視点――

「オラァァアッ！」

オーズ・タトバコンボに変身した俺は社長さんに教えられた廃病院の通路に現れた人型ノイズを《メダジャリバー》で斬り裂いた。

続けて身体を斬られたノイズの後ろにいた別の人型ノイズの身体を斬り払う。ノイ

ズが炭化するのを待たず、次のノイズにメダジャリバーを振り翳す。
「（チィッ、こんなにノイズがいるなんて……社長さんの情報通り、ソロモンの杖を持っている奴がF．I．S　にいるみたいだな）……っと！」
《―ダブル・スキャニング・チャージ！―》
「セイヤーッ！」
身体を槍のような形態に変化してこちらに向かってくる残り数体のノイズをメダジャリバーを横に振り払って地面に叩き落とし、剣身を《オースキャナー》でスキャンしたメダジャリバーでセルメダル二枚分の斬撃を飛ばし、迫りくるノイズ達を纏めて斬り裂いた。斬り飛ばした斬撃が威力を衰えず壁にぶつかった。
その威力に耐えきれなかったのか壁が崩れ落ち土煙が舞い上がる。その直後に壁の向こうから聞き覚えがある声が聞こえた。
「うわぁっ！急に壁が崩れた!?」
「いきなりなんなんだよ！」
「新手か！」
声が聞こえた俺はまさかと思い、土煙が舞う崩れた壁の向こう側まで歩いて行くとそ

ここには予想していた人物達がいた。
「な！オーズ!?」
「何故あなたがここに?」
　壁の向こうにいたのはシンフォギアを纏った四人の装者達が俺の姿を見て各々驚いた表情をしていた。
「(やっぱりお前達か……)それはこちらの台詞だ。何故お前達がここにいる?」
　俺は何故彼女達がここにいるのか質問を投げると四人を代表して風鳴　翼が変わりに答えてくれた。
「私達は使われてない筈の廃病院に運ばれた物資を調べた結果、ここに奴らが潜伏していると判断したからだ」
「なるほどな。それで、奴らとはもう遭遇したのか?」
「いや、まだだ。今のところノイズしか会ってない。けど、なんかあたしらのギアの調子がおかしいんだ。あんたは大丈夫なのか?」
「おかしい?」
　それを聞いた俺は自分の手を見下ろしてから、いつもと変わらないと伝えようとしたその時――。
　彼女達の背後から大型犬くらいの大きさの黒い化け物が飛び掛かってくる姿を目撃

した。
「ッ！危ねえっ！」
「ギギィッ！」
「せい！」
咄嗟に彼女達の前に飛び出してメダジャリバーで斬りつけたが、化け物は姿勢を整え天井に両足を付けて再び俺達に襲いかかるが、そうはさせじと風鳴　翼が自身が持つ剣で化け物に斬りつけた。
だが、地面に落下した化け物は二度も剣で斬られた筈なのにとその身を炭化する事もなく、ゆっくりと立ち上がった。
「何っ!?」
「アームドギアを受けて炭化しないだと!?」
「ならノイズじゃない？」
「じゃあ、あの化け物はなんなんだよ！」
俺達がそれに驚いていると通路の奥から拍手をしながら、白衣を着た眼鏡をかけた銀髪の男が現れた。
「不意打ちに対応できるとは流石は魔王。……意外に悟いじゃないですか」
「お前は？」

「ウェル博士！」
「そんな！博士は岩国基地でノイズに？」
「まさか、ノイズの襲撃は全部……！」
　現れた男に首を傾げていると装者達は目の前の男とは知り合いなのか驚きの声を上げた。それに答えるようにウェル博士と呼ばれた男が微笑を浮かべてそれに答えた。
「ええ、その通りです。あの時既にアタッシュケースではなく、コートの内側に隠しておいたんです」
「じゃあ、あんたはソロモンの杖を奪う為にノイズを操って、自分が襲われる芝居をしていたのか！」
　ウェル博士はノイズを呼び出しながら、俺達にソロモンの杖を持ち出した理由を説明した。
「バビロニアの宝物庫からノイズを呼び操る、それを可能にするこの杖以外他ありませんよ。何より……この杖の所有者は英雄を目指す僕に相応しい。そう思いませんか？」
「思わねーよ！」
　そう言ってノイズをけしかけたウェル博士に雪音　クリスが叫ぶと同時に腰のリアスカートから、大量のミサイルが放たれた。

――玲司視点、終了――

――三人称視点――

クリスが放ったミサイルがウェル博士が呼び出したノイズに着弾して爆炎が上がり、廃病院の天井と壁が崩れ落ちた。だが、ウェル博士は呼び出したノイズを盾にする事で爆炎から身を守り、攻撃した筈のクリスの身体が傷つき、翼に肩を借りていた。

何故、シンフォギアとの適合係数が高い彼女が苦しんでいるのか。それは先ほどまで廃病院に充満していた赤いガスのせいである。

【―Ａｎｔｉ―ＬｉＮＫＥＲ―】

ウェル博士がＬｉＮＫＥＲの研究の間に新たに生み出したＬｉＮＫＥＲの対存在。生体と聖遺物の繋がりを阻害し、装者とシンフォギアの適合係数を低下させる効果を発揮する。

適合係数の低下は、シンフォギアからのバックファイア低減率に作用するため、それだけで装者の戦闘力を大きく殺ぐ猛毒になる。

クリス達は先ほどまで密閉された空間にいた為、適合係数が下がった状態で出力の高

い技を繰り出したせいでギアのバックファイアを受けてしまった。
「あ！ノイズがさっきのケージを持って空に！」
　響の声を聞いて夜空を見上げるとその言葉通り、ノイズがネフィリムが入ったケージを持って空に飛んでいく姿を目撃した。
（さて、身軽になった所でそろそろ僕はおいとましよう……とはいきませんね）
　ノイズがネフィリムが入ったケージを持って去るのを見て、自身もこの場から去ろうとしたウェル博士だが、彼の周りを奏、響が槍と拳を向けているのを視認して逃げられないと解ると抵抗する気はないと両手を上げた。
「翼！ここはあたしらとオーズに任せて空のノイズを追え！」
「奏……わかった、お願い！」
　ウェル博士が投稿した後、奏は翼に任せろと声をかけ、翼はクリスをゆっくりと崩れた壁にもたれさせて逃走している空中輸送型ノイズを追いかけに行った。
「無理だ、あの距離では飛ばない限り追い付けないぞ！」
「大丈夫だ、翼なら必ず追い付ける。何故なら……」
　ウェル博士を拘束を響に任せた後、空にいるノイズを追いかける翼を見たオーズの言葉に奏は大丈夫と声をかけると目線を海に向かって走り続ける翼の背中を見る。
　その言葉通りに翼は助走をつけて、道が途切れている道路を蹴り、両足のブレードの

バーニアを噴かせて空中を駆ける。
しかし、助走して飛距離を稼いだが徐々に失速していき、そのまま翼の身体が海に落ちてしまうと誰もがそう思ったその時。

「潜水艦!?」

ザザァー!と海中から通常より巨大な潜水艦が現れた!
翼はその先端に一度着地して再び空中へ駆け、アームドギアを振るい輸送型ノイズを斬り刻んだ後、海中に落下していくネフィリムが入ったケージへと手を伸ばし後少しで掴める距離になったその時。
「うあっ!?」
「「翼(さん)!」」
上空から降ってきた黒い槍が翼に直撃してしまい、突き飛ばされた翼は海面に落ちてしまい、彼女を突き飛ばした黒い槍の先端が海面に突き立つように直立すると、その柄頭の上に軽々と着地してケージを掴み取った黒いガングニールを纏ったマリア・カデンツァヴナ・イヴが現れた。
「マリア・カデンツァヴナ・イヴ!」

「時間通りですよ、フィーネ」
「っ！あいつがフィーネだと!?」
　彼女の姿を見た奏は彼女の名前を叫ぶとウェル博士はそれを否定するかのように現れたマリアを見て、かつてルナアタック事変でオーズ達が戦った終末の巫女の名前を口にすると、それを聞いたクリスは目を見開き信じられないと言葉をもらした。
「終わりの意味する女。僕達の組織の名前にして象徴であり彼女の二つ名である。そう彼女こそが……」
「そんな、あの人が……」
「新たに目覚めし、再誕したフィーネです！」
　驚く装者達の疑問に答えるようにウェル博士は淡々と告げ、彼の後ろ手を拘束している響はマリアの姿を見て、かつて自身の前で消えてしまったフィーネの姿を思い出し、驚愕の声を洩らし、その場にいる彼女達は信じられないと表情を浮かべるしかできなかった。
「……フィーネだと？」
　――ただ一人、オーズだけはその言葉に違和感を感じていた。

――三人称視点、終了――

文化祭と選択とカプセルライダー　前編

――三人称視点――

「……フィーネ、だと？」

ウェル博士が言った言葉に登り始めた朝日をバックに佇むマリアの姿を見たオーズは内心疑問の言葉が浮かび上がる。

（それはおかしい、あの時のライブ会場で俺の姿を見た時の彼女の反応は初めて見て驚いていた。それに……）

『あなたが仮面ライダーね。私達の邪魔をするのなら、容赦はしない！』

（あの女と打ち合った時に口にしたあの言葉。本当にフィーネ本人だとしても、仮面ライダーの単語を言う筈がない。なら、彼女は……）

「翼さん！」

「！」

オーズが現れたマリアについて考えていると海面から飛び上がった翼が両足のブレードバーニアを噴かせ、マリアに向けて《蒼の一閃》を振り抜いたがマリアはマントを操り刃を防ぎ、翼の身体ごと弾き飛ばした。

翼は空中で体勢を整え二課の仮設本部である潜水艦の上に着地した。マリアはネフィリムが入ったケージを上に放り投げるとケージ消え、海面から飛び上がり潜水艦の上に着地すると自身の槍のアームドギアをその手に呼び戻し、マントを操りながら剣を構えている翼に槍を突き出した。

翼はマリアが繰り出した槍を自身が持つ剣で弾き返す。互いの持つ剣と槍のアームドギアが何度もぶつかり合い火花を散らしているとマリアはマントを操り、竜巻のように身体を覆って回転させて、潜体を傷つけながら翼に襲いかかった。

剣を振るってみるが刃が弾かれ、通じないと見た翼はその場を跳躍し逆手に持ち直した剣の切っ先を回転してるマリアの頭上から突き刺そうと試みるが、それを読んでいたマリアはマントの一部を展開して槍を翼に向けて突き出し、切っ先同士がぶつけて翼の攻撃を弾き飛ばした。

『被害状況出ました！』

『潜体に損傷、このままでは潜航機能に支障が出ます！』

『くっ、翼！マリアを遠ざけるんだ！』

弦十郎からの通信を聞いた翼は上がっていた息を整え、アームドギアを脚部に収納して、《逆羅刹》をマリアに繰り出した。それをマリアは槍のアームドギアで逆羅刹を応戦する。

「勝機！」

「あまい！」

逆羅刹に対応しているマリアの姿勢が崩れ、そこを翼は畳み掛けようとするが、それをマリアは許さずマントで防いだ。攻撃を止められた翼は逆羅刹を止め潜体の上に着地したが最初に槍の一撃を受けた傷が痛み動きを止めてしまった。

「マイターンッ！」

その隙を見逃さなかったマリアは槍のアームドギアを突き出した。それに気づいた翼は直ぐに脚部からアームドギアを手に取り、柄尻の方を向けて突き飛ばされる直前にマリアの腹部に一撃を入れた。

「翼が押されてる!?」

「最初にもらったのが効いているんだ！」

「だったら、白騎士のお出ましだ！」

押されてる翼の援護をしようとクリスがボウガン形態にしたアームドギアをマリアに向け、標準を合わせて引き金を引こうとしたその時――

「(……さて、そろそろこちらも……)」

「……ッ!?気を付けろ!上から来るぞ!」

「「っ!?」」

装者達から少し離れた場所に立っていたオーズが自分達の頭上から降り注ぐ大量の回転鋸とメダル型のエネルギー弾に気付き、装者達に声をかけた。

オーズの声に反応した三人の装者達はウェル博士を突き飛ばし、四人はその場を飛ぶ事で鋸をなんとかかわしたが響と奏の下に《鏖鋸・シュルシャガナ》のシンフォギアを纏った月詠　調が二人に襲いかかった。

「なんと……イガリマァァーッ!」

それと同時にクリスの下に《獄鎌・イガリマ》のシンフォギアを纏った暁　切歌が自身のアームドギアである鎌を振り下ろした!

その一撃をクリスは避けるが《Ａｎｔｉ―ＬｉＮＫＥＲ》の影響で動きが鈍り、切歌の追撃の一撃を腹部にまともにもらいその痛みに耐えきれず持っていたソロモンの杖を手放してしまい、そのまま地面を転がっていく。

「今のは……「ウオラァァァァッ!」な、グゥッ!」

オーズは先ほど自分達に向けられた攻撃の中に見覚えがあったのを思い出していると彼の下に銀色の鎧を纏った男が突然現れ、雄叫びを上げながらオーズにドロップキックを繰り出した。

咄嗟にメダジャリバーを盾にしてドロップキックを防いだオーズだが、相手の蹴りが強かったのか、メダジャリバーが手から離れ地面に落とし、踏ん張りが効かず地面を軽く転がってしまった。

ドロップキックをした鎧の男は蹴った反動を利用して、地面に着地した後右手に持ったグレネードランチャーに似た銃を肩に担いでオーズに話しかけた。

「へー、結構本気で蹴ったんだが、思ったより頑丈なんだなお前?流石は仮面ライダーって奴か」

「グ……ッ!なっ、お前は!?」

地面から立ち上がったオーズは現れた男の姿を見て、その見覚えがある姿に驚愕の声を上げた。

身体を覆う銀色の鎧に右肩、右腕、胸部に白と緑のカプセルが埋め込まれてあり、それを除いた左腕左肩、両足、背中には灰色のカプセルが埋め込まれてある。、更にカプセルの回りには赤い線が入っていて、腰にはカプセルが埋め込まれたベルトを巻いていた。

「仮面ライダープロトバース！」

仮面ライダープロトバース――別名、バース・プロトタイプが肩に担いだセルメダルのエネルギーを撃ち出す、外見がグレネードランチャーに似たプロトバース専用の遠距離武器、《プロトバースバスター》をオーズに向けて構えていた。

「（いや、姿が少し違う。この姿は……まさか、ＳＩＣ版プロトバースか!?）」

そう、このプロトバースの姿は通常のプロトバースと少し違っていた。

通常のプロトバースにはなかった大きな肩部装甲が右肩に付いてあり、頭部を覆ってある仮面の形状が通常よりスマートな形状になっている。

このプロトバースの姿はオーズと同じＳＩＣ寄りの姿をしていた。

「はじめましてだなオーズ。俺は仮面ライダーバース・プロトタイプ。プロトバースでも好きに呼んでもいいぜ。仮面ライダー同士仲良くしようぜ?よろしく！」

プロトバースバスターを肩に担いだプロトバースは、まるで友達に会ったかのようにオーズに話しかけてきた。

「どうして、この世界にバースシステムが存在しているっ！どこでそれを手に入れた!?答えろ！」

「おいおい、落ち着けよ。そんなに叫ぶと血圧上がるぜ?悪いがどこで手に入れたのかは教えられない。それに俺の仕事はお前さんの足止めをする事なんだよ。知りたかっ

たら、俺を倒して聞き出すんだな？」

この世界には存在する筈のないプロトバースを見たオーズは彼に質問をするが、プロトバースは軽い調子でオーズの問いをはぐらかすように答えた。

「そうかよ……なら、力ずくで聞かせてもらう！」

―タカ！―

―カマキリ！―

―チーター！―

タカキリーターにメダルチェンジしたオーズは両腕のカマキリソードを構えると折り畳まれていたカマキリソードが展開し、チーターレッグで地面を蹴り、高速移動でプロトバースに向けて駆け出した。

プロトバースは自身に向かって来るオーズを視界に収め、セルメダルが入ったマガジンを取り出して、それをプロトバースバスターの上部に取り付けるとセルメダルがプロトバースバスターに装填され、空になったマガジンを地面に落とした後、銃口をオーズに向けて腰だめにして撃ち出した。

オーズは迫り来るエネルギー弾をカマキリソードを振る事で斬り裂き、または地面に

落とし、時にはチーターレッグでかわしながら、プロトバースに近づいていく。
「すばしっこいな―カチッカチッ―って、ヤバ！弾切れかよ！」
「そこだ！」
プロトバースはエネルギー弾を撃ち続けるが、セルメダルのエネルギーが切れたのか撃つのを止めて、顔をプロトバースバスターに向けて声を上げる。
それを見たオーズは地面を強く蹴り、チーターレッグの瞬発力でプロトバースの懐に近づいてカマキリソードをプロトバースの首元に向けて振り抜いた。
「……なんてな」
―ジャキッ！―
「なっ!?」
プロトバースは半身を反らしてカマキリソードの斬撃をかわし、銃口下部に付いてある銃口ノズルが二つある《セルバレットポッド》を取り外し、それをプロトバースバスターに連結させた、《セルバーストモード》に以降したプロトバースバスターの銃口をオーズの身体に押し付けた。
「クソ！」
「おせぇよっ！」
《―セルバースト―》

「しまっ、ガァァァァッ!?」

銃口を押し付けられたオーズはすぐにその場から離れようとしたが、プロトバースはそうはさせじと至近距離のセルバーストモードのエネルギー弾をオーズの身体に撃ち込んだ。

至近距離のプロトバースバスターの一撃を喰らったオーズの身体は大きく吹き飛ばされ、崩れ落ちた廃病院の上に落下した。

「まだまだ若いねぇ、相手が隙を見せたらすぐに仕掛けるのは悪手だ。仕掛ける時は本当に隙なのか見極めるのが戦闘の基本だぜ青年?」

「ウ、グゥ…ッ!」

「さぁて、お次は……ん?」

―ピピッ―

『伊達さん、目的は既に達成しました。オーズとの戦闘を切り上げ、すぐに彼女達と共に撤退してください』

追撃を加えようと近付こうとしたプロトバースにナスターシャ教授から通信が入り、撤退するよう指示された。

「了解したぜ、ナスターシャ教授。……という訳で、俺達はここでおさらばするぜ」

「逃、がすと……思って……いるの、かよ?」

瓦礫を押し退け、膝に手を付いてなんとか膝立ちになったオーズは満身創痍でプロトバースを睨み付け、三枚の灰色のコアメダルを取り出しながらプロトバースに声をかける。

「無理するな。折れてないと思うが今の一撃をもらってそうしているのが精一杯なんだろ？」

「く……！」

プロトバースの指摘通り、先のプロトバースバスターのセルバーストの直撃を喰らったオーズの体力は既に限界に近づいており、こうして変身を保っているのが精一杯だ。

―キリッ、カポーンッ！―

《―クレーンアーム―》

口を閉じて静かなったオーズを見たプロトバースはバースドライバーのメダル投入口にセルメダルを投入して、バースドライバーの右側に付いてあるハンドルレバー、《グラップアクセラレーター》を回し、ベルト中央に埋め込まれた《トランサーシールド》が開かれた。

音声が流れるとバースドライバーから全身に巡らされたエネルギー中継ユニット《リセプタクルオーブ》から右肩の肩部装甲《ショルダーフレーム》に埋め込まれたトランサーシールドが開かれると、武装ユニット《ＣＬＡＷｓ》の一つ《クレーンアーム》が

プロトバースの右肩から右腕にかけて展開される。
「じゃあ、また会おうぜ。社長さんによろしくな」
そう言った後、クレーンアームが装着された右腕を上空に向けると上空に突然Ｆ．Ｉ．Ｓ　の特殊ヘリが空中に現れた。プロトバースはクレーンアームのクレーン部分を開かれたヘリの後部ハッチに向けて射出させ、射出したクレーンアームのフックがハッチの取っ手部分に引っ掛かると伸ばしたワイヤーを巻き戻し、プロトバースの身体が持ち上がり、ヘリの後部ハッチの中に降り立ちＦ．Ｉ．Ｓ　が乗ったヘリは、オーズと装者達の前から飛び去った。
「くっ、逃がすかよ！」
それを見たクリスが支えてもらっていた響の手を振り払い、アームドギアをボウガン形態からライフル形態に変形させ、それに合わせて頭部についているヘッドギアが狙撃に特化した形に代わり、変形したヘッドギアの狙撃レンズに写った情報がスコープゴーグルに伝わり、海上を飛ぶヘリに標準を合わせる。
【―ＲＥＤ　ＨＯＴ　ＢＬＡＺＥ―】
「ソロモンの杖を返しやがれ……っ！」
標準が定まり、ライフルの引き金を引こうとしたその瞬間……。
「っ！……なんだと？」

「消えた……！」
　突如、Ｆ．Ｉ．Ｓ　のヘリの姿が透けていき、数秒も経たず最初からいなかったかのようにその姿を装者達の前から消え去った。
「どうなってんだよ……？」

．　．　．

――Ｆ．Ｉ．Ｓ　特殊ヘリ、後部ハッチ内――

「凄いデス！強いデス！私達が苦戦したオーズを圧倒するなんてカッコいいデース！」
「うん、見ていてスッキリした…」
「ハッハッハッ！そんなに褒めるなよ二人共、照れちまうぜ」
　ヘリの後部ハッチ内でギアを解除した切歌がウェル博士をどついた後、オーズを圧倒したプロトバースの右腕に抱きつき、ピョンピョンと跳ねて大喜びを表現している。その隣で切歌程ではないがいつもより、目をキラキラさせた調が小さくガッツポーズを

取っていた。
　その二人に褒められたプロトバースは笑いながら、空いた左手で後頭部を掻いていた。
「それにしても初めての戦闘でオーズを倒すなんて、あなた本当に元医者なの？」
「ん？まあ、医者っていっても昔は外科医中心の医療チームを組んで、世界中の紛争地帯に向かっては怪我した奴らを治療してたんだよ。向こうじゃ荒事が多かったから、少しでも自衛手段を持たなきゃヤバい毎日だったしな」
　そう言ったプロトバースはバースドライバーの左側にあるセルメダル排出口の《ブランクケージ》からセルメダルを取り出すと取り出したセルメダルが粒子になって消えていくと彼の変身が解け、人間の姿に戻った。
「ま、これで解ったろ？次もオーズや向こうの装者達が現れても俺にドーンと任せなよマリアちゃん？」
「あの、伊達さん……私はちゃん付けで呼ばれる年じゃないのでそれはちょっと……」
「ええーそうか？俺からしたらそう見えるんだけど……ちゃん付けでもいいよな？」
　プロトバースだった男―伊達（だて）　将暉（まさき）が調と切歌に同意を求めると二人はそれに頷いてマリアの顔を見る。
「うん。マリア、赤くなってる…」

「かわいいデスねー」
「あ、あなた達……」
二人に指摘されたマリアは顔を赤くなった。

――三人称視点、終了――

文化祭と選択とカプセルライダー　後編

――姫川視点――

氷野さんがF．I．S　が拠点にしている廃病院に襲撃をかけてから一夜明け、私は社長がナスターシャ教授達の為に用意した拠点の一つである倉庫内で停めた愛車の外でF．I．S　の皆様が来るのを待っているところです。

車の中には社長に頼まれた黒いコアメダルと《M》と刻印されたUSBメモリが入ったアタッシュケースに数日分の食料と医療品、そして社長の趣味で作ったケーキ（1ホール）が詰め込んであります。（趣味で作ったというレベルを越えていますが……）

（さてと、予想が正しければそろそろF．I．S　の方々が来る時間です。

荷物を渡し終えたらこのまま明日まで休日にしていいと社長が言ってましたし……急に出来た休日はどう過ごすか迷いますね。）

「……おや？どうやら無事に到着したようですね」

倉庫の扉が開くと彼らが乗っている特殊ヘリの姿が見え、私は姿勢を伸ばし倉庫内に入ってきた皆様に頭を下げると共に挨拶をします。

「おはようございますナスターシャ教授、そしてＦ．Ｉ．Ｓ　の皆様。私の上司から皆様にプレゼントがあります」

　ナスターシャ教授とウェル博士を除いた三人のシンフォギア達が自分達の新たな拠点にいた私に驚いているのを確認する中。ふと、唐突に私はリディアン音楽院の文化祭を思い出した。

（そういえば、もうすぐリディアン音楽院で文化祭が開催するんでした。当日はする事もないですし行ってみるのも悪くないですね）

　――後日、リディアン音楽院の文化祭で勝ち抜きステージでとある少女の歌を聴いて、その少女のファンになるのだが、この時の私はまだ知らなかった。

――姫川視点、終了――

――デザイア・コーポレーション――

――片桐視点――

「「おはようございます、片桐社長！」」

「ああ、おはよう諸君。今日も一日、無理せず頑張ろか。残業は駄目だよ、いいね？」

「「はい！」」

氷野君がF．I．S　が潜伏している廃病院に向かってから一夜明けた早朝。

私はデザイア・コーポレーションに出勤し、今日も社員達に挨拶を交わした後、エレベーターに乗り込み最上階のボタンを押し、私の仕事部屋でもある社長室に向かう。

「姫川君すまないがお茶を……と、そういえばいなかったな」

社長室に到着した私は、社長机の椅子に座り秘書である姫川君に声を掛けようとして、昨日の夜にある荷物と医療品を中心にした物資を私が提供したF．I．S（彼ら）　の新たな拠点である廃倉庫に向かわせ、物資を渡した後は休んでいいと言っていたことを思い出した。

「ズズゥ…フゥ。たまには自分で淹れるのお茶もいいね。それじゃこれを飲んで仕事に移るかな……」

社長室の隣にある給湯室に向かって自分で淹れたお茶（因みに私の好みはほうじ茶）を飲んでから一息ついて、もう一度お茶が入った湯飲みを口に付けた瞬間――

―バンッ！―

「バカ社長はいるかあっ！」

「ブーーーーッ！」

――社長室の扉が勢いよく開かれ、満身創痍の状態の氷野君が入ってきて、驚いて思わずお茶を吹いてしまった。
「ゲホ、ゲホゲホッ!?き、急にどうしたんだね氷野君?そんなボロボロの格好で?」
「どうしたもこうしたもない!どうしてF・奴Ｉ・ら　Ｓ　の所にプロトバースがいたのか答えろ!」
「な、何の事かな?」
咳き込んで氷野君に理由を聞いてみると、彼の口からプロトバースの事を聞いて思わず目を逸らすと氷野君にスーツの襟を掴まれお互いの額がぶつかりそうになる距離まで引き寄せられた。
「惚(とぼ)けるな!プロトバース(あの男)が立ち去る時、あんたによろしくと言っていた!その言葉通りなら、あんたはF・奴Ｉ・ら　Ｓ　と通じていた……どういう事か話してもらおうか、社長さん?」
「お…ＯＫ、わかった。話すから一度手を放してくれるかな。話そうにも話せないし、ね?」
「……わかった」
そう言って氷野君はスーツの襟を掴んでいた手を放し、社長机の横にあるソファーの一つに座り、それを見た私はホッとため息を吐いてから。彼の向かい側にあるもう一つ

のソファーに座りこみ、目の前の青年に説明をしようと口を開いた。

「……社長さんの昔からの知り合いであるそのナスターシャって人が月の真実を知ってしまい、命を狙われているその人の為に試作段階のバースシステムとその装着者を紹介して、そして一週間前の事件を起こすとは知らなかったと……嘘は言ってないだろうな？」

「ああ、当たり前さ。こんなところで嘘をついてどうする？」

と、彼に笑顔で答えるが実際の心境は――

（ネタバレするの早すぎだよ伊達君ッ!?）

内心、ネタバラシをした伊達君に文句を言っていた。

因みに、氷野君に説明した内容は以下の通り――

1．ナスターシャ教授が月が落下するという真実を知ってしまい、米国政府が彼女の命を狙っている事。

2．命を狙われていると知った彼女が古くからの知り合いである私に相談して、試作段階のバースシステム―《プロトバースドライバー》とその装着者―《伊達　将暉》を彼女に紹介した事。

3．彼にナスターシャ教授の指示に従うのと彼女と彼女の義娘達を護る傭兵に近い契約を交わした事。

4．その彼女達があの事件を起こすとは思いもよらなかった。

以上が私が即興で考えた言い訳（ストーリー）だが、無理があるかな？

「……はあ、わかったよ。これ以上は何も聞かない。けど、いくつか質問していいか？」

「ありがとう。それで、質問とは？」

色々言いたい事を呑み込んでくれた氷野君は、話を切り替えて私に質問を投げてきた。

「何でバースシステムを創造（つくっ）した？それだけじゃない。ライドベンダーやカンドロイド、メダジャリバー。これだけの物をこの世界に生み出して……一体、あんたは何を考えているんだ？」

「……確かにその疑問はもっともだね。教えたいけど、悪いけど全てを言うことは出来ない」

――そう、あの時の記憶と共に封じたあの力をまだ使いこなせていない、今の君には

ね……――

チラリと、気付かれないように目線を彼の胸の中に眠るある物に向けながら、その言葉を胸の内に留めると、納得いかないと顔に出ている氷野君に一つだけ教えようと指を一本あげ、口を開いた。

「一つだけ言うなら……近い未来に来る、新たな敵に備えて……としか言えないね」

・
・
・

その後、少しの会話を交わして社長室から退室した氷野君を見送り。彼の姿が完全にいなくなったのを視認してから、社長机の上に置いてある受話器を手に取り、地下の開発班がいる研究室に連絡した。

二、三度のコールが鳴った後、受話器越しから気だるい声の男が気だるそうに通話に出た。

―プルルル…プルルル…ガチャ―

『はい、こちら研究室……今忙しいんすけど――』
「やあ、蒔田君。忙しい所悪いね。今大丈夫かな？」
『し、社長っ!?い、いえ！ちょうど今一休みしようとした所です！それで何の御用でしょうか？』
　通話の相手が私であると気付いて驚いている男の名は蒔田　忠。ライドベンダーやバースシステムの開発を任せている開発主任だ。
「ああ、実は想定より少々計画の一部を早めなければいけなくなってね。仮面ライダーバースを予定より早くロールアウトしたいんだが……進行状況はどうかね？」
　私は笑いをこらえながら、慌てている連絡をした要件を彼に伝えると通話越しから彼の叫び声が聞こえ、思わず耳を遠ざけてしまった。
『ええっ!?無茶言わないでくださいよ！まだモード：スコーピオンのジェネレーターやエネルギー効率が不安定で、安定させるには後数ヶ月が掛かるし……実戦に投入するのはまだ早いですよ！』
「数ヶ月か……フム、モード：アーマーはどうかね？」
　蒔田君の声を聞いてから、もう一つの方に質問した。
『え？まあ、一応既に出来ていますよ。あれはスコーピオンと違って装着者を基点にしてるから、ジェネレーターやエネルギー効率もスコーピオンに比べればまだ安定してる

方ですけど……それでも、出力の調整が難しくて、展開時間が5分しか持ちません』
「（5分か……まあ、ないよりかはマシだな）……よし、スコーピオンのシステムの完成は後にして欲しい。どれくらいでロールアウトはできるかな？」
　顎に手を当て少し考えた後、蒔田君にそう伝える。
『5日……いや、最低でも10日は欲しいですね。モード：アーマーのシステムを組み込むのにそれくらいは必要です』
「（10日か、ギリギリだな……）いや、それでは間に合わない。出来れば一週間で仕上げて欲しいんだが……駄目かね？」
『んー……、わかりました。一週間でバースをロールアウトします』
　私は自分の無茶ぶりを聞いてくれた蒔田君に礼の言葉を伝えると蒔田君は大丈夫と答えてくれた。
「すまないね」
『いえ、大丈夫です。その代わり開発班のみんなに一週間程の有給をくださいよ？』
「ああ、勿論さこの一件が終わったら好きなだけ休んでいいとも」
『よし、絶対ですよ！お前ら、スコーピオンは後回しにして一週間でバースを仕上げるぞ！この一件が終われば社長が長めの有給をくれるってよ！』
『『マジッすか!?ヤッタァァァァッ！』』

―プツッ―

蒔田君の声を聞いて喜ぶ開発班の職員達の声を聞いた私は通話を切ると机に両肘をつき、両手を口の前に組んだ姿勢を取る。

（そう、急がなければならない。来るべき大きな欲望に備えて。それまでに彼の中に眠るあれを目覚めさせ、使いこなしてもらわないと面白くないからね……）

――片桐視点、終了―

・
・
・

――マリア視点――

「どうしますか？このまま襲撃者達にやられるか、襲撃者達を排除するか……選びなさいマリア」

「マム……私は……っ！」

廃病院から離脱して、マムの協力者が用意してくれた新たな拠点である倉庫に米国の特殊部隊に居場所を突き止められ、相手がこちらに踏み込まれる前にガングニールで排除しろとマムから提案された。

それを聞いた私は、ガングニールの一撃を振るえば確かに彼らを倒せるが、そんな事をすれば簡単に彼らの命を奪ってしまうという事実に戸惑っていい、マムに覚悟を持てと言われ言葉を詰まらせていると突然画面に映る襲撃者達の身体が黒く染まり崩れ落ちた。

「炭素分解、だと……！」

それに驚いていると炎に包まれた倉庫内からソロモンの杖を持ったＤｒ．ウェルが襲撃者達の前に現れた。

「Ｄｒ．ウェル!?」

『この程度の相手に新生フィーネのガングニールを使うまでもありませんよ。露払いは僕がしてあげますよ』

ドクターはそう言ったあと、ソロモンの杖を操作すると複数のノイズを召喚し、襲撃者達を襲わせた。

襲撃者達が次々と炭に変わっていると、襲撃者達は恐怖のあまり逃げ出したが、それを見たドクターは笑みを浮かべてノイズに追いかけるように指示を出した。

それを画面越しに観ていた私は自分の不甲斐なさに歯を唇を噛み、血が出るくらいに両手を握り絞めていた。
（どうして、どうしてあなたらそう簡単に人の命を奪えるの……！）
『おやおや～？』
「っ!?」
少し画面から目を外していると外の監視カメラの画面にドクターが自転車に乗った三人の少年達の前に立っていた。
『いけないな～？こんなところに入ったらぁ。殺されても文句は言えないよねぇ～？』
「やめろウェル！その子達は関係ない！」
私は少年達に手を出すなとドクターに伝えるが、ドクターは両手を拡げて、少年達を殺す理由を話し出した。
『関係ない？いーや、関係あるさ。何故なら、彼らは僕達の拠点に入り、あまつさえ僕の姿を目撃した。充分殺す条件に入りますよ』
「やめなさい、Ｄｒ．ウェル……やめろぉぉーーっ！」
ドクターがソロモンの杖を振るい、召喚されたノイズが少年達に襲い掛かり、瞬く間に彼らの身体が炭素に変わってしまいそうになったその時――。
―ガガガガガガッ!!―

「えっ！」
『なっ!?』
　メダルの形をした複数のエネルギー弾がノイズ達に降り注ぎ、ノイズ達は炭素に分解され、命を狙われた少年達は自分達が死ぬところだとようやく理解して、自転車から転げ落ちてしまった。
　エネルギー弾を撃った人物は少年達の前まで歩いていき、その姿が画面に映りだした。
『よう、ドクター、人が足りなくなった材料を調達して戻ってきてみたら……テメー、一体何をしていた?』
「伊達さん!」
　そこにはバースバスターを右手に持ち、左肩に巨大なミルク缶を背負った男の人――伊達　将暉さんがバースバスターをドクターに向けて質問を投げた。
『何って僕達の国から差し向けられた襲撃者達からノイズを使って、身を守っていたんですよ。……あなたがモタモタ買い物なんかしてる間にね』
『ほー、そうかい。そいつは悪かったな。……でもな、後ろの子供達（コイツら）の命奪おうとしたのはどうしてだ?』
『どうして?はっ!何を言っているんです?その子達は無断で拠点に入り込み、あまつ

さえ英雄になる僕の姿をみてしまったんだ。余計な事が起きる前に始末するのは当たり前でしょう?』

「Ｄｒ．ウェル、あなたって人は……―ガンッ!―……っ!」

ドクターが狂喜の笑みを浮かべて伊達さんの質問に答えると、伊達さんが背負っていたミルク缶を地面に叩きつけるように下ろし、私達と顔を合わせてから笑顔が絶えなかった彼から初めてみる怒りの表情を浮かべていた。

『ナスターシャ教授やマリアちゃん達を護る為に襲ってきた奴らの命を奪ってしまうのは、あんたらと協力する時仕方ないと割りきっていた。けどな、関係のないコイツらの命を奪うのは間違っているだろうがっ!』

伊達さんはドクターにいい放つとドクターは情けない悲鳴を洩らして一歩後退した。

『ひぃっ!な、何がおかしい!英雄になるには犠牲が出るのは当然の事だ!その為にそこのガキ共が礎になるのは光栄だろう!それの何がおかしい!』

『……そうかい。なら、その腐った根性……俺が叩き直してやるよ。そら、お前ら死にたくなければさっさと逃げろ』

『は、はい……!』

しかし、彼は顔を振って自分の正統性を言っているが、伊達さんは右手を伸ばしてミルク缶からカプセルが付いたベルト―バースドライバー―を取り出し、それを腰に巻き

付けたながら後ろにいる少年達に逃げるように声をかけると少年達は倒れていた自転車を起こして、慌ててこの場から去っていった。

『最初に会った時から思ってましたが、ムカつくんだよあんたは！会ったその日にいきなりおでんパーティーを開いたり、僕の研究の邪魔をして！

あのオバハンの知り合いの紹介だからと言って我慢してきたが……もう限界だ！英雄になる僕の障害になるお前はここで始末してやる！』

激昂したドクターはソロモンの杖から複数のノイズを伊達さんの周りを囲むように召喚した。

『やれるもんならやってみな。でもドクター、一つ言っておく。

英雄になりたいと思っている奴はな、なろうとしてなるもんじゃない。周りがそいつを認めた時、初めて英雄になるんだよ。だから――』

『自分が得するために動いている時点であんたは英雄になる資格はねーんだよっ！』

その言葉を言った直後、伊達さんは右手に持った銀色のメダル―セルメダル―を親指で弾き、それが彼の頭上より高く上がり、勢いが止まり落下してきたメダルを左手で掴み取るとある言葉を口にした。

『変身』

―キリッ、カポーン！―

その言葉の後にベルトについてある投入口にメダルを投入して金色のレバーを回すとカプセルが開いて、そこから複数のカプセルが伊達さんの周りに展開すると複数のカプセルが変形して、全身を覆う銀色のパワードスーツを身に纏った姿、伊達さんは仮面ライダーバース・プロトタイプに変身した。

『さーて、お仕事開始だ』

仮面ライダーバース・プロトタイプに変身した伊達さんは両手に大型の銃―プロトバースバスター―を持ち、それをノイズ達に向けて構え、引き金を引いた。

――マリア視点、終了――

過去の残滓と憎悪と黒いコアメダル

――三人称視点――

今から８００年前。
先代のオーズが欲望に溺れ、魔王と呼ばれるようになって近隣の国や村を蹂躙していた。
最初の欲望は緑のコンボによる力で魔王を討とうと攻め込んできた二万を超える軍隊を蹂躙した。
二つ目の欲望は黄のコンボの力で税を払わなかった町や村の水源を枯らし、民を苦しめた。
三つ目の欲望は灰のコンボの力で大地を操り、逃げたした民を圧殺した。
四つ目の欲望は赤のコンボの力で歯向かう者を全て燃やし尽くした。
五つ目の欲望は青のコンボの力で津波を起こし、全てを呑み込んだ。
それだけの事をしたのに魔王の欲望は止まらず、更に貪欲になって全てを手に入れよ

うとしていた。
　魔王の噂を聞いた他の国々は魔王に反抗している反乱軍と手を取り合い、魔王に何度も戦いを挑んだ。
　だが、何の力もないただの人間である彼らは魔王に傷一つ付ける事が出来ず一人、また一人と命を落としていった。
　ある時、反乱軍の元にある噂を耳にした。

――魔王が錬金術師に命令して新たなコアメダルを創らせている――

　それを聞いた反乱軍はコアメダルを奪いその力を使えば、魔王を討てると希望を持ち、錬金術師がいる魔王の城へ向かい攻撃を仕掛けた。
　多大な犠牲を払い、なんとか三枚のコアメダルを手にする事が出来た反乱軍は追撃をかわし、同盟を結んだ国の錬金術師にコアメダルの力を引き出す物を造るように頼み込んだ。
　数週間の刻が経って、遂にコアメダルの力を引き出すベルト型の器を造り出す事が出来た。
　反乱軍は三人の強い戦士を選び、彼らにコアメダルを一枚ずつ渡し、腰に巻き付けた

ベルト型の器にコアメダルを嵌め込むと、戦士達の身体が人間の姿から異形の姿へと変わり果てた。

腰に剣を携えた男の姿はサソリを彷彿させる鎧を身に纏い、毒の刃を持つ剣で分厚い壁を斬り裂き、溶かす力を手にいれた。

斧を背負った大柄の男の姿はカニを彷彿させる鎧を身に纏い、両腕に付いたハサミで巨大な岩を砕く力を手にいれた。

蛇腹剣を持った女の姿はエビを彷彿させる鎧を身に纏い、敵を凪ぎ払う力を手にいれた。

『皆聞いてくれ!』

三人の戦士達の内、エビの鎧を纏った戦士が集まった他の反乱軍の兵士達に大きな声で話しかけた。

『遂に私達は魔王を倒せる力を手にいれた!長い間魔王に苦しめられ、今日までずっと恐怖に耐えてきた……!だけど、恐怖に震えるのはもう終わりだ!』

『その通りだ!』

次にエビの鎧の戦士の言葉に続くように、カニの鎧を纏った大柄な戦士が前に出た

『このコアメダルを魔王から奪い俺達の元に届ける為に散っていった仲間達の無念を晴らす為にも……俺達の手で魔王の野望を止めるんだ!』

最後にサソリの鎧を纏った戦士が前に出て、口を開いた。
『……皆、今日までよく耐え忍んでくれた。我らは何度も魔王に戦いを挑み、その度に沢山の仲間達を失ってきた。……でも！此度は違う！』
その言葉と共にサソリの鎧の戦士は腰に差した剣を抜いて天に向けて突き出した。
それに続くようにカニの鎧の戦士は両腕に付いた巨大なハサミを、エビの鎧の戦士は蛇腹剣を天に向けて突き出した。
『このコアメダルの力で魔王を討ち倒し、我らの未来を掴み取るんだ！さあ、皆！今こそ立ち上がる時だ！』
『『『オオオオオオオオオオッ!!!!』』』
勝鬨の声を上げた反乱軍は三人の戦士達を筆頭に全てを賭け、魔王に最後の戦いを挑んでいった。

・　・　・

『馬鹿な……！何故だ……我らは確かに魔王を追い込んだ。追い込んだ筈なのに……

！』

『何故我らが全滅しているんだっ!?』

――時は数刻程遡る。

力を手にし、全てを賭けて魔王の国を急襲した反乱軍は、三人の戦士達を筆頭に錬金術師が造りだしたホムンクルスの兵士達を倒していき、遂に魔王がいる玉座の間にたどり着き、魔王に戦いを挑んだ。

自身達が纏うコアメダルの鎧の力で魔王を確実に追い込んでいき、遂に魔王を倒す事が出来ると誰もが思い始めたその時――

『茶番はここまでだ……』

――ボッ！――

『え？』

魔王が言葉を発した途端、カニの戦士の腹部に大きな穴が空いた。

『あ……？ゴボッ!?』

違和感を感じたカニの戦士は、身体を見下ろしてようやく自身の身体に穴が空いてる

事に気付いた直後、大量の血を吐き地面に倒れそのまま息を引き取った。
『■■■■っ!?己魔王よくもっ!』
『待て!一人で前に出るな■■■!』
『オオオオオオオオッ!』
サソリの戦士の静止の声を振り切り、エビの戦士は剣身を伸ばした蛇腹剣を振りかぶり、魔王に向けて振り下ろした。
『くだらん……』
―ザシュッ!―
『ガハッ!?』
『■■■アアアアアッ!?』
エビの戦士の懐に潜り込んだ魔王が両腕に展開した虎の爪を突き出し、彼女の心臓を貫いた。
『魔王、貴様ぁぁぁぁっ!』
サソリの戦士は涙を流しながら魔王に向けて駆け出し、大きく跳躍して毒の剣を彼に振り下ろした。
『フン……』
『ガアアアアアアアッ!?』

魔王は歯牙にも掛けず、まるで羽虫を払うかのように腕を払い、サソリの戦士の身体を吹き飛ばした。

吹き飛ばされたサソリの戦士は地面を大きく転がり、魔王の腕が当たった時に肋骨が折れ、彼が纏う鎧は所々砕けてしまい、彼の持つ剣も先ほどの攻撃で真ん中から折れてしまっていた。

サソリの戦士は折れた剣を地面に突き差して、膝を着くことでなんとか身体を起こし、何故だと声を上げた。

『何故だと?まだ解らないのか……』

魔王は血に染まったままの爪をサソリの戦士に向けて、サソリの戦士の疑問の声に答えた。

『貴様らが持つコアメダルは不完全に造らせた物だ……。不完全なコアメダルを持った貴様らに完全なコアメダルを使う我が本当に負けると思っていたか……?』

『不完全……?ちょっと待て、それじゃあ我々が使っているのは……まさか?』

『そのまさかだ……。よもや我がそう簡単にコアメダルを手放すと思っていたのか?あれは貴様ら反乱軍を根絶やしにする為に錬金術師達に造らせた紛い物だ……。それに気づかなかったか?我が貴様らに合わせて遊んでいたのを……?』

『なッ!?』

サソリの戦士は魔王が発した言葉を聞いて言葉を失った。
無理もない。多大な犠牲を払い、手に入れたコアメダルが魔王が反乱軍(彼ら)を根絶やしにする為に用意した紛い物を掴まされ、全ては魔王の手の平の上で踊らされた事に眼を見開いた。
『(そんな……!それじゃあ、俺達の行動は無駄だったと言うのか!)』
『さて、そろそろ我の兵士達が貴様ら反乱軍の集落も落ちている頃だな……。残念だったな、反乱軍。せめてものの慈悲だ、貴様の首を残りの反乱軍の奴らに見せつけてやろう……。感謝するんだな……』
―ドクン―
『貴様は……!』―ギリッ!―
サソリの戦士の腰のベルトに嵌め込んだコアメダルと既に事切れたカニとエビの戦士のベルトに嵌め込んだコアメダルが彼の感情に共鳴するかのように脈動した。
『貴様だけはぁぁぁアアアアァァァァァァァ!!!』
サソリの戦士が叫ぶとカニとエビのコアメダルが二人の戦士の身体を銀色のメタル―セルメダルに変え、サソリの戦士の下に集まり、彼の身体もセルメダルに変わっていく。
『アアａａａＡａぁぁあａａａぁぁａａアあａａＡａａａぁぁぁＡぁぁアア

アアａａａａあＡあああァァァァッ!!!!!　』

三枚のコアメダルが三人の戦士達の欲望を吸い取り、更に欲望だけじゃなく、彼らの負の感情も呑み込み、玉座の間の天井を破壊しながら、その形状を巨大な姿へと変えていく。

―ズンッ!―

『ほう、これは愉快な……』

『我が名は……コアッ!!憎悪と殺意の欲望を持って、魔王オーズよ!貴様を殺すっ!!!!』

コアと名乗る巨大な黒い怪物が巨大な手を振り上げ、魔王の身体を叩き潰そうと振り下ろした!

『紛い物のコアメダルが人間を喰らい、あまつさえ自我を持つとはな……。だが、所詮は紛い物。紛い物の分際で我を倒す等……烏滸(おこ)がましいわっ!!』

―タ～ジャ～ドルゥ～～ッ!―

その言葉と共に魔王の身体が紅蓮の炎に包まれた途端、魔王の姿が不死鳥を模した紅い姿に変わり、大空を飛翔する事でコアの振り下ろした手をかわした。

『己、魔王ッ!』

『消えよ!紛い物のコアメダルよっ!!』

―スキャニング・チャージ!―

オースキャナーでオーズドライバーに嵌めてあるコアメダルをスキャンした魔王は身体を反転させ、大きな爪脚に変化させた両足のコンドルレッグをコアに向けて突きだした！

それを見たコアは迎え討とうと巨大な拳を握りしめ、魔王に突き出した！

『オオオオオオオオオオオオオオオッ！』

『オオオオオオオオオオオオオオオッ！』

互いに繰り出した一撃がぶつかり合い、発生した攻撃のエネルギーが辺りを砕いていく。

ぶつかり合って数十秒程が経つと、巨大な身体を持つコアの腕に罅が入った。

『馬鹿な!?我の腕がっ!?』

『終わりだ、紛い物の欲望よ……はあっ！』

更に力を込めた魔王の一撃が罅が入ったコアの腕を砕き、コアの身体を貫いた。

『認めぬぞ……！』

身体を貫かれたコアは背後に飛翔している魔王に身体を向け、まだ残っている左手を彼に伸ばし、身体が崩れ落ちながら魔王に呪詛の言葉を告げる。

『我は必ず蘇り、そして必ずや貴様を……殺してやるぞ魔王ッ！グオオオオオオオオオオオッ!!!!』

呪詛を告げた後、唸り声を上げながらコアの身体は爆散し、彼を形成した三枚の黒いコアメダルは何処かへと飛んで行き、その行方は誰も知ることは出来なかった。

・
・
・

そして８００年後、とある遺跡の奥で三枚の黒いコアメダルがデザイア・コーポレーションの発掘チームの手により発掘され、現在は歪んだ欲望を持つ男の手の元に渡り。

そして、片桐　眞人が平行世界から来訪した財団Ｘと取引して、セルメダルとコアメダルの情報と引き換えにとある物を手に入れた、その場の記憶を読み取り、引き出す事が出来る《Ｍ》のイニシャルが刻まれたメモリ【メモリーメモリ】もその男の手に渡った。

黒いコアメダルとガイアメモリ、その二つが揃う事が何を意味するのか……それはまだ誰も知らない。

――三人称視点、終了――

説教と暴食と紫の兆候

――三人称視点――

街から少し離れた場所にある使われなくなった倉庫場。本来なら誰もいないその敷地内でこの場所に似つかわしくない銃撃音と爆発音が響き渡っていた。

銃撃を放っているのは伊達　将暉が変身した仮面ライダープロトバース。

その手に持つプロトバースバスターでウェルが呼び出した複数のノイズに向けてメダル状のエネルギー弾を撃ち放ち、ノイズの身体を次々と穴だらけにして炭に変えていく。

対するウェルはソロモン杖から再びノイズを召喚してプロトバースに襲うように指示を出す。

プロトバースはプロトバースバスターの下部に付いてあるマガジンを外し、マガジンに溜まった力がなくなったセルメダルを捨てもう一度プロトバースバスターに取り付け、足元に置いてあるセルメダルが入ったミルク缶から補充用のメダルマガジンで掬い取り、それをプロトバースバスターの上部に取り付けるとマガジンに入っていたセルメ

ダルがプロトバースバスターに装填され再びノイズ達に向けてエネルギー弾を撃ち放ち、目の前に存在するノイズ共を穴だらけにする。

「あーもう、なんなんだよお前はぁっ！」

その光景を離れた場所で見ていた白衣の男、ドクターウェルが右手に携えた完全聖遺物―ソロモンの杖とは反対の空いた左手で頭をかきむしりながら、自身が呼び出したノイズ達を炭に変えていくプロトバースに向けて叫んだ。

「どうしてあんたは！僕の夢の邪魔をするんだよ!?僕は英雄になる人間だ！なのに英雄になろうとした時点で失格う？なんでそうなんだよ！なろうとしてなるべき存在なんだよ英雄ってのはさぁッ！」

そう叫んだウェルはソロモンの杖から再びノイズを召喚してプロトバースに襲えとその手に持つ杖で指示を出す。

「……言葉通りの意味だぜ？ドクター」

だが、プロトバースの持つプロトバースバスターから放たれるメダル状のエネルギー弾でノイズの身体を穴だらけにさせて炭に変えながらプロトバースはウェルに先ほどの言葉の意味を伝える。

「『英雄になりたいと思っている者は自分が得するために動いている時点で英雄とは言えない』まだわかんねーのか？『誰かを守れる・救える、または○○できるような英雄（ヒーロー）

になりたい』といった事じゃなくて、あんたのやっているのは『英雄になれば、皆に好かれる、又は認めてもらえるかもしれない』という歪んだ承認欲求で動いているんだよ。それをした奴は決まってろくでもない事をするのが目に見えていんだよ！」

その言葉を口にしたプロトバースはプロトバースバスターを肩に担ぎ、仮面越しに力強い視線をウェルに向けるとウェルはその気迫に悲鳴を上げ、思わず後退してしまった。

「そ、そんなのはあんたの勝手な思い込みだろうが！結局は結果をだせばなれるんだよ英雄ってのはさぁッ！」

プロトバースの言葉を否定するように首を振ったウェルは目を限界まで見開くとソロモンの杖を頭上に向けて光を放った。放たれた光がある程度空中に上がると光が弾け、鋏型の手を持つ巨大ノイズを召喚した。

ウェルは召喚した巨大ノイズ――ヒューマノイドノイズ（以下：巨大ノイズ）に攻撃の指示をすると、その巨大な鋏をプロトバースに向けて振り下ろした。

プロトバースは慌てた声を出すが言葉とは裏腹に冷静な動きでその場を飛ぶように避けると同時に巨大ノイズの巨大鋏が先ほどまでプロトバースがいた場所に振り下ろされ、舗装された地面が砕かれ巨大鋏が退くと地面が大きく陥没した後が残っていた。

「っとと…たぁく、面倒なのを出しやがって……っと」

軽口を吐きながらプロトバースは両手に持つプロトバースバスターを巨大ノイズに向けてエネルギー弾を放つ。放ったエネルギー弾が巨体に当たるがその巨大差ゆえか、余り効いた様子は無く、再び巨大ノイズの鋏がプロトバースに振り下ろされるのを視認してその場を大きく避ける。

「アーハッハッハッ！どうだぁ！思い知ったかこれが英雄になる僕の力だ！そんなオモチャでこのノイズを倒せるものか！」

「そうだな、それじゃ……奥の手いきますか」

勝利を確信したウェルがプロトバースに向けて嘲りの言葉を放つが、プロトバースはそれを気にせず懐から取り出した一枚のセルメダルを《バースドライバー》の左側にあるメダル投入口にセルメダルを入れると右側のハンドルレバー、《グラップアクセラレーター》を回し、ベルト中央に埋め込まれた《トランサーシールド》が開かれ機械音声が流れる。

―キリッ、カッポーン―

《―ブレストキャノン―》

バースドライバーから全身に巡らされたエネルギー中継ユニット《リセプタクルオーブ》から胸部装甲《チェストフレーム》に埋め込まれたトランサーシールドが開かれると、《ＣＬＡＷｓ》の一つである増幅したエネルギーを一気に放出する大型ビーム砲の遠

距離型砲撃ユニット《ブレストキャノン》が展開されプロトバースの胸部に装着した。
「はっ、そんなのでこのノイズが倒せると思っ――」
「思えるんだよなぁ！これが！」
ウェルの言葉を被せるように大声で叫ぶとプロトバースはブレストキャノンを展開した状態で更に二枚のセルメダルを《バースドライバー》のメダル投入口に入れ《グラップアクセラレーター》を回すとブレストキャノンがセルメダルのパワーを限界まで引き出し必殺技を放つ《セルバッシュモード》に移行する。
―キリッ、カッポーン―
《―セルバースト―》
セルバッシュモードになったブレストキャノンの砲身にエネルギーを溜めながら、仮面の頭頂部に埋め込まれた情報処理を統括する《マスターサーバー》が巨大ノイズの中心核を索敵し、中心核を発見すると眼を覆うU字型の黒い《ソリッドシールド》の奥にある赤く発行するカメラアイ《Uフラッシャー》に伝達され狙いを定めると、両手でブレストキャノンの両側にある体勢を支えるためのグリップを握りしめ、両足を広げて腰を低くして発射体勢を取る。
「ブレストキャノン、シュートッ！」
その発言の直後、ブレストキャノンから赤い光線が放たれ、巨大ノイズの中心部に直

撃しその巨体を貫いた。
「……っ!?」
「ドークター?」
「ひィッ!?」
ウェルは巨大ノイズが呆気なく炭化する光景を見て、言葉を失っていると彼の背後から肩を叩かれ、悲鳴を上げて後ろを振り向くと先ほど巨大ノイズを倒したプロトバースが彼の肩を掴んでいた。
「少しは反省してろってーの!」
―ビシッ―
「あふん」
プロトバースにデコピンされたウェルは、変な声を上げながら気絶し地面に膝から崩れ落ちた。
「全く手間かけさせちゃって……よっと。おーい聴こえるかマリアちゃん? 結構騒いだから二課の連中が来るかもしれないから、直ぐにこの場から移動しようぜ? 調ちゃんと切歌ちゃんにも後で合流場所を伝えてくれる?」
『ええ、わかったわ。今からヘリを出すから少し待ってください。……伊達さん』
「ん?」

ウェルを小脇に担いだプロトバースは頭部に備え付けた通信機で倉庫内のヘリの中から先ほどの戦闘を見ていたマリアに連絡を送る。それを受け直ぐに向かうと告げたマリアは通信を切る前にプロトバースに声をかけた。

『ありがとう。ドクターの凶行を止めてくれて……あなたが現れなかったら子供たちは死んでいたかもしれなかった。本当にありがとう』

「……ふっ。おう、気にすんな。それじゃ待ってるぜ」

彼女の言葉を聞いたプロトバースは照れくさそうに仮面の下で笑みを浮かべ、感謝の言葉を受け取り通信を切った後、バースドライバーからセルメダルを抜き取り変身を解いた。

――三人称視点、終了――

・
・
・

――カ・ディンギル跡地――

プロトバースこと伊達　将暉がドクターウェルを静めてから数時間が経った頃、誰も使われる事がなくなった道路を走行してるのはライドベンダーに乗った仮面ライダーオーズ――氷野　玲司が進路をカ・ディンギル跡地に向けて走らせながら、自身が向かう事になった出来事を振り返っていた。

・
・
・

『決闘？』

『ああ、今日の夕刻にカ・ディンギル跡地にて二課のシンフォギア装者達とＦ・Ｉ・Ｓのシンフォギア装者達の決闘が行われると伊達君から連絡が入った。そこで君にその決闘の場所に向かって欲しい』

デザイア・コーポレーションの社長室に呼ばれた氷野は目の前で手を組んでいる片桐眞人から伊達　将暉から入手した情報を氷野に伝え、彼に現場まで向かうように口にした。

『いやちょっと待て社長さん。シンフォギア装者達の決闘だろ？なのにその場に関係の

無い俺が行く必要があるんだ?』
『君の疑問はわかるよ。でもね予感がするんだよ氷野君』
　それを聞いた氷野は片桐に質問すると片桐は眉間に皺を寄せてそれに答えた。
『予感?』
『そう……もしかしたら、君と深く関わる出来事があの場所で起こるかもしれない。そんな予感がね……』

・　・　・

「俺と深く関わる……ね」
『気になりますか?』
　走行しながら片桐の言葉を思い出しているとライドベンダーに搭載されたサポートAIライドが主に声をかける。
「まあな。けど、社長さんの言葉は気にならないと言えば嘘になるがそれがなんなのか考えてもしょうがない。今は目の前の事を片付けからゆっくり考える事にする」

『わかりました。そろそろ目的地に到着します』
「ああ、さて……鬼が出るか蛇が出るか。それとも――」
――キキィーッ!――
「ノイズが出るか……てか?」
カ・ディンギル跡地に到着したオーズはこちらを見る先に現場に着いてノイズと戦っている二課のシンフォギア装者達と彼女達と離れた位置に立って、ノイズを周りに侍らせている白衣を着た男、ウェル博士の姿を視界に入れるとライドベンダーから降りて、ゆっくりと両者が向かい合う位置まで向かっていった。

・
・
・

――三人称視点――

「オーズ!なんであんたがここに!?」
オーズがある程度近づくと天羽　奏が槍を振るう手を止めずに声をかける。彼女の

問いに答えようと口を開こうとしたが、それを遮るようにウェルがこの場に現れたオーズに声をかけた。

「これはこれは、まさか魔王様自らこの場に来てくれるとはねぇ……これはお前を倒せと英雄になる僕にくれた神がチャンスを授けてくれたのかな？ウェヒヒヒヒッ！」

「くだらない挑発はやめるんだな。英雄になるとか言ってもせこい真似しか出来ない小物が俺を倒す？笑わせるな。そう言うならソロモンの杖を使わず自分自身の手で来いよ？悪党」

「あ〝あ〝っ！英雄になる僕を悪党だとぉ！世界を呑み込もうとした魔王が正義の味方面で言うなぁああっ！」

小馬鹿にした口調でオーズを煽るウェルだが、オーズはそれを気にせず、逆にウェルの自尊心を煽るとそれを聞いたウェルは逆上し、ソロモンの杖で召喚したノイズ達を指示しオーズに向かわせた。

オーズはトラクローを展開すると地面を蹴るように駆け出し、自身に向かってくるノイズに向けてトラクローを振り翳し一閃すると、瞬く間にノイズが炭化し崩れ落ちるのを皮切りに流れるような動きで次々とノイズを炭に変えその数を減らしていく。

「今だ！オーズに気を取られている内にソロモンの杖を！」

「取れると思ったかぁ！」

ウェルがオーズに気を取られている内にクリスがソロモンの杖を奪取しようと駆け出したが、そうはさせんとノイズを装者達の方に召喚させ時間を稼ぐが、その隙をオーズは見逃さず距離を詰めようと残りのノイズを炭化させて地面を蹴り砕きながらウェルに向けて駆け出した。オーズが自身に向かってくる絶体絶命の状況にウェルの表情は――

――待ってましたと狂喜の笑みを浮かべた。

「それを待っていたんだよぉ！やれ！ネフィリィィムッ!!」

その言葉の直後、オーズの真下の地面から前回より体長が大きくなったネフィリムが地面を砕きながら現れ、その巨大な口を開けてオーズを喰らおうと襲いかかった！

「何っ!?ガァっ!?」

「オーズっ！」

咄嗟に身体をひねり、ネフィリムの攻撃を防いだオーズだが、逃がさないと追撃するようにネフィリムが振るった腕が彼の身体を捉え、離れた場所まで投げ飛ばした。

「なんだあの大きさは!?以前見た時とは別物だ！一体どういう事だ！」

「成長したんだよ！コイツは聖遺物を食らう事で自身を成長させる事が出来る！この地に残留するエネルギーを吸収したおかげネフィリムはこんなにも成長する事が出来た！さあ、ネフィリム！魔王を喰らい更なる成長を僕に見せろぉ！」

現れたネフィリムが以前より大きくなった姿を見た翼が驚愕の声をあげているとそれに答えるとネフィリムにオーズを喰らうように指示を出すと、それを聞いたネフィリムは地面を砕きながら突き進みオーズに向かって襲いかかった！

「舐めるな！」

ネフィリムの突進を横に跳んでかわしたオーズは、がら空きになった胴体にトラクローを一閃したが、ネフィリムはそれに構わずオーズに向けてその巨腕を振り下ろしたが、オーズは慌てる事なく冷静にその場を飛び退き、真ん中と左側のコアメダルと取り出した二枚のコアメダルとメダルチェンジをした。

――タカ！――

――ゴリラ！――

――チーター！――

《タカゴリーター》にメダルチェンジしたオーズはチーターレッグの高速移動でネフィリムの懐に潜りこみ、ゴリラアームの拳をネフィリムの胴体に向けて力強く撃ち込んだ！

その拳の威力に悲鳴を上げたネフィリムはオーズに反撃しようと巨腕を振るったが、

オーズは既にその場を跡にした為空振りに地面を砕くだけになった。
　オーズはネフィリムの攻撃をかわしながら、ゴリラアームの拳を撃ち込み、チーターレッグによる連続蹴りを次々と浴びせ続けネフィリムを追い込んでいく。
「ルナ・アタックの英雄にして欲望の魔王、その力で何を守る！」
「何を…決まってる！この手が届く命を守る為だ！」
　ウェルは次々と拳と蹴りをネフィリムに浴びせていくオーズを視界に納め、彼に質問をするがオーズはその質問に答えながら、更に攻撃の速度を上げようと踏み込もうとする直前――。
「そうやってお前はッ！誰かを守るという大義名分でその力を振るい、そのつまらないエゴで無辜の民達を殺すんだよッ！三年前の小さな島に住んでいた島民を虐殺したようになァッ!!」
　――ウェルの放ったその言葉を聞いて動きを止めてしまった。
「なんだと!?」
「まさか三年前に起きた島民の虐殺事件の下手人が……」
「オーズ……なのか？」
　ウェルが言い放った言葉を聞いた装者達もその事実に驚きを隠せなかった。
「何…の事、だ？三年前の虐、殺……――ズグンッ！――グゥっ!?」

ウェルの言った言葉に何の事なのか問いただそうとした瞬間、突然彼の頭に途轍もない痛みが襲いかかった。

その痛み思わず地面に膝を突いたオーズは、自身の瞳が紫に染まりながら自身の脳内に見覚えのない風景と人物の映像が途切れ途切れに流れこむが、自身の本能がその記憶を思い出すのを拒絶するかのように痛みを強くする。

「アハぁ…チャーンス……」（ニィィタァァア……）

自身が発した言葉を聞いたオーズが動きを止め、更に装者達が未だ動く様子もないのを見たウェルは口を大きく歪んだ笑みを浮かべる。

「今だッ！オーズを食い殺せェッ！ネフィリィィムッ！」

「しまった！逃げろオーズっ！オーズ!?」

「グ、ガ……ガァァァァアアッ!?」

ウェルの目的に気付いた奏は逃げろと叫ぶが、彼女の声はオーズには届く事なく、紫に染まった瞳をしたオーズは獣のような雄叫びを上げながら、能力解放したゴリラアームとチーターレッグで迎え撃とうと駆け出し、理性を失った彼がネフィリムに喰われてしまうと誰もがそう思った……その時――。

―バクンッ！―

「……え?」

――装者達より早く動いた立花　響がオーズを庇うように伸ばした左腕で彼を突き飛ばすことで助ける事が出来たが、その代わり彼女の左腕がネフィリムに喰われてしまった。

「立花ぁぁぁぁぁっ!?」

食い千切られた腕から血飛沫をあげる彼女の姿を見た翼の慟哭が夜空に響き渡った……。

――三人称視点、終了――